
女鑑
第十九年第一號

女學部新設

實用女學講義錄 發行

▲本會は中學講義錄の發行に從ふこと既に五ケ年通信敎授に於ける甚深の經驗を基礎となし今回更に女學部を新設して『實用女學講義錄』を發行せり。

▲講習期一ケ年半、此間に於いて高等女學校程度の學課は勿論、本邦家庭の事情に照らし女子必須の諸科目を講說し圓滿なる主婦を作る事を目的とす。

▲講義錄は毎月二回發行とし講師は敎育に經驗深き斯道專門の名家のみ也

▲講述極めて平易、總ふり假名の談話體なれば何人も解し難き憂なかる可し。

▲毎月機關雜誌『新國民』を發行して會員に限り每號無料進呈す『新國民』は現代知名の專門敎育家及び斯道大家の訓話學說創作及び會員の投稿を揭ぐ。

▲會長尾崎行雄親しく本部を監せらる。組織整頓し取扱最も懇切也。且つ會費極めて低廉、都會一ケ月の遊學費を以て優に全學科を修了する事を得べし。

◉新學期開始——至急入會者に限り入會金全免すべし◉

見本つき規則 無料進呈

大日本國民中學會女學部

東京駿河臺

電話本局三千〇四番
振替口座四千二百番


内外國金銀名譽賞牌を有す
宮内省御用達
最上醤油
TRADE 上 MARK
醸造元
千葉縣銚子町
濱口合名會社
開業貳百六拾五年

〔第一九年一號〕

新春閑話

第壹編の目次

最廉にして多趣味なる本誌新春の大盛装

愛國婦人

一月元日發行 第百六十八號 毎月二回發行 一部参銭五厘

東京麹町飯田町一丁目 愛國婦人發行所 （郵便振替貯金口座一一三八一番）（電話番町五二〇番）




恭賀新年
贈答品として
適當なる物を
羽織紐、帯じめ
電話浪花百五十六番
振替貯金口座二八五六番
東京日本橋よし町
佐竹組糸舗


PEARL 毛髪料 CREAM
パール
毛髪の保護發育に注意せらるゝ諸君に告ぐ煉香油パールの有する特効は
黒色の美を全たからしめ特に頭髪の惡臭を去り衛生上唯一の必要品と認めらる
スミレ香水本舗
東京浜町一
平尾六店


手まり

大附錄 美人 岡田三郎助筆

新小説新年號

表紙 松羽衣（一中節十二題）和田英作

▼第拾四年第壹卷（一月元日初刷號）本欄小説目次

▼口繪
●石版彩色 鰭崎英朋
●寫眞色刷 岡野榮 谷洗馬 田代曉舟
●木版駒繪 山中古洞 鏑木淸方 鰭崎英朋
●寶來宮談話者寫眞二葉入

藝壇 寶來宮（本號附錄談話）

▼杵屋てる ▼市川旭梅 ▼鶴藤家いね ▼三谷屋小桝
▼市川翠扇 ▼金布袋家さだ ▼市川松蔦 ▼岩井米花
▼歌澤芝金 ▼河原崎紫扇 ▼松本錦糸

定價 壹冊 貳拾五錢
六冊 壹圓 五拾九錢
本號 郵税 金參錢

發兌元 東京市日本橋區通四丁目角 振替貯金口座東京一六一七 春陽堂

新正の御慶祝詞申収候
併て舊歳中は御愛顧を蒙り難有御禮申収候猶
本年も調製品に一段の注意を凝らし嶄新魁發
なる案出模様を御用命に應し度不相變一層の
御愛用之程伏て奉希上候

店主敬白

勅題模様
雪中松

御半ゑり帯揚類

幷ニ貴婦人方御携帯品附屬

新年松の内七日間大福箱壹圓と貳圓賣始め御年玉進呈

○獨特製ショール
○絞り形子クタイ
○絞り友僊長繻袢
○博多貳寸伊達卷
○絞り模様肩裏地
○疋田総絞り半襟
○ゑり治形○すゝめ形まげ入
○高等洗粉 特製チエリー

○獨特製男女首巻
○友僊染絞り帛紗
○友僊絞り繻袢袖
○京本場御召前掛
○別織六寸巾下締
○疋田絞りてがら
おろし小賣
發賣元

新橋本店 竹川町 電新二〇二七 ゑり治

神田支店 表神保町 電本局九五二 ゑり治

新橋際博品館 出店 ゑり治

東伏見宮両殿下





梨本宮御家庭



梨本宮妃伊都子殿下

方宮女王殿下

規宮女王殿下

北白川宮武子女王殿下



閨秀名歌十二ケ月

其一 雪中松

侯爵夫人 鍋島榮子君詠并筆

子爵 入江爲守君圖



中川愛氷珍藏

明治四十二年元旦

謹賀新年

白牡丹本店

店主 松田善治郎

東京市銀座尾張町

謹賀新年

香油中ノ優等香油



宮内省侍醫局
製藥所御試驗濟

純良白椿精製香油　しら井油

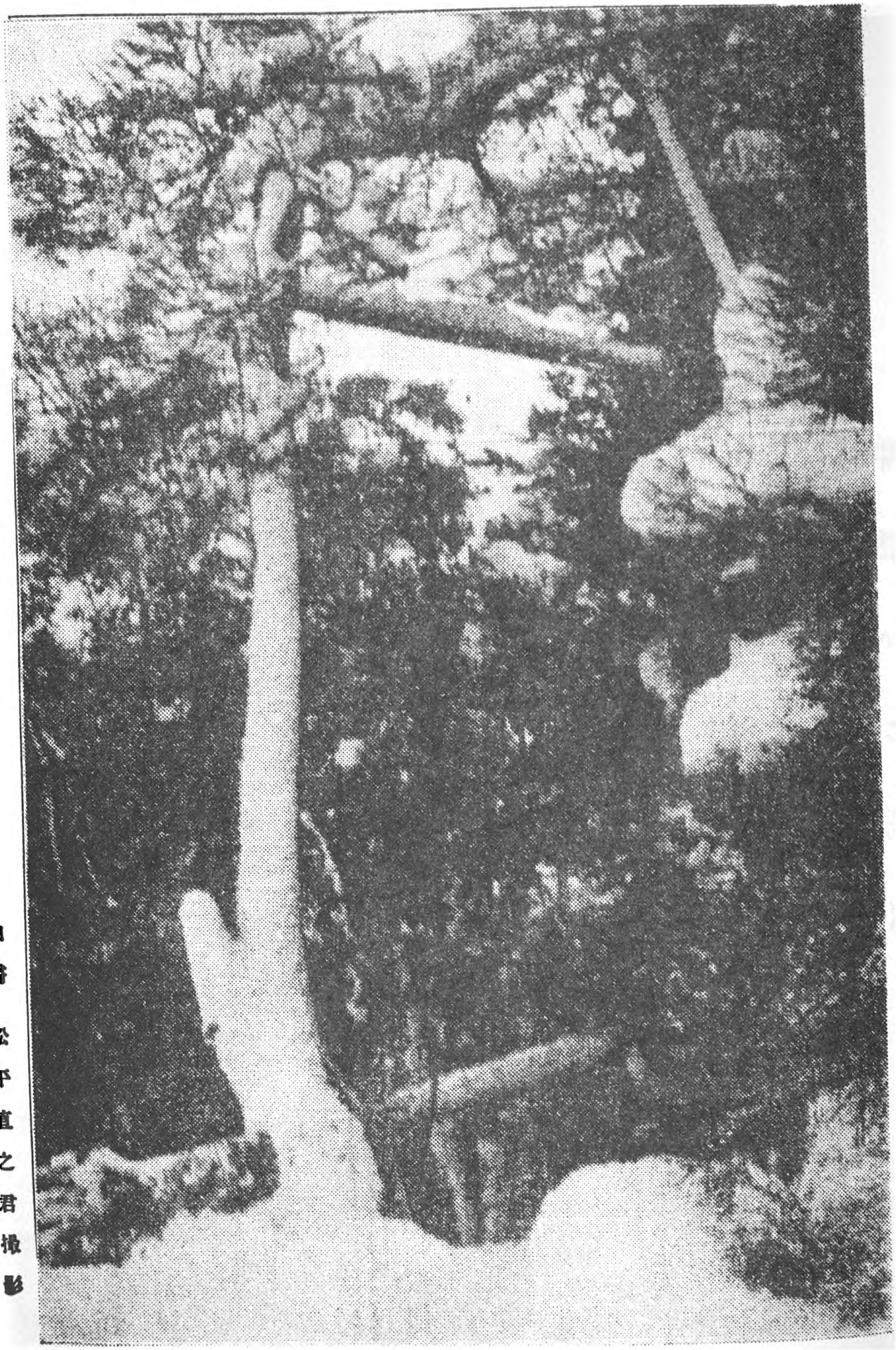
同上特製優等香油　しらぎく

椿製香油　新つばき

紳士貴婦人ノ好評品

發賣本舗　白井椿堂

雪中松



伯爵松平直之君撮影

長閑けき新春



井伊直方君撮影

松しま



伯爵 徳川達孝君撮影

福わらひ

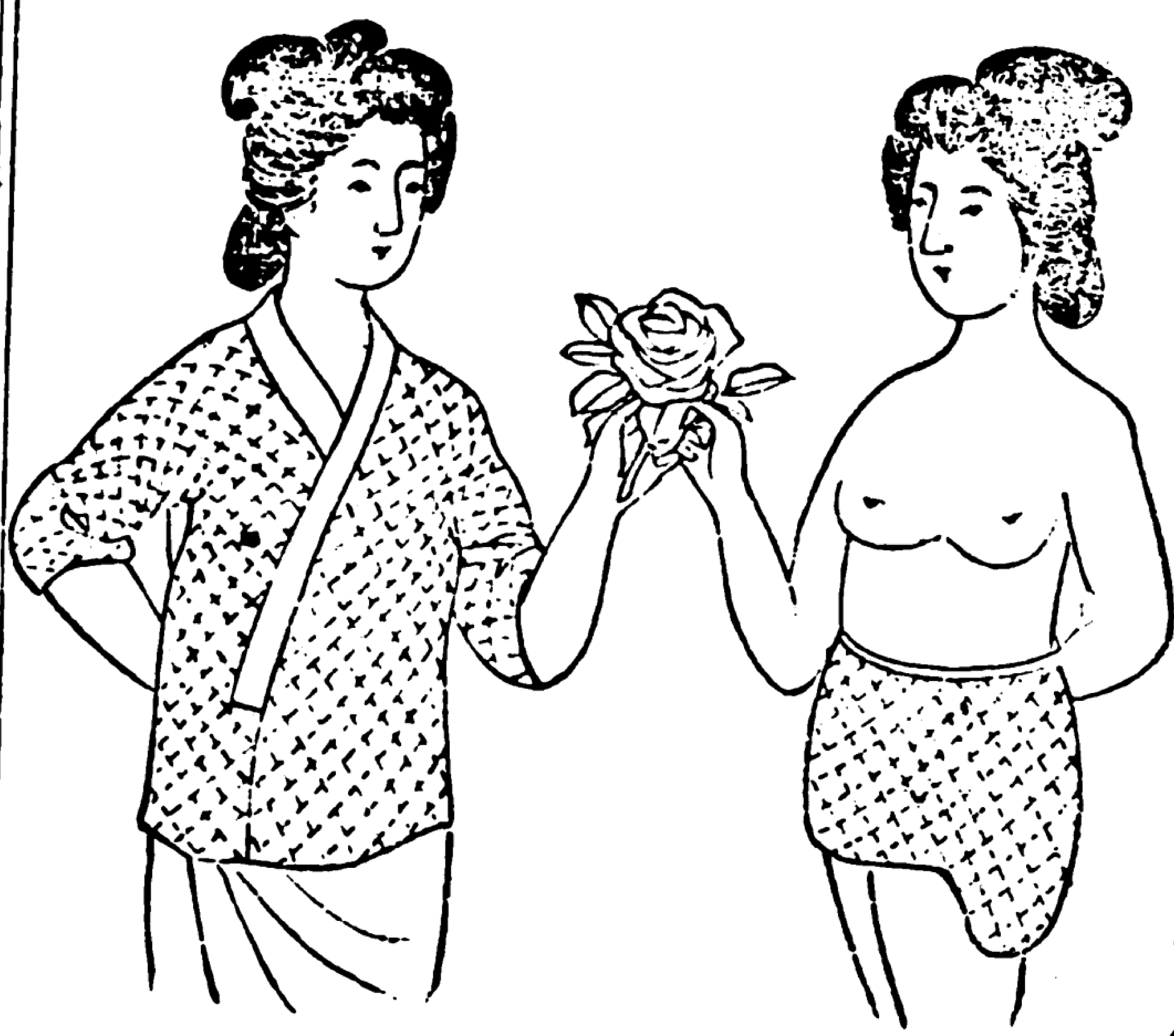


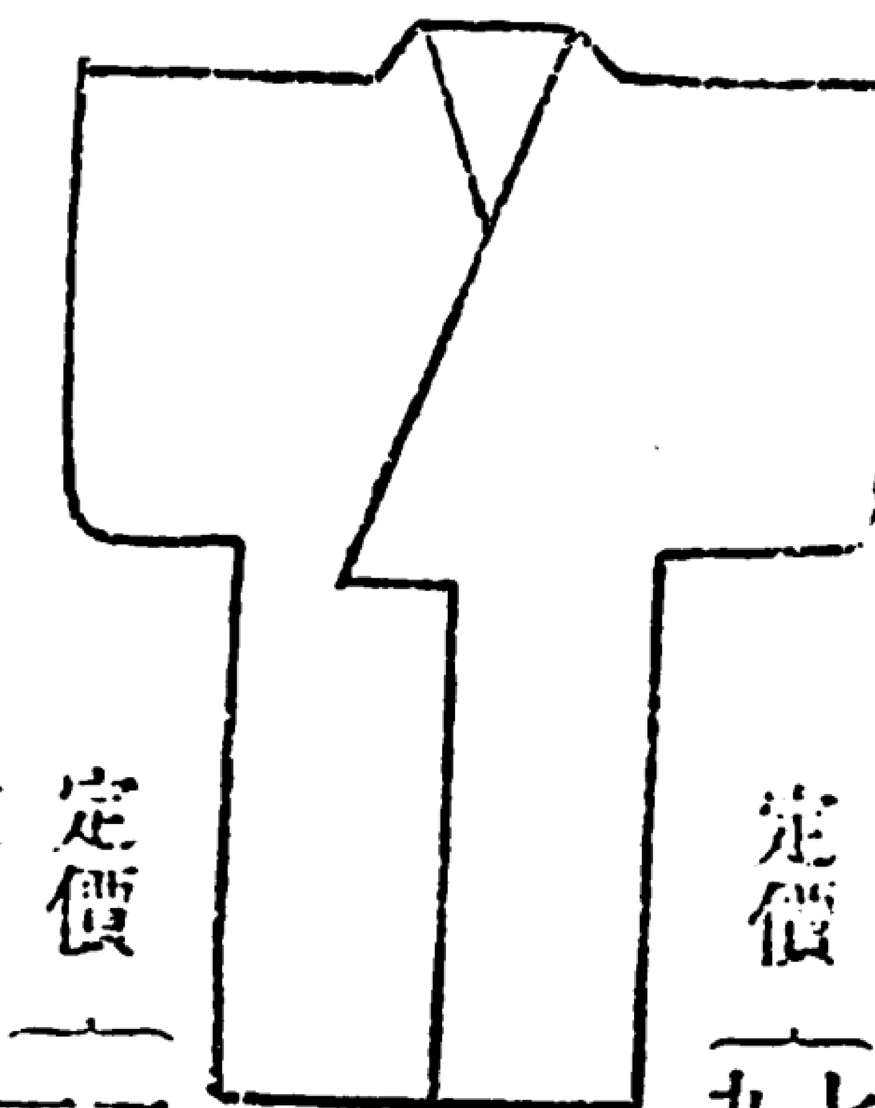
子爵N、I君撮影

専賣特許及實用新案登錄

洗濯の出來る

衣裳中入
吹留眞綿





男女着物羽織共
定價 一七十錢 九十錢

定價 一圓十錢 一圓卅錢
送料八錢

御婦人腰卷　眞綿細工　御婦人はだ着

吹留眞綿(すゐとめまわた)は三越吳服店、白木、松屋吳服店其外重なる吳服店綿店にて販賣す

最上等の眞綿製其の暖さと强さは普通眞綿の二倍餘を保ち淸潔にして衛生によく如何なる貴人の御使用にも適し其のまゝ着物にはいる樣に出來てをりますから御一人でも自由に御取扱ひができます

寒さ知らず眞綿細工腹卷、腰卷、男女、股引、肌襦袢、チヨツキ、ハンケチ

御婦人腰卷は優良の藥入眞綿製冷より來たる男女の一般病によく特に產前產後の方によき事は醫師產婆の證明する處です

定價 腹卷壹圓五錢　特製壹圓五十錢　腰卷壹圓六拾五錢
特製貳圓以上送料共

上圖肌着は製法薄く召した姿たもよく暖さと其着心地は無上の品にして殊に幾度びか洗濯が出來ますからいつも奇麗でをります

定價普通製貳圓五拾錢　特製參圓

眞綿製ハンケチ
箱入壹打金參圓貳拾錢
年始御進物には絶妙の品なり

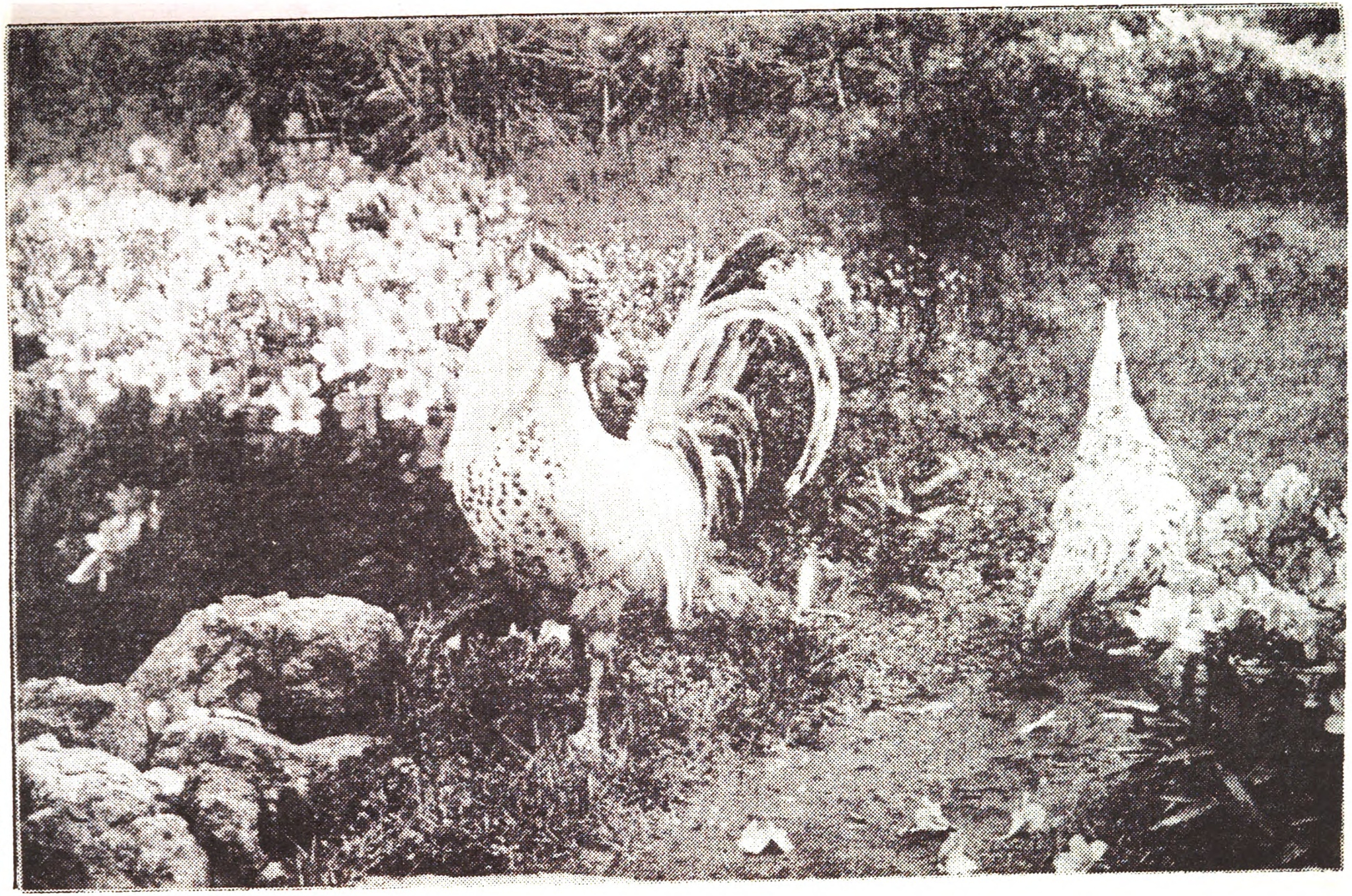
東京丸ノ内 報知新聞社代理部
京橋南紺屋町 實業之日本社代理部

綿問屋
東京市京橋區銀座四丁目 電話新橋一七七六
振替口座九四三二
大和屋商店

綿絲問屋
東京芝區西久保巴町 電話新橋一五四九
さかいや商店

○受賣御望の御方は特約店へ御申込を乞ふ

庭つ鳥



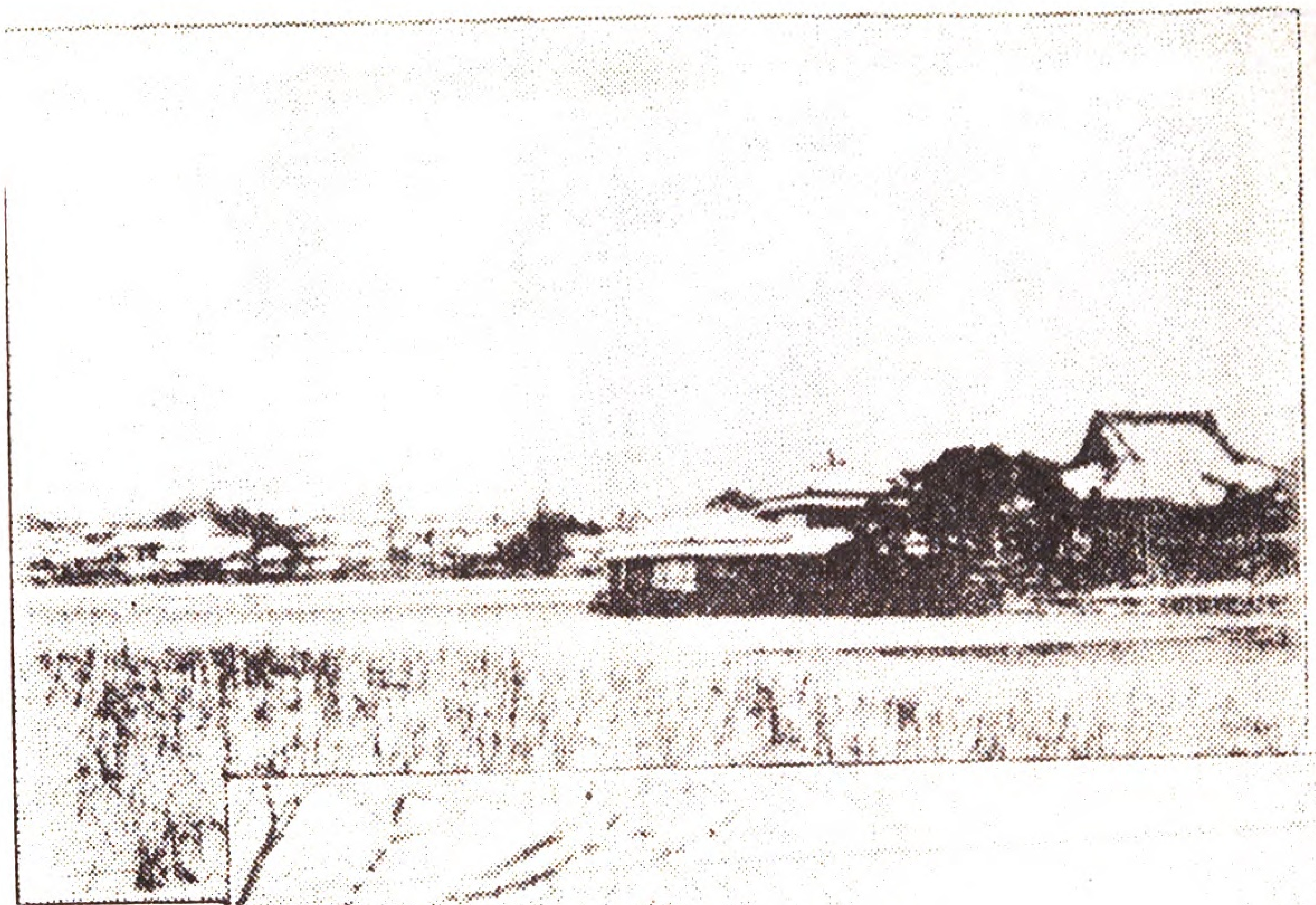
子爵 松平乘長君撮影

羽子板



井伊直方君撮影

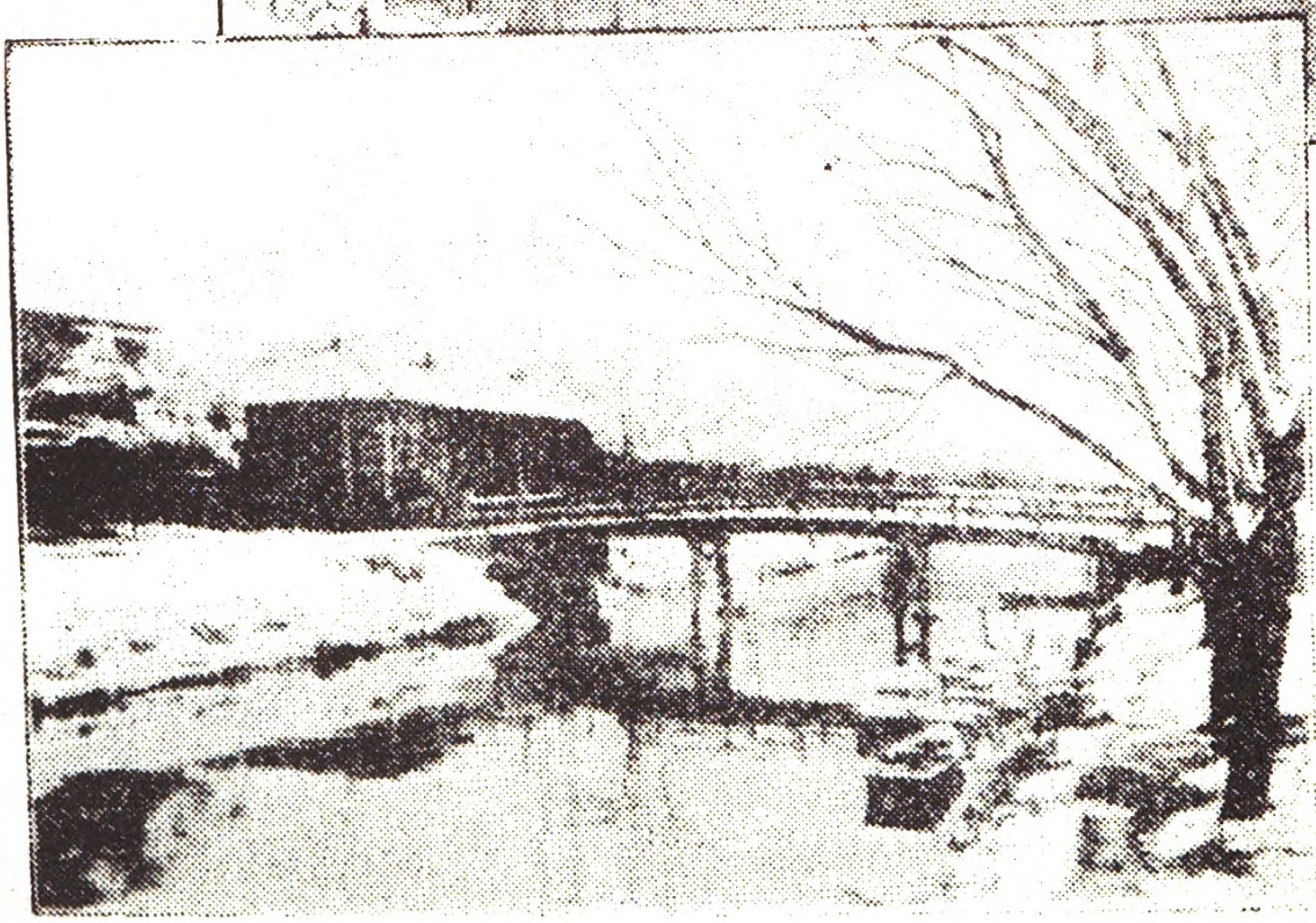
雪げしき



不忍辨天

T、M君撮影





江戸川

K、M君撮影

姿勢百圖



新春の盛装を凝せる婦人世界全[illegible]の美觀

材料豐富

婦人世界

內容整頓

正月一日發行 毎月一回發行 四卷第一號 一冊拾五錢 郵稅一錢五厘 半年分郵稅共一圓五錢 一年分二圓五錢

◎破天荒の大文字 男女必讀 夫婦愛情論……[illegible]

◎生涯を通じての大愉快……棚橋絢子

◎日本婦人を妻とせる英國紳士の細君評

◎支那の宮妃殿下を訪問す……侯爵夫人 鍋島榮子

◎初産當時の所感……下田歌子

◎私が三人の娘を嫁がしやる當時の實驗……公爵大山巖夫人 大山捨松子

◎新渡戸博士が養父の意に従はず西洋婦人と結婚せし話

◎流行の衣裳と顏に[illegible]衣服の着方……高橋義雄氏夫人 高橋千代子

◎大珍附錄 日本名流婦人の今昔

第一流の婦人數十名の今昔の寫眞大判附錄珍又珍

◎三十七歳にて始めて結婚したる實際談……前高等師範教諭 牛田のち子

◎四十六年前の正月よりつけた私の日記……跡見女學校長 跡見花蹊

◎婦人の毛髪を美しくする最良の方法……醫學博士 岡村龍彦

◎美しき師弟の情……下田歌子

◎十五人の子女を牛乳にて育つ

◎高輪御殿のお正月……小山中佐夫人 小山みよ子

◎京都婦人と東京婦人比較

◎名流婦人の頭相判斷

當代名流婦人の運命性行を縱横無盡に解剖批判す痛切を極むる大珍品本誌獨特也

麹町區有樂町二十番地 實業之日本社 （郵便振替貯金口座參六番）（電話新橋八七四番） 賣捌全國各地書店





新年の御慶

めでたく申納候、扨多年養育いたし候縁にて、昨年の秋わが子に申受け候女鑑こと、ことし十九の春を迎へ候、是迄は幾人かの師傅に册かれ、數限りなき姫君たちの愛顧を受けて、蝶よ花よと慈まれ、荒き風とはいづこを吹くものかと言はぬばかりに相育ち候ふものから、御朋輩のやうに氣と申すもの更に利かず、言葉づかひ迄が古めかしくて、何が何でも振つてさへ居れば、よくつてよと申す譯には參らず、定めて齒痒ゆう思召さるゝ向もこれあるべくと存じ候へども、親の慾目か、まことに素直にて、いづれの御家庭へ差出し候ふとも、愛想をつかさるゝ事だけはあるまじくと存じ候、去ながらいつまで窓深うも住はされず、これ迄養ひし品性を磨きつゝ、花々しく着飾らせて、この春よりは目覺しく社交界に立たせ度と存じ居候

中川愛氷



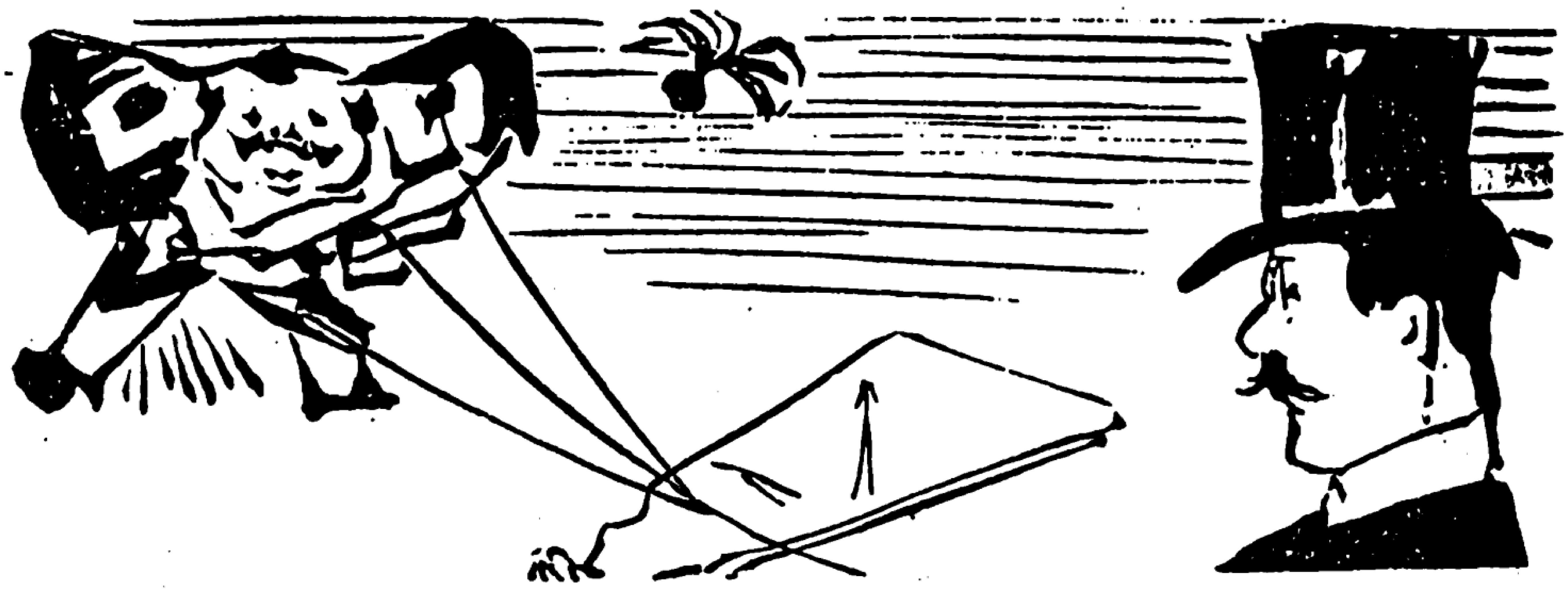
新年の遊戯は何が宜いか

文學博士　井上哲次郎

一昨年の事と思ふが、文部省に於て歌留多の遊を禁ずるとか、禁じないとか云ふ噂があつたので、だん〴〵聞合せて見ると、多少左様いふ考の人もあつたとの事である、併しながら省議が其處に一致したと云ふのではないから、無論省令としては出なかつたのであるが、兎に角左様いふ議論も根底のないのではないのでそれが一時多少世間の問題となつた次第である。

言ふまでも無く歌留多遊は、惡く用うれば隨分弊害もある事であらう、例へば、青年の男女等が入交つて深更までも遊び戯れて居る中には、遂には過が生じないとも限らない、併し新年に於ける室内の遊戯としては未だ我國には他に之に優つた遊戯が無いやうである、何分新年は多少閑暇の時間を得て居るのであるからして、何か室内の遊戯が無くてはならぬ、若し何か面白い遊戯が無いと、却つて夫より大なる弊害が無いとも限らない、小人閑居して不善をなすと言ふではないか。

西洋では室内の遊戯娯樂が旨く出來るやうになつて居る、例へば、親戚や知己等が集つて唱歌を歌つたり、樂器を彈じたり、又は舞蹈なぞをするのが通例である、この舞蹈の如きは何うも我國の家庭内では一寸出來ない、それに之を知つて居る者は外交官等を除く外には餘り多くない、それに普通の家に適しない事は、我國の家の構造は云ふまでも無く、座敷に疊が敷いてあるので塵埃が立つて不可



ないのみならず、八疊や十疊の座敷では、彼方の隅に突當り、此方の障子に衝突し、それに一体天井が低いから不適當である、斯ういふ風で我國に此舞蹈室が設けられてあるのは僅々有數の華族位に過ぎないのである、去れば國民一般の遊戯としては何うであらうか、また將來とても之が我國民の遊戯として廣く行はるゝか如何かと云ふ事に就ては疑はしいのである。

そこで今日のところ新年の遊戯としては歌留多に如くものはあるまい、併しそれとも之に優つた遊戯が出來れば之に越した事は無いが、何か新遊戯が流行するまでは此の歌留多遊を禁ずると云ふ事は出來まい、それに代るべき物無くして禁するといふ事は宜しく無い。

歌留多遊といふものは却々利益もあるので、新年早々から文學趣味を注入する事も其一に數へらるゝ、固より歌留多遊をする者の總てが歌を作るものではないが、幾回か斯遊戯を繰返す間に知らず識らず古歌を暗記する、その古歌の語句を暗記する事が、やがて將來歌道に緣を結ぶ事ともなるのである、それに殆んど既往一年間に忘れた頃、又新年の初に於て之を繰返して玩ばしめ、そして女子の頭惱に之を注入すると云ふ事は强ち咎むべきではあるまいと思ふのである。

尤も彼の百人一首の中には戀歌なるものが少くない、併し斯遊戯をする者の凡てが、果して皆能く其趣意が解れば兎も角、何か可笑しな事もあるか知れないが概ね斯遊戯をする者は勝負といふ事に氣を奪られて居るから、餘事などを考へて



居る暇はないので、割合に弊害が尠いと考へる、併し是迄の百人一首にはさう云ふ戀歌があるからいけないと云つて、彼に代ふべきものを作るといふ事は容易に出來ない、假りに改撰して見ても、從來の百人一首は已に業に我國民一般の習慣となつて居るから、なか〳〵容易に新に撰んだものが行はれやうとは思はれぬ。それに從來の百人一首には戀歌が多いと云つて見たとて、その言葉は遠く時代の隔りたる古語であつて、讀みながらも今日の場合とは異うやうな感じがして居るから、敢て卑猥な陋劣な考を起すといふやうな心配はない。

それ故に若し歌留多遊に弊害があるとしたならば、それを除くべき方法を講ずるのが肝要である、一体舞蹈などでも左樣であるが、世の中の事物といふものは單に利益の一方で弊害の無いといふものは無いのであるが、去ればとて其弊害の一方のみを見て、併せて其利益の點までも棄てゝ仕舞うとするのは穩かなる處置ではあるまい、今歌留多遊に弊害があるとしたならば、之が弊害を除くべき方法を講ずべきに、それも仕ないのみならず、又之に代るべき物も與へないで、頭から之を禁じて了つたならば、新年をして非常に索寞たらしむる事になる、依つて之を禁ずるも亦禁じないも、深く慮つて而して後實行しなければならぬ事と考へる、この見地よりしたならば、先づ歌留多遊は新年の室内遊戯として、子女の玩ぶべき恰當のものであらう。（文責在記者）



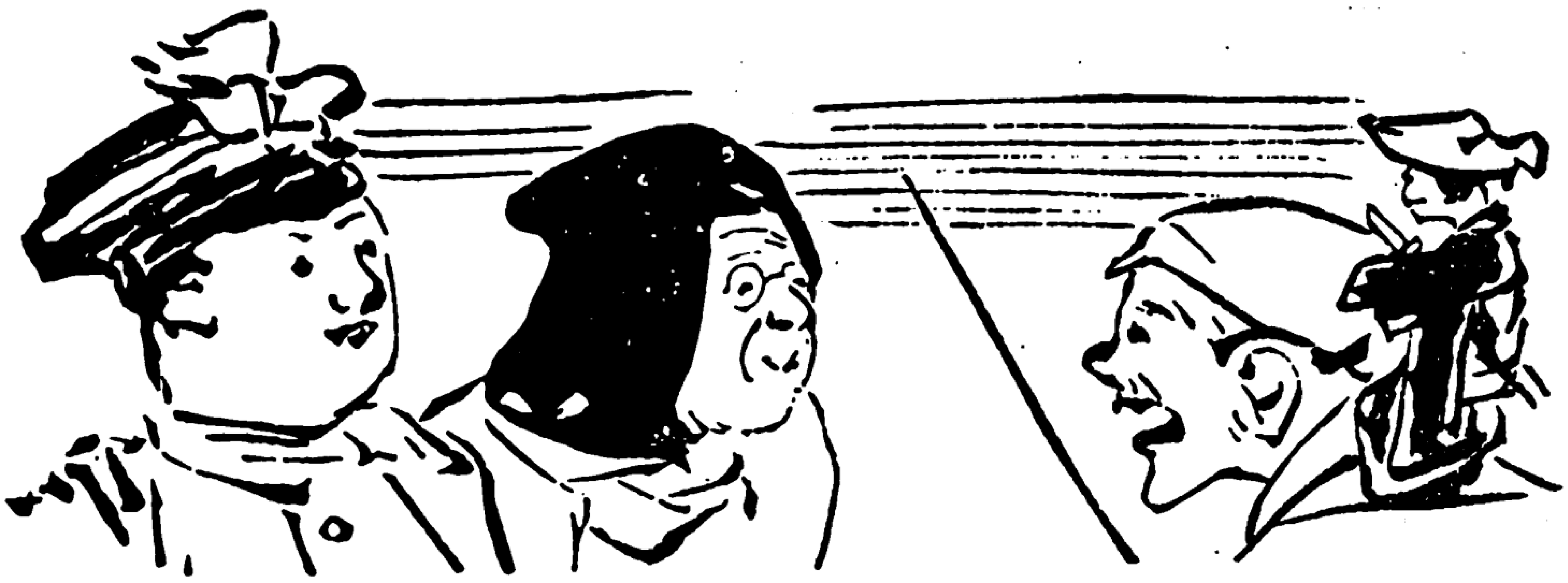
新年の娯樂より享る利益

法學博士　寺尾亨

無邪氣な子女達の新年の娯樂としては、まづ歌留多遊が適當であらうが、大人たる者が之に凝るといふは甚だ面白くない、聞く所に依れば或一部では態々斯遊戯の會までも組織して貴重な時間を空費する者があると云ふ事だが、實に其は愚の極と考へる。

言ふ迄もなく運動的のものでも、過ぎたるは猶ほ及ばざるが如しで、餘り過ぎると却つて害がある、況して室内的のものに於てをやである、それ故に予の家では新年でも、萬更斯遊戯を遣らせないといふ譯では無いが、ホンの御馳走に人を招いた時に所謂時間ふさげのお慰みに爲るといふ位に止めるのである、この歌留多遊に比べると双六の類は無邪氣で宜いやうに考へる。

尤も予の家でも年を取つた子供達には西洋の歌留多を玩ばせるが、それも物を賭けて爲るといふやうな仕方は避けて、主に點取といふやうな遊戯を行らせるのであるが、之には多少掛引を要するのであるから、從つて惱力發達の點に於ても稗益する事が少なからぬのである、この他日本の將碁や圍碁も多少時として行らせもし、又自分でも玩ぶ事もあるが、是等も所謂凝つては思案にあたはずとやら餘り凝つては不可ぬ、それに自分は兄弟四人もあつて、幼少の頃から亡父が室外で悪戯を爲るよりも宜いと云ふ考でもあつたか、時々之を玩ばしめられたのが幾



らか素地を爲して居るのかも知れないが、稍興味のある事と思ふので子供達にも弄ばしめるけれども、深く之に首を突込むといふ事は誡めてある。

日本の將棊に比較すると西洋將棊の方が、駒の突方も自由自在で頗る範圍が廣くて遣り易いから、自然趣味が早く子供にも解かるのである、之は元々西洋人の言つた事であらうと思ふが、予は某日本人から聞いたので、

娯樂には技能と運命の備つて居るものであるが、それも其人の腦力とか又は性質によりて、何れか一方に片寄るの差のあるもので、例へば、智識の少い者には運命に屬するものが喜ばれ、之に反して智識の多い者には技能に屬する物が好かるゝと云ふ風に岐かるゝのであるが、併しそれは同一の玩具でも其取扱方に由つて左樣云ふ風に岐るゝのである、この點から見ると日本の玩具は運命に屬するものが少くして技能に屬するものが多いのであるから、云はゞ智識の多い者には好かれないと云ふ傾がある、同じ將棊でも西洋のものは前述の如くであるのみならず、彼地では將棊を以て一番高尚な遊戯として居る、尤も西洋の將棊には二種類あつて、單に日本將棊と同じ駒のみのものと、他に挾み將棊とでも名けやうか、一種異つたものもある、けれども此將棊は彼地で誰でもするといふ譯では無い、ツマリ閑人でなければ玩ばぬのである。

右に述べたるが如く日本の圍碁や將棊は多く技能に屬する所から、例へば、碁を一つ圍むにしても劣者は優者に對して何目を置くとか、將棊なれば飛車角二枚



乃至一枚を優者が除すといふやうな工合であるから、何うしても西洋のそれの様に一般に行はれない、併し日本の碁將棊の類とても、多少修養の上に益する事が無いではない、例へば、負惜みの心を矯正するといふが如き、尚ほ親切に云へば優者に對しては到底學んでも自分は及ばない事である、最早それに對して打勝うなどゝいふ非望を懷かなくなるのである。

すべて世の中のものには善惡の二方面のあるもので、女子が芝居を觀る事にしても、觀やうに依つては教訓ともなるのであるから、強ち之を制するにも及ばぬのである、大隈伯だと思つたが、彼の世間で餘り品の善くないと云はるゝ浪花節やチヨボクレのやうなものでも、隨分是まで下層社會を感化するに就ては與つて力があつたものであると云はれた如く、物は聞きやう見やうに依つて利益ともなり又弊害ともなるのである。

予が經驗によれば、學生時代に時々講談なるものを聞きに出掛けた事がある、然るに一夕、さう上手な講談師でも無かつたけれども、左甚五郎が一個の大黒の像を刻んで、それを鴻池の大盡へ持込んで買取つて呉れと云ひながら、少しも頭も何も下げないで談し込んだと云ふ事を聞いて、思はず自分は斯う考へた、成程一個の技術でも彼が如く巧妙に達すれば、決して權威に屈する事も無ければ、また富豪に媚るといふ事も無い、實に人としては斯くあらねばならぬと、坐ろに獨立の精神を發揮すると同時に、非常に愉快に感じた事がある。

面白き諸人種の禮法

理學博士　坪井正五郎

日本人は頭を下げ、西洋人は手を握る、日本の事情を知らない西洋人は、お辭儀を見て蛙の眞似と思ふかも知れない、さればとて西洋の様子を心得ない日本人は、握手を見て引張り合ひと誤解せぬとも限らぬであらうが、併しそれは彼も此も慣はしであつて而も相互が親愛と敬禮の意を表するに於ては一つものである、即ち日本人は頭を下げるを以て挨拶の法とし、西洋人は手を握るを以て挨拶の法としたからとて、その間に孰れが是であるとか、また孰れが非であるとか云ふやうな論は毫も存しては居らぬ、今左に一二の實例を話さう。



アイヌは男と女で禮法を異にして居つて、男子の禮は先づ兩の掌を擦合はせて拜むやうになし、次に物を戴くが如く兩手を額の邊まで擧ること二度、それより双方の手を頬に當てゝ下方に撫で下し、その儘臂を張り終つて手を放すのであるが、以上の運動に伴ひて『イラムガラプテ』といふ、丁度我々が御機嫌宜うにする、之が男子の挨拶法で却々こみいつて居る、之に反して、女子の禮は甚だ簡單なもので

たゞ人差指で自己の鼻の下を横に撫でるの以て禮として居るのである。

次にヒンヅウ人は如何かといふに、身分の高下に依つて異ふ、まづ貴人に對すれば、兩掌を合せて額の邊に上げ、次に双方の手を身体の側面に垂れるのが法となつて居る、併し畧式には單に右の手のみを用うるので、即ち右の手を額に當て、次に体側に垂れる、そして婦人に對しては禮を施すといふ事は無い。

キルギス人は是また簡易で、先づ片手を胸にあて、次に他の手を胸にあてるだけである。

それからアラビヤ人には却々種々の禮法があつて、對する者の高下に由つて体の運動までも異にするのであるから、先づ簡略なるものから順に擧れば、

(イ) 右の手を胸に當るもの、(ロ) 右の手を唇および額に觸るゝもの、(ハ) 頭を少く前に傾けて右の如くするもの、(ニ) 身体を少く前に傾けて右の如くするもの、(ホ) 右の手を上に着けて右の如くするもの、(ヘ) 先方の手に接吻するもの、(ト) 先方の袖に接吻するもの、(チ) 先方の衣服の縁に接吻するもの、(リ) 先方の足に接吻するもの、(ヌ) 先方の敷物、又其前の地面に接吻するもの、といふやうに種々の區別がある。

中央アフリカの土人中には、柏手を以て禮とする所が多い。

アウストラリアの土人が來客に接する時は、客の胸と我が胸とを抱き、ウーウーと唸る。

ダホメ人が貴人の前で挨拶するには、腹這になつて塵埃を被るのが禮である。

南洋のパンタス島にては、彼我相互に右の中指を摘んで、急に引きて音を出させるのが禮となつて居る。

この外印度のトダ人は貴人の足を頭に戴くを禮とし、フイジイでは互に身体の香を嗅き合ふを以て挨拶法とし、アフリカのバコタ人は、貴人に遇へば仰向けに倒れ、キナボンバキナボンバといひながら轉げ廻るの

慣はしである、またニウジーランドにはタンギといふ事がある、之は久振りて出逢つた者同志が行ふの禮で乃ち兩人が向合つて、蓆のやうな衣服にて面を覆ひ、そして目のみを現はし、豚のやうに唸りながら段々に近寄り終に鼻と鼻との押合を始むるので、その長い時間のものは三十分にも及ぶさうである、尚は一つ變つたものを云へば、チベツト人であるが、この國の人々は左右の拇指を立て、臂を張り、体を前方に傾けて舌を出すを以て禮として居るのである。

諸人種の行爲を通覽するに、挨拶法の奇風は決して右に列記したる數例に止まるのでは無くして、尚ほ更に意外なるものが少なくは無いのであるけれども、予今是等を揭げ盡さうと企つるものでは無い、要するに挨拶といふものは、人類が相互に親愛敬禮の意を表するに在るものであつて、且らく其形式が種々に岐れて居やうとも、それは單に習慣に由るものであるから、相互に誤解して感情を損しないやうにせよ、といふ事を示せば足るのである。

新春の寒さを如何に凌ぐか

醫學博士　土田卯三郎

神經質の婦人だからとて、敢て寒中に限つて別段の手當を要する筈のものでは無い、一體我國の人達は人工の手當が過ぎる、世界の廣き各々人種も異へば氣候もまた差うのであるが、その暖國に住む者も或は寒國に棲む者も、既に業に造化が左樣してあるので、今更人爲で之を如何とも爲る事の出來るものでは無い、去れは手當と云つても亦自然に從ふの外は無いのである、我々は產湯といふものは溫湯で遣うものと思つて居ると、アイヌで小兒が生れると冷水を浴はしめるのであるから、云はゞ產水である、之も衞生上や我々の專

門からは種々の議論もある事であらうが、已に自然がさうさせて居るので、それで毫も不都合の點を見出さないのみならず、彼等は我々と同じく健全なる體格と腦力とを保つて行けるのである。

我々は春も秋も長く、又寒暑の度も中間なる適宜の國に居るので、斯んな仕合せな事は無いのである、去れば敢て特別の手當などをする必要は感ぜぬのに、動もすれば寒中になると、避寒などゝいふ事に出掛ける向もあるやうだが、それは極老人は別として、普通健全な身體を有つた者は、男女に關はらず轉地などの必要は無いけれども時も金も轉地を許すと云ふやうな人が出掛けるとなれば、予は成るべく氣候の變り目に遲く行くやうにと勸める、何故といふに、是まで非常に寒い土地に居た者が、急に暖い土地に轉ずるといふやうな激變があると、それが却つて健康を害するの原因となるからである。



それ故に取除けの例外は別として、新年一月の休暇といふやうな事を利用して轉地しやうと云ふならば、温泉場や又は旅宿や料理店等も澤山に在るといふ場處よりも、寧ろ不便な處へ彌次喜太的の旅行をせられん事を望むのである、例へば、神社佛閣を巡拜するとか、或は何處其所の山に登るとかいふやうな事であつた

ならば、其は何時でも構はない、左樣いふ事は、半日すれば半日の利益、一日すれば一日だけの利益があるのである。

寒いからと云つて病氣でも無い者が殊更に彼此と手當をするのは宜しくない、左まで手當をしないでも寒さに堪へられぬ事はあるまい、手近い例が、今日此頃のやうに北風がビユー／＼と吹く時に、車夫は汗を垂らして曳いて居るにも拘はらず、車上の人は却つて震へて居る、之に依つて見る時は、運動すれば寒さを防ぐ事も出來るのであるから、寒い時の必要は運動であると言ひ得らるゝのである、併し事情が許さないで人力車や馬車などに乘る者は別として、出來得る限りは車等に乘る事は止めて貰ひたい、左樣すれば健康上および經濟上にも非常に利益が多大なのである。

一体市街に電車の出來たといふものは、何も人間を惰弱にしやうとの考では無い、西洋などは無論であるが、我國でも追々市街の中央は商業等の爲に家屋が櫛比して居るので、從つて空氣も良くない、そこで住居は町外れの成るべく空氣の好い處に設けて置いて、其處から本業の場處へ往來するには、出來得る限り時と金とを節するの手段を取らなければならぬとか、また其他にも澤山な理由の下に設けられたる謂ゆる文明の利器なるものである、然るに之を惡用して、チヨツト十分か二十分で往來の出來る處でも小僧までが、電車に乘る、斯ういふ風であるから從つて文明病などいふものが流行する、それと同時に身体が弱くなるから延て腦力までが弱くなる、これを皮想に考へれば何でも無いやうだが、個人としては十分に活動する事が出來ない、また國家の上より見て非常に不經濟極まるのである。

要するに寒い時だからと云つて別に人工の手當を施すには及ばぬ、成るべく自然に從つてさへ往けば、夫が何よりの健康法である、そして其の第一着は運動であるから、若し屋外に運動する事の出來ない者は、室内

か又は庭園内でも運動するやうにしなければ不可ぬ、之が十分に出來さへすれば、毫も寒さなどは恐るゝに足らぬ、之に次ぐものは精神の安逸で、之を得るには睡眠が其根本である、尚ほ之に就ては詳細に述べたいのであるが、新年の事であるから、いづれ後の機會に讓ることゝしやう。（文責在記者）

愉快なる家庭をつくれ

藥學博士　丹波敬三

東洋でも西洋でも、一般に男子は外に働いて婦人は内に在りて家政を整理するといふのが通常である、もし男子が内に在りてグズ／＼して居るやうでは、迚も男子の本分を盡す事が出來ないのみならず、從つて相當の收入といふ所では無い、或は一家五口を支へることさへも出來るものでは無い、それ故に男子たる者は出來得る限り、力の及ぶだけ社會に出でゝ活動し、そして成るべく多くの收入を得るやうにしなければならぬのであるが、左樣するには何しても内で主婦たる者が家政を整理して吳れなければ出來るものではない。

一口に家政の整理といふけれども、これは却々複雜て居て迚も男子などが左樣いふコセ／＼した事をして居らるゝものではない、どうしても之は婦人に限るのであるが、兎角世間の男子を見るに、收入の多少に關はらず、その全收入の内の幾分を割て家婦の手に渡して、恰かも

家政整理を一箇の請負事業

のやうに爲せて、その餘は總て自分の隱囊に押込んで置いて、そして其が如何いふ風に費さるゝのであるか又は使ひ拂はれて仕舞つたのか、頓と家婦をして其使ひさきを知らしめない者が多いやうに見聞するが、予は決して左樣いふ事はしない。

一體婦女子といふものは心の小さいものであるから、男子の全收入を擧げて家婦の手に渡して了つたかとて、決して其をみんな費つて仕舞ふやうの氣遣のあるものでは無いのみならず、左様いふ風にして置けばそれを以て良い鹽梅に繰廻して往つて、多少月末には幾分の餘剩を出し、そして之を貯蓄し、積んで相當の額に達すれば、之を以つて或不動產を購めるとか、又は其他の物を求めるといふ風になる、斯うなると主婦が家政を取扱つて往くにも非常の樂みを以てするから、總ての上に於て利益が多いのである、之に反して、前に云つた如く一箇の請負事業のやうにして仕舞ふと、知らず〳〵無意識に不經濟を來さしめるやうになるそれは家婦たる者の罪では無い、主人たる男子が責を負はなければならぬと予は考へる。

男子が腕限り根限り働いて多額の收入を得て、之を全部家婦の手に渡して置いたとて、前述の如く婦人たる者は小心翼々であるから、それが入つたとて遊山や觀劇などに浪費する事もなければ、又衣服や頭の物などに注入で了うものでないのみならず、必ず其内の幾分を節して、病氣その他不時の出來事の爲に備へて置き、尙ほ積んで相當の額に達すれば不動產等を購ふ、假りに不動產を求めたとすれば、其所有者の名前は誰かといふに、家婦では無い矢張男子の名前である、それでも家婦は非常に悅んで居る、それ故に男子たる者が家政の整理を一箇の請負事業のやうに、收入の幾分を割て主婦に渡すといふ事は甚だ宜しきを得たるもので無いと同時に、家婦たる者は收入の金額を渡されたからとて、右に述べたやうな心得で使ひ拂ひをして行かなければならぬ。

次に之も結局る處は金錢問題に皈着するのであるが夫は外の事でもない、我々が大切な生命を繼ぐべき食料のことである

固より金錢を濫費してはならぬ、出來得の限り節約もしなければならぬのである、けれども儉約をしなけれ

ぬならぬと言つて、大切な生命を繋ぐべき食料にまで其累を及ぼすといふ事は、之は甚だ拙劣の仕方ではあるまいか、去れば牛肉は滋養に富んで居るからと云つて、毎日々々葱を牛肉で煮たのばかりを食べさせられては閉口せざるを得ない、故に時としてはビフテキとなし、若くはカツレツにすると云ふ工合にしなければ不可ぬ、その繰廻しは主婦の機轉にあるのである、之に反して、節儉が本意だからと云つて滋養にならない物ばかりを食べさせられては堪るものではない、之は主人たる男子ばかりでは無い、家族一同の不幸といふものである、假りに稼人の男子が一日病氣で寢たとしたならば如何であらう、直ちに若干の損失となるのである、然かも食物が善良でさへあれば、決して病氣などに侵さるゝものでは無い、病に罹つて醫者に掛り、そして藥禮を拂つたりする事に比べると、常に滋養物を用ゐた方が幾ら得策であるか知れないでは無いか、再言すれば、不必要な物を高く買う事も要らないではあるまいか。

そこで之は滋養が多い、あれは少ないといふやうな事柄を知らうと思へば、婦人衛生會雜誌とか、又は通俗衛生雜誌とか、若くは日本私立衛生會の雜誌とかいふやうな種々の雜誌に親切に説いてあるから、夫等を見れば直ぐ解かる、又左様いふ事を聞かうと思へば、是亦さういふ類の會が時々に公開せらるゝから、其處へ往けば聞く事が出來るのである、尤も極下等な勞働者即ち其日稼といふ家の主婦たる者は、素養が無いから夫等を見ても咀嚼だけの智識も無く、また爾ういふ餘裕もあるまいが、中流以上の家庭に於ける主婦たる者は、時間に於ても亦資本に於ても之が餘裕を得ることは決して難くない、十分にあるのである。

それに就て想起す事は、予も是まで度々夫等の事に關して諸所の學會等で演説をした事もあるが、どうも左様いふ講話は聽衆が面白く感じない、で左様いふ事よりも印度の婦人が何うしたとか、亞非利加の女子は斯うであるとかいふ風な講話の方が受が宜い、是等も歴史などの材料にはならうが、日常の生活には縁が

遠いけれども、左様いふ演題でないと、男女の會に關はらず集がわるい、直ぐ聽て翌日から益に立つといふ方は後廻しにしてかゝる、そこで講演者も自然新らしい珍らしい突飛なやうな事を擇ぶ傾がある。

同じ講話をしても、例へば、この食物と彼の食物は如何であるとか、衣服の洗濯も灰汁の良い物と、白水でなければ不可ない物と、或は品によりては揮發油を使へば善く落るなどゝ云ふ事を話すと、最早ソンナ事は百も承知二百も合點といふ顔面をして居ながらも、どうも之を實行しやうとはせぬ、是の故に之は予のみでは無い、他の講演する者も如何か日常の生活に直接應用せらるゝ智識を普及しやうとしても講話甲斐が無い、快からぬ事であると思つて居らるゝやうである、之は單に講演者のみでは無い、同じく智識の普及發達を圖らうとして、左様いふ眞面目な事を書いても、餘り喜んで讀まないのみならず實行せられぬのである。

要するに家庭の幸福快樂といふものは、金錢も大切だが、啻に金錢上の事のみでは無い、そして其を上手に繰廻して行くのも、はた下手に終るのも、一に主婦たる者の技倆如何にあるのである、例へば、前にもチヨット述べた如く、同じ牛肉の料理でも、毎日いろ／＼に調理法を換へて食べさせれば、自然料理屋へ主人公が行くやうな事は無い、固より家族の者が殘らず料理屋へ往くといふやうな事の出來る筈のものではないそこで主婦たる者が克く調理法を心得て居て左様さへすれば、全で家中の者が料理屋へ往つたやうに、美味く且つ樂しくさうして幸福なる生活を送る事が出來るので、之は決して理論では無い、予は予の家庭に於て常に實行しつゝあるので、實に一擧兩得どころでは無い、一擧三得も五得もあるのであるから、最も幸福に最も快樂に、謂ゆる和氣藹々の生活をなしつゝ眞の家庭趣味を味はんとせらるゝ方は、翌日と云はず今日より、すなはち樂しき春の初より實行せられたならば、此に上越す幸福は無からうと考へる。（文責在記者）

手足を遊ばさぬやうにする策

工學博士　眞野文二

新年の遊戯殊に歌留多遊の事に關しては、折角ながら予は緘默を守らねばならぬ、といふものは假令予が個人として述るとしても、其が頓て世間に當局の言として誤り傳へらるゝの虞が無いとも限らぬからである。

そこで工學が女子に組織の智識を與へると同時に、將來家政の整理上に益するであらうとの質問だが、それは違ふ、これは教育の根本問題で却々六ケ敷いのであるけれども、手近かに云つて見れば、元來小學校および其他の學校などで、手工や圖畫などを授けるのは、工學の一端として教へるのでは無くして、ツマリ指頭を慣すといふ意味から授けるのである。



一体人間といふものは男女に關はらず、身体と精神とが平行に發達して行かねばならぬのであるに、無暗に躰操が良いからと云つて、手や足ばかりを大きくしたとても其で可い筈のものでは無い、智識とても亦その通り、矢鱈に智識の手ばかりを大きくしたとても、之に伴ふ躰格が無かつたならば、如何して其智識を運

用する事が出來やうぞ、それは出來ぬ、斯ういふ譯であるから、成るべく双方を平等に發達せしむるやうにせねば不可ぬのである。

世間の諺に『好きこそ物の上手なれ』といふ事があるが、もし其諺の如く假りに一人の兒童が算盤を好くからと云つて其ばかりを爲せたならば如何であらう、算盤では手紙の用は便ずるものでは無い、之に反して手習が好きだからと云つて、一途に其ばかりを爲せて置いては、將來に至つて物の勘定も出來ないではあるまいか、これと等しく讀書だからと云つても亦その通りである、この點から見る時は、如何しても一通りの讀書算盤を授けて置かねばならぬ必要が發るのである、成程手習の好な子供に嫌の讀書を敎へたならば、サゾ其子供に取つては迷惑であらう、興味も無からう、けれども將來一人前の人として世の中に立たしめやうとするには、如何しても其嫌な物でも強なければならぬ、もし誤つて眼や耳や口等の中、その何れか一つのみが發達したと假定して、これを或一種の想像書に描いて見たならば、實に奇々妙々の謂ゆるポンチ書の人物が描かれはすまいか、尤も其子が繪畫とか詩とか歌とか云ふものに趣味を有つて居るから、將來それを以て專門に世に立たしめやうとする爲に、特に夫等を授けるのは別問題として、それでも一通りの讀書算盤といふやうな事は授けて置かねばならぬ、况して普通一般の人は猶更の事である。

商家は商家、農家は農家といふ工合に、多少子女といふ者は其職業に感化せられ、從つて嗜好も亦各異なるものであるけれども、孰れの女學校でも生徒に裁縫を授けるが、是は言ふまでも無く、將來一家の主婦として家政を處理するに方りて、之を補ふの一端として敎ふるに相違ないが、單に其ばかりが本意では無い、矢張前に云つた如く指の練習といふことが之に伴ふのである、彼の造花術なども左樣で、之を學ぶ人の側から往つたら、或はホンの慰み半分にするものもあらう、又將來專門の職業としやうといふ考の者もあらうが

位置を換へて之を學校の側から云へば、それら双方の者の希望を充たしむると同時に、これまた指頭の練習といふことをも含まるゝのである。

要するに、人間といふものは男女に關はらず、眼鼻耳口舌の五官が圓滿に完全に發達したもので無ければならぬ、若し其が孰れか一方に片寄つたとすれば完全なるものとは云ふことが出來ない、啻に五官のみでは無い、智識の方面から云へば謂ゆる常識だけは具有して居らねばならぬ、尚ほ約めて云へば、智育も體育も德育も出來得る限り平行に發達せしめて行かねばならぬのである。(文責在記者)

品性を紊さぬ限りに遊べ

農學博士　澤村　眞

新年に子女の遊戯には何が善い、左樣云ふ專門外の事では平生是と云つて考へて置かないから、實は少し困る話だが、さうさ歌留多遊などは先づ子女の新年に於ける遊戯娛樂としては恰當なものであらう、この遊戯の事に關して兎や角と世間の人の口の端に上つて居る所を聞くに、約めて云へば弊害があるといふに歸するやうであるけれども、若し此遊戯に弊害があるとすれば、それは田舍の盆踊のやうなものである、田舍の盆踊だからとて強ち弊害があると限つたものでは無い、要は歌留多遊なり又は田舍の盆踊なり其を遣る人の次第にあるので、遊戯や踊そのものには何等の弊害もあるものでは無い、

以前は青年の男女が相交はるの機會が無かつたのであるから、新年に相會して歌留多遊などをするのも興味のあつたものであるが、現今は彼等が相交はるの機會が多くなつたのであるから、それらの點から見ると單に歌留多會の弊のみを言ふには及ばないのである。

尤も先年文部省で之を禁止するとか仕ないとか云ふ評議があつたと云ふけれども、それは省内一部の議論で、假りに其が文部の省議であつたとしても、學校内で此遊戯をする事を禁止する事は出來やうけれども、社會一般に向つて之を禁ずると云ふ事の出來るものではない、それに世間で云ふ歌留多遊の弊害の重なるものは、青年の男女が打交つて遊ぶ間に過が生じ易いと云ふ事と、尙ほ他の一つは百人一首の中には戀歌が多い、この戀歌なるものが陋劣淫猥の媒介を爲すといふにあるやうだ、成程一應尤ものやうにも聞えるが、前者の青年男女打交りて云々といふ事は、最早予が前項に述べて置いたから省くとして、後者に就ては、何も世間で夫程までに心配するには及ばないと思ふ、何故なれば、我々も若い時には多少これを玩んだ事もある、併し今に於て其歌の眞意の解らないものが多い、乃で自分を以て他を付るのではないが、今の青年男女も恐らく其眞意義を解して玩びつゝあるものは多くあるまい、そして此遊戯を爲すに方りては、互に牌を一枚も多く得て勝を制しやうといふ事に熱注して居るから、迚も其間に歌の意味などを考へて居る遑のあるものでは無い、去れば世人の心配する程の事は無いと考へる、併しながら予とても此遊戯に付て多少の弊害を認めないでは無いけれども、それは玩ぶ人が之を惡く用うるからであつて、何も歌留多その物には毫も負ふ所の責は無いのであると云ふ事は前陳の通りである、是の故に之を善用さへすれば少しも不都合のあるべき筈は無い。

全体遊戯の點から云ふと、單に眼と手とのみを働かせる歌留多のやうな室内遊戯ばかりで無く、鞠突や追羽子のやうな室外の遊戯をすれば、身体の爲にも良いのであるから、成るべくは内にばかり引込んで居らずに屋外へ出て遊戯娯樂をなすと同時に運動をするといふ事は、これ即ち一擧兩得なるものであらう、元來遊戯娯樂をするのに、多少頭腦を遣はないものは無いのであるが、歌留多遊の如きは却々頭腦を遣はなければ

ならぬのであるから、出來得る限りは左樣で無いものを撰ぶ方が好い、即ち前述の鞠突とか又は追羽子の如きである、尙ほ西洋のもので云つて見れは投球盤のやうなものが良い、けれども之は未だ廣く我國に行はれて居ないから餘儀ないとしても。兎に角新年の遊戯を爲すに就ては、娛樂の具を惡く用ゐてならぬ事は勿論それが爲に品性を紊すやうな事は十分に愼しまねばならぬ。(文責在記者)

芽出たき松の話

林學博士
ドクトル　本多靜六

常盤なる松のみどりも春來れば今一しほの色まさりけり

といふやうな工合に、松は昔から千代に八千代を經ても、その綠の色をかへぬといふので御芽出度い樹となつて居て、支那の詩にも

十八公榮霜後露　一千年色雪中深

とあるが如く、恰度本年の勅題の雪中松といふ御趣向を明らかに言顯はして居るやに想察せらるゝ、其十八公といふのは即ち松といふ字を分解したので、チョット面白い趣向である、斯く松といふ木は詩に賦し歌に詠ぜられて、誰でも知らないものは無い位の木で、極々世間に有振れた種類ですから、この木に就て聊か申し述べたいのであるが、餘り學術的の事柄に亘つてはお正月には不向ではあり、且つ自然と素人方には理解し難い術語だとか、又は原語などを用ゐなくてはならないで、却つて面白味も少なからうと思ひますから今回は單に我國にある松の種類の事だけをお話する事と致しませう。

茲でチョット注意して置きたいのは、この多くの樹木の中には陽性のものと陰性のものとの二種があつて

松の種類は陽性に屬するのである。

さて正月のお飾にする松ばかりでなく色々な種類があつて、先づ日本にあるものばかりでも主な種類が六種、それから亞米利加、歐洲、亞細亞大陸等にありますものが、少くとも六七十はあります、けれども松の種類は孰れも大概役に立つ木で、たゞ〳〵風致の上から庭樹の王として持囃されるばかりで無く、人間の生活にはなか〳〵大切なものであるが、この事は又別にお話する事と致しませう。

まづ葉の數で大體を分けて見ますと、大別して二つと爲す事が出來るので、即ち

日本の松は二葉と五葉

との二ツに分たれ、そして松の樹の種類は、

あかまつ、くろまつ、てうせんまつ、ひめこまつ、ごえうまつ、はひまつ、

の六種に區別せられるのである、素人方は落葉松までを松類の中に數へるけれども、之は松の中には入らないので、植物學上では別の種類に屬するのであるから其邊を混雜しないやうにしなければ行きません、そこで前に掲げた六ツの松の中で、初めの二ツ即ち『あかまつ』と『くろまつ』とが二葉に屬して、他の四種は五葉に屬するのである。

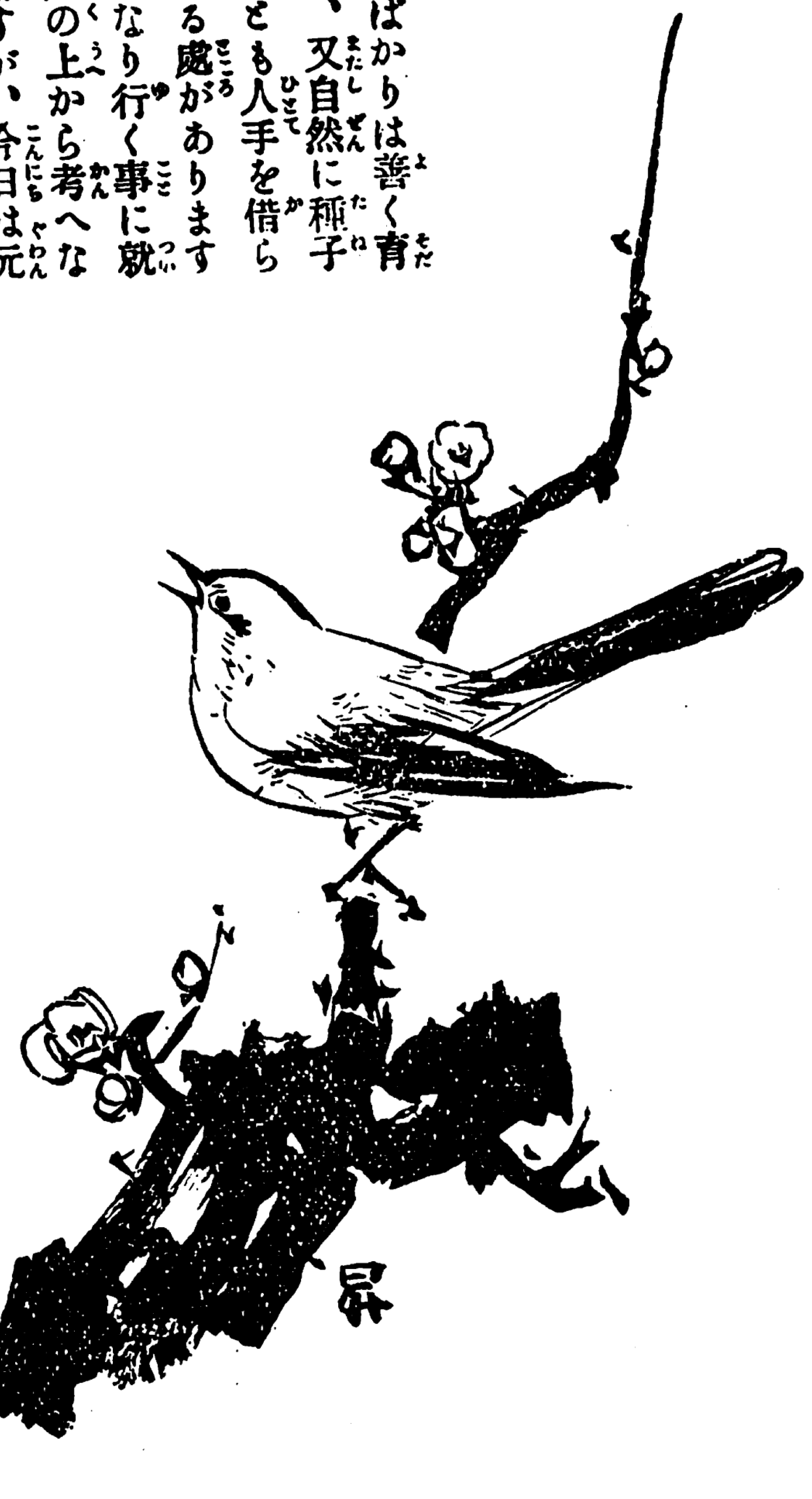
第一　赤　松

この赤松は『めまつ』または『あかほまつ』などゝも申します、この松は日本の松類の中で一番多く廣がつて居る種類で、普通の庭などに植はつて居る『見越の松』などは大概これです、これは一寸見ても直ぐ分りますが、何となく優しくすなほです、葉も左程剛くなく、觸つて見ても痛くない、そして樹の皮に赤味がある、それで大木になりますと高さが十二丈にも伸び、幹の周圍が二丈位に達するのは決して珍らしく無い　山

手の地で松林を仕立てますには大概この松を植ゑます、この樹は山に植ゑますには至極重寶な樹で瘠地や水氣の足らない處で、外の杉や檜が育たないやうな處にも、この松ばかりは善く育つから植ゑるのみならず、又自然に種子が溢れて澤山生えて、少とも人手を借らすに立派な山になつて居る處がありますまたこの赤松の林の多くなり行く事に就ては、大に國土の生産力の上から考へなければならぬ事がありますが、今日は元旦の事でありますから、左様いふ話は差控へて置きませう。

第二　黒　松

黒松は『をまつ』又は『しらほまつ』などゝ云つて、前の赤松と同じやうに之も隨分澤山あるもので、高さは矢張赤松ぐらゐであるが、時としては其より幾らか高いのもある、そして樹の皮は黒味を帯びて、葉は赤松よりも剛くて、これを握ると葉の尖で手の平を突ツついて痛く感ずるのである、それから樹の全體の形も赤



松よりは勇壯に見えるもので、海岸の風除や潮除に植えてあるのは大抵みんな此松である、なぜ海岸に此松が多いかといふに、つまり此木の性質が非常に強くて、外の樹のやうに潮風に逢つても枯れるやうな事も無く、また縱ひ海嘯などで潮水を頭から冠つても平氣であるからです、お正月の飾り松は主に前の赤松と此黑松との二つである。

第三　朝鮮松

この朝鮮松は一名海松とも云ふのであるが、何も朝鮮松と云つたからとて、朝鮮から傳來したと云ふ譯では無い、勿論赤松や黑松のやうに、全國到る處何處にもあるといふに澤山は無いが、陸中や信州地方の山間には此樹の野生がある、尤も朝鮮にも此種類はあるので、彼の鴨綠江の奧から伐り出すといふ紅松は此木の材であるから、或はその邊から此名が起つたのかも知れない、葉は五葉で、色がやゝ白味を有つて居ます、それから木の肌も前の二種のやうにあらくは無い、餘程滑らかである、それに松かさや種子も前の二つとは餘程違つて居る、赤松や黑松の松かさは誰も知る通り鷄卵ぐらゐの大さで、そして鱗のやうになつて居る間に、翼の生えた種子の極小さいのが挾つて居るのですが、この朝鮮松のものは長さが五六寸もあつて、その中に挾つて居る種子も餘程大きく、恰も小指の頭ぐらゐで、翼は生えて居らぬが、松かさも種子も日本の松の類の中では一番大きく、そして種子の殼も大變厚く堅くつて、之を割ると中油ッ氣のある美味實が入つて居る、之が料理も使うが、盛岡邊では此實で菓子などを拵へて土地の名物としてある、又滿洲や朝鮮地方では、この實を他の菓實と共に何處にも賣つて居る、前の二種類のやうに日本には澤山ない樹ですが、庭木などには隨分其所此所に植ゑてあるのを見受ける。

第四　姬小松

姫小松は單に五葉松ともいふ木で、前の朝鮮松と等しく矢張五葉であるが、葉の長さは一二寸しかありません、そして松かさも實も朝鮮松よりは餘程小さく、種子は辛く小豆粒を少し押潰した位なものであつて、この木は主に奥羽地方に多く、その外には餘り見受けません、それ故に東京邊では僅に庭木にしたものか、或は盆栽とした位のものです、葉が短かく樹ぶりが妙なので、往々活花などに使用せらるゝこともある、併し古歌などに詠んである姫子松といふのは、實際この松では無くて、恐らくは赤松や黑松の實から生えて、三四年目位の極小さな小松の事を歌つたものゝやうに思はれる、一体この松は其名にては頗る優しく愛らしく聞こえるのであるが、隨分山中などへ行くと大木になつて、高さが八丈に幹の周圍が七八尺にも及ぶものが澤山ある、そして此松は主に燐寸の軸木などに製造せらるゝのである、

第五　ごえふまつ

これは本字で書くと五鬆松と記すのが本統で、おのづから前のものとは異つて居るのであるが、全体から云へば前の姫小松に善く似て居る、けれども葉が少し其より長く、恰度朝鮮松と姫小松との中間のもので、矢張奥州地方にある種類なれども、併し材料豐富といふ譯には行かない。

第六　はひまつ

この偃松は全く東京邊では見る事が出來ないので、高山の絶頂などの極寒い地方で、最早とても他の樹木が生長する事が出來ないといふやうな場處にのみ生えるのであるから、一面から云へば此松の木が生え居るといふ事は、これ以上の寒い處では何んな樹木でも生長する事が出來ないと云ふ事を證明して居るのである、例へば、信州の御嶽山とか、加賀の白山とか、又は日光の女體山とか、それよりズツト北へ行つては千島列島とか云ふ處へ行かなければ見られないのである。

乃で前にお話した五番までの種類は何れも喬木で亭々として空に聳ゆるといふ性質のものであるが、第六番目の偃松は左樣でない、長が極低くて地を匍つて非常に横に擴がり、そして其枝も密に張つて地面が見えないやうであるから、何處に其根があるのか分らぬ程に蔓延る所より、それで偃松といふ名があり、又千疊松などゝいふ名も附せられて居る、斯ういふ風な樹であるから、別に林業の上などには格段の價値もないのであるが、植物の配布の研究をする人だの、深山幽谷を踏み分けて珍らしい植物を集める人などには餘程面白い木で、都人士の夢にも見る事の出來ない種類である。

尚ほ此外にも松の變種や、琉球および臺灣の松、北米原産の大王松、佛國海岸松、ストローヅ松、獨乙の赤松、印度の長葉松、カナリー島のカナリア松など、色々外國種の我國に植栽つたものも澤山あるが、まだ左まで大きいものは無い、先づ東京の農科大學などにあるのが一番大きいのである。

愛嬌ある動物の話

獸醫學博士　須藤義衛門

動物の特性、さういふ事は動物學者の範圍に屬するので、予は自ら專門を異にして居るのであるから、たゞ少しく予が實驗せし事の一つ二つを話すことゝしやう。

ある知人の家で牝犬がお産をして丁度四疋ばかりの子が出來たのである、その頃其家に牡猫も畜はれて居つて、馴れるとはなしに其子犬と馴染んで、始終其子犬の群と一緒になつて寢たり起きたり、又は戲れたりするのみらず、時々子犬は猫を自分等の母親と思ふも無理ならぬ事は、犬でも猫でも生れてから七八日經たなければ目が開かないのであるから、猫の腹を撫つて乳を呑む眞似をして居つた世間でよく仲の惡いものゝ

事を犬と猿、又は犬と猫のやうだと云ふが、取扱やう一つで睦み馴染ませられるものである。

次に之は予の親しき西洋人であつたが、毎日規則通り散歩に出掛けられると、或日のこと途上に一疋の小猫が棄てあつたのを、不愍に思つて拾上げ來られた、スルト其西洋人は大層犬が好きなので、四疋ほど畜つて置かれた、其内一疋が、遠慮もなく主人が不愍を加へて拾上げて來た小猫を、委細構はずに其首筋を啣へて、唸るが否や一振振たので、主人は驚いて之を制すると、それからと云ふものは決して左樣いふ無慘な事をしないのみか常に自分等の友達として遊んで居つた、殊に奇妙なのは曩に一度小猫を啣へた其犬は、家の



庭園などで自分等同志が遊び戯むるゝ時は其猫の首筋を啣へて伴れ行きて共に遊び戯れ、そして遊が終れば復故の如くにして主人の椅子の上に還して置いた事も實驗したのである。

右は孰れも知人の家などに於ての實驗談であるが、予は自身で往年ダックスフンドの雜種なる一疋の牝犬を飼養して居た事があるが、犬といふ者の人の對す情の深いには一驚を喫したのである、ある時其牝犬が懐妊したから、予は時々その腹部を撫つて遣るので、彼も非常に悦んで居る様子であつたが

謂ゆる月が満ちて今日といふ今日は分娩といふ日になると、彼は朝予が出勤しやうとすると、怨めし相に予の顔を眺めて啼くから、頭を撫で腹を摩りなどして慰めて遣つた後、再び出て行かうとすると、今度は頻りに衣服の裾をくはへて引止め、そして脚と脚との間へ入つて腹部を擦りつけるから、そこで分娩が迫つたのであるといふ事を知つたけれども、愛犬の爲に公務を缺くといふ事は出來ないから出て來ると、やがて彼は予に尾て來て、到頭役所でお産をしたのであるが、その邊になると猫よりも犬は非常に人を便にするものである事が解る、同じ此犬であつたが、ある年予は旅行しなければ爲らぬ事があつたに依り、是非なく彼を他家へ預けて置き、所要を濟して歸京の後、暫らく其家の一室に假寓して居ると、それ迄は其家の犬共と馴れ睦んで居つたに相違ないものが、予が戻つてからといふものは、晝夜椽下に來つて守り居るのみならず、ツイ今が今まで己が友達として居つた犬が其所へ來ても怒責す。これは畢竟其主人を衞るの意に出るのである、そして彼はなか／＼上手に鼠も捕り得たのであつた。

それから前年予が英國へ渡航した時に、たま／＼チヤンネルアイランドのサークといふ小島に遊んだ事がある、その時或一婦人は何處か旅へ出掛る爲に船出すると、その婦人の愛犬は埠頭の小高き處に登つて、その船体の見える限り見詰めて居た、尤も其婦人も犬の姿の見える間は甲板上で手巾を揮つて居たが、全で其場は人間と人間との別離のやうであつた事を實驗したが、それに就けても益々犬といふものゝ情の深い動物であるといふ事を感じたのであるが、之に比べると猫は何うも比較的野性に變じ易いので犬のやうに行かない、從つて愛嬌も淺いやうである、であるからして英國の婦人社會で犬の愛養せらるゝ事は非常なもので、そして時々之が品評會が行はれて、その審判官には同好の貴婦人が其任に當たらるゝ事となつて居るが、高價のものになると二萬圓でも手放さぬといふ程の逸品がある。（文責在記者）

新年の歌

佐々木信綱

やしなふもやしなはるゝも猿引の、いづれか殊にあはれなるべき、

夕暮のつかれはてたる身なからも、せんかたなげにまふ小猿かな、

しゝがしらかづきてまふや老猿の、老いたるわざもあはれなりけり、

浪高う流る氷の山幾つ、まばゆ正月の朝の日の色

春の夜をろうたき人にしひられて、歌筆そむる舞扇かな、

春の海音なき磯に寐ころびて、薄紫の富士のたか根見る、

空のあなたそこに國あらばその國の、草木にだにも生れてしかな、

雲うづむむかひの嶺の鐘の聲、今日の一日もまた暮れにけり、

花好み

春の夜のあけぼの染のふり袖に、咲みだれたる戀草の花、

岡田八千代

いと花を好むありけり、雨にぬるゝ糸萩、雨に搖らぐゆかりの藤浪、雪に薫る寒紅梅、又は露のあさ櫻、薄霧にほのかなる遠野の尾花、燒くる日にめげぬ合歡木の花など、あるが中にも殊に香あるはどくだみとやらむ賤しげなるきは迄をも好めりき、妻なる女、少しは世にも知られぬる身を、名もなき小草とて、取るは哀れど、連れだつ夕のそゞろありきにも、服和服のけじめなく土に這うて嗅ぐ草のいと厭はしくて、書讀むいとま膳の折など、敎へ子の見る眼も恥かしや、庭なるは盡にし給へ、されど道の邊はいかさまにも愼しみ給はずやと、心籠めてつくづくとわびけれど聞かざりけり、素性を知らぬ田舍男

なりとも、聞き傳へて山の畔に咲くえしらぬ花の、そとも香あるを持ち來るあれば、呼び上げて其の日一日はよしと賞へてゆゑ〳〵しき馳走ぶり、厨には皆言ひ落しぬ。

妻なる人如何にもして一度は懲らさばやと思ひを練る程、一日同じきさまにもの狂ほしきまで香を戀ひてさまよひありき、妻の君が針どめ心して縫ひあげたる白地の衣の袖、百合の花粉に半あたらものにして歸り來にけり、これを見たる妻君、腹だゝしさの中に或る可笑しさをおもひ浮べて、折もあらばと其後はけも其事は言はで過しぬ、春は梢に鳥歌ひ、草も萠えて、やう〳〵花も繁からむ好時節、主人の君はつとめてより野がりあくがれて立まどひしが其の日はあだかも親兄もたゞならぬ友の家に、祝事ありと夕より招かれたれば、今一時と後がみ引かるゝ思はありけれどあながちに歸れば、妻の君、急ぎ迎へて、とく入り給へ、やがて呼ばれ給ふべき時なりから、かぶすも、いと清きを撰み置きたり、いざ土まみれなる御手洗ひ給へ、其上にてなほ見せますものあればと、居間にも入れずひたすらに急きたてゝ散髮もはや撫で終へ、いざたまへと妻の君はじめて其間に案内すれば、こはそもとばかり驚かれぬる花のいろ〳〵、大凡ありとあらゆる四季のくさ〴〵とり集めたる花籠の美しさ、書の一ひら〳〵にまで染むかと思はるゝ香の高さ、妻の君、いかにまだ驚かし參らせむ、造り花とはとくしろしめさむ、されどこのゆかしき香の、ある一つの花より出るとはおぼしかけけむや、試に嗅ぎあて給へ、櫻よりか芥子よりか、はた勿忘草の小さきよりか、なか〳〵に嗅ぎあてはし給はじとそゝのかせば、よし〳〵と頷きて立寄る折から、あな、御靴出させ參らすを忘れたりとあたふたしう退りぬ。

やがて又出でゝ早や時はなりぬ、車も門に待ちたれば香の主にまだまみえ給はずともとく出で給へ、幸今日は花粉に着衣も穢さゞりと獨言ちて後より押すやうにして見送りぬ。

友なる家にては早や酒宴の膳のこの人を待ちあぐみて、盃とる人も少なかりけれど、その家の主人、彼の人の事とて約はよも變へじ、また例の花にや浮かれて遲きなめり、待ち在さむも退屈なれば、とにもかくにも始め給へと聲がゝりして我から取るに是非はなくて、皆友なる客人たちもさらばと盃に手をふるゝ折しも、か計との遲刻おもひも掛けずと入り來る彼の人に一座喜びたちて上座にひき据ゑぬ。

口重き人の一わたりをことほぎ言ふとてもの久しきを、待ちかねたりけむいづくにか囁きの聲それよりそれと傳はりて、人毎に彼の人の顏見ては一樣にうつむき笑ひぬ、やがて終りて座につきても尚、盃のとりやりに前を過ぐる人うち向ふ人、または据さばき艶だちたる島田わげの仇なるものまで、くすくと顏あからめて背向きゆくを、いぶかしみの果ては遂に腹だゝしく、何すとにもあらねどつと立ちて座をぬけし廊の片かげより、友禪の袂柱にからみて、たをやかに姿は隱してさし招くものあり。



何ぞのものと覗ひ寄れば、其處に一つ小さき居間ありて花笠美しき電燈のもとに、頰ふくらかに色白く、白芙蓉のかざし大きなるを差したる二八ばかりの酌取女、とき色絹の紛帨少しはづかしげに兩手もみつゝ、暫し入せ給へとものなれたれど憎げなくて又さし招ぐ

呼びませしは君か、我は男、まして君は酌とれとて招かれたる女にして、私の用ありとも覺えずとわざとなる樣に立ち出でむとするを、まづ〱と座らせて、なめげは後にこそ咎め給へ、皆人の君が御顏に笑はせますを知り給ふや、我が身卑しくともなどか笑うてのみとはと思ひたちて招ぎ參らせぬ、知り給はぬがいとほしとて、その女小さき懷鏡彼の人の掌にひたと置きて、さてあざやかに皆を振りて高く笑ひぬ。この風情すきものありて垣間見しが後に語りて、鬢淡く凛々たる彼の人の前に、もゝ割しほらしき歌姫の姿は、げに老松のもとの野なでしこ淵心あらぬが口惜しかりけむと。

やがて座にかへりたる彼の人、餘りに他の花を見る事に忙しくして、我がはなの香をも知らず花粉の色をも見ざりけりと、一座これにまた絕倒りてぞよめきたちぬ、言ひ傳へ聞き傳へて、この君の罪なさ又た廣く世に鳴り渡りて、惡戯と知れし妻の君の惡名はそれにもまして高うなりぬ。

初東風

醫學博士　三浦守治

故鄕の野邊の若草あさ露に
　ぬれつゝかりし昔こひしも

實にも世は物憂き世なり然はあれど
　月と花とは樂のしかりけり

たちめぐる遠の白嶺をかぎりにて
　かすみこめたり石狩大原

父も母も今はいまさぬ里ながら
　唯何となく戀しかりけり

醫學博士　弘田長

吾大君伊勢に行幸ます朝ぼらけ
　朝日うらゝに雁なきわたる

夕べの鐘かすみくぐりて里村の
　淋しき窓にそと音づるゝ

世の音は皆たえはてゝ澄む月の
　神代おぼえて靜かなる夜や

歌留多遊の利害

三輪田高等女學校
教頭　文學士　三輪田元道

人間社會の事は總て利害の相伴うものであるにも關はらず、單に害の方面のみを見て其物を棄るといふ事にならば、社會の機關や制度といふものゝ上に大影響を及ぼす事と考へる、之が極端なる一例を云へば、かの支那古代の老子といふ學者は、聖人が斯世に出て仁義道徳を説たのを一つの害とさへ認めて居る、されば其言に、聖死せずんば大盗出でずと叫んで居る、また佛國のルーソー氏は、人間は自然の儘であれば神聖なるものであるが、而も其を離れて人間の手で教育などを施すから、却つて本然の性質を害するのであると云はれた位であるから、若しもルーソー氏を地下より呼起して現今の教育制度を見せしめたならば、必ずや反對するに相違ない、その他政治でも經濟でも凡て利害の相伴う事は免れないのであるから、識者は其害を抑へて其利を採り、其惡を省きて其善を取る所以のものは、是を以て社會を進歩せしむると同時に美化しやうといふに基くのである、然るに世人の多くは之を忘れて極端に陷るのであるが、實は歎はしきの至りである。

右に述べた如く、我國の歌々留多にも同樣の事情が潜んで居る、成程近年世人の云ふやうに斯遊戯には弊害もあらう、けれども他の半面にはまた棄つべからざる利益もある。即ち

第一　文學的の趣味を得せしむ

言ふまでも無く、遊戯娛樂といふものに供せらるべき物は、それが沒趣味では遊戯娛樂の具とはならぬ、それを玩ぶ間に必ず趣味の掬すべきものが無ければならぬのである、併ながら其趣味が物質的に傾いた、換言すれば、賤劣的のものであるとすれば、开は大に警戒すべきは勿論であるが、歌留多即ち小倉百人一首なるものには決して其が無いのみならず、遊戯の具となり娛樂を得せしむると同時に大に文學的の思想を鼓吹するので遊戯娛樂の具としては上等の部類に屬するものであつて、家庭内に於ける遊戯の具としては確に西洋より發達して居るのである、西洋にはテニス及び玉突などいふものもあるが、それには對比して我國固有の室内的遊戯は何であるかと云ふに答ふるには、この歌留多遊より外には無い、で自分は進んでセキスピヤー、シルレル、ダンテ等の中から、彼等が金科玉條として居る文句を撰んで、それを我國の歌のやうにして歐米人に敎へたいと思つて居る位である、併しながら歌其者は之を玩ぶ方法に伴う害は何處までも研究して豫防するやうにせねばならぬのであるが、謂ゆる一點の捨つべきものがあるといふ爲に、全部の美たる長處までも拋棄すべき所以のものではあるまい。

第二　歌留多遊は注意力の養成に効あり

この人間に注意即ちアッテンションといふものが最も必用である、極言すれば、注意力といふものは實に人間生活の全部を支配して居るのであるから、此注意を周到ならしむるといふ事は敎育上にも頗る必要なる條項で、例へば、衣服は何うするとか、床飾は何うするとか、厨所の工合は何うするとか、或は頭髮の結びやうは何うするとか、若くは途中で懷中物を遺さないやうにするとか云ふ風に凡て注意を要するのであるから、約言すれば。

生活の全部は注意力と評し得らるゝのである、そして遊戯のまに〳〵に於ても注意を必要として、この力の如何に由りて勝敗の決が分るゝので、彼の對手の手許に如何なる牌があるかと云ふ事を暗んずると共に、まだ我手許に於ける歌の句を記憶して居つて、そして縱横自在に精神を活動せしめなければならぬのであるから、心理學上から見ても此遊戯は有効なのである。

第三　歌留多遊は團体的遊戯娯樂

の一である、一体遊戯娯樂といふものが、個人的若くは僅に二三人に限られたるものは、各々それ〴〵の長所はあるものであるが、家族即ちフアミリーが共に遊戯娯樂せしめ、その間に家族生活の味を味はしむる事の出來るもので無ければ、迚も家庭上の遊戯娯樂とする事は出來ない、彼の僅少の人で樂しむ、例へば、將棊とか圍棊とはふやうな事は二人以上が娯しむといふ事は出來ないのであるから、何うしても家庭的のものには不適當である、之に反して、歌々留多といふ遊戯は人數に制限が無い、そしてお婆アさんでも孫でも皆入り交つて、一人が秋の田のと讀み上げれば、一座みな之に和して樂しく遊ばれるので、その組となる者は家族のみならず、親戚朋友は勿論、下女下男の誰たるを擇ばないのであるから、此點に於て室内娯樂として歌留多遊は無類で、謂ゆる團体的遊戯と稱する事を得るのである。

第四　歌留多遊は國民的遊戯

と稱する事を得るので、歐米殊に英國にはナショナルゲームと稱へて、その國民特色の遊戯がある、之は其國民の特性を發揮せしむると同時に、元氣や風致を稗けるものである、即ちポートレースの如きは全く英國民のナショナルゲームである、我國には未だ此くの如きものがないから、室外の遊戯奬勵の必要を要求し

つゝあるのであるが、室内で而かも假りに國民的のものを求めたならば、まづ歌々留多遊を以て其であると答へて差支はあるまい、併し斯遊戯は弊害も多いから、出來るだけ其弊を防ぎて、そして其長所を發揮せしむれば、此遊位面白いものは無い、即ち性質から云へば共同心を養ふものであつて、而も活動する其一面には他と競爭し、他の一面に於ては一致協同するのであるから、教育上にも必要なる事である、若し單に遊戯として見ても、對手と競爭すると共に個人主義的に奮鬪の性質を有して居るのであるが、併し他の半面には敵愾心、孤獨心、嫉妬心、猜疑心等を起すの弊があるそれらを除き得たならば、一面對手と鬪ひつゝ、一面には一致協同するといふ二つの性質を兼有して居るので、此遊戯位妙なものは無い、即ち自分が奮鬪し競爭すると云ふ事は、乃て味方に取つては一致協同となり、そして巳一人が勝利の幸福を檀にするので無く、衆と共に其喜悦を頒つので、萬一敗衂すれば不名譽を分つのである、そこで此遊戯は競爭と一致といふ對照が妙味である、個人的のものは單に敵と戰つて打勝つといふのが本來の目的であるが、歌留多遊は敵よりも



味方が一致して優者は劣者を助けるといふ、妙味もあるから、是等の長所は寧ろ國民の特性を發揮して愛國心を助長し、一家の博愛心等も此中に包含せられて自然に養はれるのであれば、世人が是まで爲されたる疑問も、願くは之に依つて解決せらるゝと共に、十分に其特性を認むるの必要があるのである。

第五　國語の熟達に益あり

以上の外尚ほ其長所を擧げて見れば、この遊戯は知らず〳〵國語のかゝりむすびや語格に熟達せしむるのみならず、なほ三十一文字の歌の國詞としての妙味をも知得せしめ、且つ其調は朗々と之を讀みもて行く中に、極めて調和的の分子のある事を發見するの益がある、香川景樹翁は、歌は詠むべし詠むべからずと云はれたが、一體歌といふものは自然の儘に出たもので無ければならず、又さういふ歌は其調も宜いのである、けれども左樣いふ歌は容易に詠出らるゝものでは無いそこで幾度か古人の上乘なる歌を熟讀玩味して、そして一種の趣といふものを發見するに至るものである即ち之を遊戯として娯む間に繰返して、無意識的に微妙の長所を養うことが出來るのである。



右は長所の方面であるが、尚ほ弊害の方面に就て見れば、世人が彼此云はるゝ重なる點は二つであるやうに考へる、即ち其一は

青年男女の混交

で、どうしても未だ意志の固まらない者同志が打寄てする遊で、爲に品性を紊すといふ事を憂ふると同時に、歌に戀歌が多い、で戀愛思想を養つて淫靡ならしむるといふのが其二で、此二つの非難の爲に、歌は素より立派なるものにして、遊戯としても優にやさしきものであるといふ事だけは、總て國民が一致して居るにも拘はらず、單に僅かの短所のために其莫大なる長所を捨てやうとするのは愚の極ではあるまいか。

依つて其一なる青年男女の風儀を紊るといふ事に就ては、それは平素から父母たる者が其子供に對して不親切であるからである、それを差措いて、子供は可愛が歌留多遊をさせるのは厭だといふのは分らない、一體父母たるものは常に其子女に對して監督の任に當るべきものである、既に生の父母たる者が態度を紊しさへしなければ、たとへ千萬人の青年男女が集まらうとも少しも心配は無いのである、恰も一家の者が集まつたと變りは無い、若しもこの遊戯を爲すのに、一家の子女の外は加へる事が出來ないとすれば、此遊は單に家族的のものではあらうが、前述の團體的の遊戯と爲す事は出來ない、けれども之を團體的の遊戯として、はた男女の打交る事を許す以上は、父母の保證し安心の出來るやうにたとへば、友人の父母とか、又は其時の對手の範圍を豫め確定して掛りさへすれば、毫も世人の憂ふるやうな危險は無いのである。

それから第二に小倉百人首の歌の事であるが、之も今人が左程憂ふるまでゝはあるまいと考へる、といふものは、かの歌の出來た時代は現代とは遠く離れたるもので悉く古歌である、で之を讀む人も隔世の感があらうと思ふ、恰も天上の人と地上の人と異なるが如く、時代上の感覺を異にして居る事は察し難くない、

で現代の國民生活の實際上および心理的感情に何の影響する事はあるまい、古歌は孰れも寫實的ではないから、それが現代の人々の感情に大なる刺戟を與へるとは想はれない、既に讀み書を異にし且つ其詞が雅言で意味も亦從つて朦朧として居れば、それが明確に今人に感情を與へる氣遣は無い、それ故に比較的に心理上に及ぼす弊は無い、併し小倉百人首に代るものが出來れば、それは敎育上大に歡迎すべきであるから、さういふ歌を撰んで國民に熟讀せしむる力があれば、それは最上乘のものであるけれども、趣味の少ないものでは不可ない、それ故に歌の擇び方に改良の必要があらうと思ふのであるが、さういふ事は團体力か又は有力の人かに依らねば成効を期せられない、何故といふに、撰みて之に代へ可きものは、讀みて敎訓となり、趣味あり、且つ記憶に便なる種類で無ければならぬのであるから、なか／＼その撰擇といふことは容易な仕事で無い。

要するに、歌そのものが國民的に美化されたるものなれば惡くはない、否、大和民族的の性質に順應するものなれば、實にそれは思想界の一產物と云うて宜い、そして之に附隨する弊害の如きは、前述の如くにして防ぎ得らるゝのであるから少しも恐るゝには足らぬのである、たゞ予は少なる弊害の爲に、既に業に國民的の遊戯娛樂の具となつて居るものを失ふといふ事は、實に國民の精神界に於て悲しむべき一大事實となる事を歎ずるのである、是の故に讀者諸姉も豫め之に對する智識を十分に備へて、意識的に其趣味等を認めて、そして之が利害といふ事の判斷を與へねばならぬのである。

一体この歌留多遊といふ事に就ては、尙ほ此上にも夙く考へて居つて、どうか一たび世間に問ふて見たいと思つて居る事も澤山あるけれども、自然理論に涉る事が多いから、正月號に餘り肩の凝るやうな話はとワザと差控へて置く事にしたのである。

歌骨牌會のよくない個所

法學士　布川　薫

眞面目な議論ではない

昔から行はれてゐる百人一首歌かるたの遊戯法については、何時も問題になる、是は男女混交と云ふのが可否の主題ですが、年來諸大家の意見もあり、未研究の自分が突嗟の間に輕々しく斷定するとは、其當を得たとは云へないと思ひます、さりながらこれを眞面目な議論から考へると、あまり利益のない遊びと申すより外に道はないので、此處に事々しく云ふ次第ではないのですが、凡そ物事は一利一害の伴ふもので害と見た事も裏面から覗いて案外な利を發見することもあり、一概に惡いと云つて排斥するやうでは、到底物の平衡を得ることは出來まいと思ひます。

作歌の助けとはならぬ

歌がるたの家庭に入つた歴史に餘程古いものである、殊に高尚な遊戯法の一つで、善良な家庭に行はれてゐることは何人も認め得るところです、此點に就ては決して私も否認は致しませんが、中にはかるたの遊びは和歌を覺えるから利益になると唱へる人がある、自然覺え込むのは別問題として、遊戯の間には我劣らじ敗けじと云ふ念に驅られ、和歌を暗誦して其意味を會得すると云ふ餘裕な時間はない、これを以て作歌の助けとすると申すことは、無論利益說の上から見た人々の意見に過ぎないので、私は殘念ながら同意出來ぬ。

華嚴病の原因

次に害ありとする說の要點は、先づ第一に男女打交りて遊戯すると云ふ事です、此事に就ては近來男女學生間にポツ〳〵惡批評が出るやうですが、成程かゝる會合が男女間の風說を亂す機會を作るのは事實でござ

いませう、併し男女七歳にして席を同うせずと云ふ支那の事はさて置き、私は或程度まで男女は接近せしめて差支へないものと思ひます、茲に或程度と申すその程度は、最も六ケ敷もので、一朝一夕にお話は出來ませんが、その程度を越すと甚だ危險なもので或は墮落の淵に沈むとか、或は華嚴病に取つかれると云ふやうな結果に終るのです。

危險なるバチルス

云ふ迄もなく、男女互ひに入亂れて、取つたり取られたりすることは物騒極まるバチルスが其間に浮遊してゐるのは事實で、動もすれば是が機會となつて、忌はしき風說の基となるのは確かにカルタ會の弊害には違ひない、勿論男女互の意思さへシツカリしてゐれば敢て差支へないとは云ふものゝ、さて隨分確乎たる意思の人も此樣な機會の爲に墮落する例は多いのです、次によく申すことですが

醫師の云ふ說

多人數一室に集つて、疊を叩いたりする爲に、塵埃の立つこと非常なもので、鼻の孔なぞを眞黑にするのは實際其場に臨んだものゝ分る事です、それゆゑ貴重な人體の機能に障害を及ぼし、多人數集合の結果、自然空氣の惡くなるのは、止むを得ないことゝ考へます、次に弊害の一ッとして何人も拒まないのは、歌がるたは大概、夜分に催される爲、互ひに勝負に時を移して、男女共時刻の更るのさへ分らない事です。

朝寢の口實と徹夜

いざ歸らうと立上るが早いか、一同から今一回と勸められる、それが嫌とも云はうか、鐵拳の一ッも見舞はれる位に皆が熱してゐる、斯く逃ぐる自分もまんざらの厭でもないから、勢ひ深更に及んで、翌日の課業に差支へるばかりでなく、自然朝寢の口實ともなり、甚だしきはまゝよ徹夜してなぞと云うて、一夜寢もせ

すにやる者がある、こんな事は時間の損害ばかりでなく、衛生上から見ても、到底見逃すことの出來ない話である。

女子が賭事の念

婦人連中には、骨牌に負けると云ふて、泣いて殘念がるものがある、負けると云ふ事はカルタに限らず、餘り氣持のよくないものですが、何しろ唯一時の坐興であるから、全然感情に制せられることは妙でない、出來るだけ冷靜に搆へて、冷靜にやつて欲い、こんな結果が源因になつて、遂に女子が勝負事の趣味を覺え今では競馬は無くなつたが、あらゆる賭事に手を出すやうになつては危險千萬である。

戀歌を覺えるは如何

それに小倉百人一首には戀歌が澤山ある、この戀歌を青春の血の燃ゆる男女が知ることは容易ならぬ事と心配する人もありますが、此場合勝敗と云ふことが互ひの念頭にあつて、如何な歌でも意味を悠々と考へてゐる餘地がない、其が爲惡い方へ入り込むと云ふ事は杞憂に屬することゝ見て差支へない。

惡い處を採用するな

要するに利害孰れが多いかと云ふに、先づ害の方が大部分を占めてゐる處から云へば、カルタ會は全然害ある遊戲法であると云つても差支へはないのです、併し、此點に注意して、成るべく惡いところを採用しなければ、誠に高尙な遊戲と申す外はありません、私は元來カルタ黨の弱武者だからと云つて、這麼事を云ふのではありません、それに世間には往々、カルタをやつて頭惱がサツパリしたと云ふ人がありますが、私は下手な故か、ツイ頭惱を使ふことが多いと見えて、カルタの跡では頭痛がして困ります。一寸私の感じた通りを申上げた次第です。（文責記者）

男女混交のカルタ會意見

東京女子商業學校監督 文學士 原　龍　豐

各自誘惑に捷て

新年を迎へると同時に、きつと問題になるのが男女混交の骨牌會である、最も平素から村雨會、其他何々會とか、殆んど一種娯樂以上の技術的になつてゐるのさへある今日、絶對に學校の方で關渉すると云ふのも不可能な話で、是ばかりは如何に嚴重に言渡しても、若し男女學生の側に飽く迄、骨牌會に加つて見やうと考へてゐられては、ドンナ機會でも作ることが出來る、要するに是は各自が誘惑に勝つて行くと云ふ卓立した精神に待つより外に道はないのである。

骨牌會は優美な娯樂

併し、世人が考へてゐる程に著しい弊害はない樣だ、骨牌遊びの優美で、團欒的の娯樂法として決して完全無比なものとは認められないが、必ずしも男女混交の大集會が風紀上の惡結果を誘致するとなして、全然排斥するのは甚だ其當を得たものではない、既に骨牌が家庭的の娯樂であるならば、單に方法監督の宜しきによつて、此問題は直ちに解決が出來るではありませんか、米國の都會には通常の舞踏場が設けられてある、是は平民的な娯樂場で、職工とか乃至事務員、下婢、ボーイなぞが、一週に一度、日曜とか土曜とかに極つてゐる。

米國舞踏場の神聖

この舞踏の日は例の平民黨が電車を利用して諸方から集る、これが數ケ所あつて、無論男女が組になり手を携へ、樂器入で一日を樂しく遊び暮らして慰安を求めるのです、貴族の娯樂場は歐洲何れの國にもあるが

かゝる平民的に勞働組を收容し、盛大に行ふ處は米國より外にはないのです、この舞踏場は外國人でも誰でも飛入勝手次第で、私の友人も引つ張込まれて舞踏を勸められた有様でした、これが米國であるから差支ないやうなもの丶、我邦ならすぐ大問題になるのです、然も男女混交の舞踏でありながら相互間の風紀は毫も亂されてはゐず、最も神聖なる娯樂法と認められてゐる。

自然的に性情の融和

すべて此やうな風だから、男女間の性情は我邦のやうな突飛にならない、徒らに煩悶をしたり、情死なぞ云ふ極端な事實が少ない、一見男女混交と標榜するのは如何にも危險のやうに思はれるが、異性間の交渉と云ふものは妙なもので、何か相互の間に薄い幕でも張られると、それをとつて接觸したがる、そんなら何の垣もないなら、接觸するかと云ふに事實はかへつて反對で、異性は各々其分に安んじ、嬉々として己れの道に隨うて苦情も出ない、ツマリ慰安の方法が自然的に相互の性情を融和してゐるのである、併し此間に於ける程度問題を考へるの必要は、云ふまでもないことである。

牝は牧場平和の神

數千頭も牛を飼つて置く牧場で、試に牡ばかりにすると、牛の氣性が如何にも荒々しくて、到底制御が出來ないそうです、其處へ一頭の牝を放して置くと、不思議に牧場内の空氣が調和的に代る、數千頭の牛が一頭の牝の爲に秩序を回復して春の牧場のやうになる、と云ふことは牧場を預つてゐる者の皆知つてゐることです、私は何も骨牌をやるに、是非牧場の筆法で、男子組へ女子を加へよと云ふ意味ではないのです、唯、異性間の交渉と云ふものが、すべて如斯現象によつて、成立つてゐると云ふことを例を擧げてお話し申上げた次第です。


元旦試筆

鶏づくし

山岡超舟

今年は酉歳鶏の天下であるから、何んでも鶏の事共七八つ拾ひ集め、お茶を濁して聊か新春の賀辭に代やうと思ふ、けれども鳥追、鳥居、鳥佛師、鳥子紙等と云ふ樣な只單に鳥と云ふ文字のつく名詞は頗る澤山なのでお預りにする事とした。

▲初鶏　地軸一轉して年を迎ふるや鶏鳴先づ曉を報じ東天次第に紅を潮す、故に元日を鶏旦と云ひ初鶏と云ふ、格物論に曰く鶏に丹白烏の三色あり、時を知る、皆積陽火德の精也、故に陽出でゝ鶏鳴類を以て感ず云々、其他御傘、説文、索隱等の諸書にも書いてある、全體鶏と云ふ詞は可鶏の枕詞なる庭津鳥より轉じたので家鶏、長啼鳥、木綿附鳥、臼邊鳥など皆彼れの異名である。

▲鶏骨占　支那では昔鶏卵に墨を塗て能く煮た上其黄味を驗ためて吉凶を卜すると共に、鶏骨を以て年

の善惡を占ふ事が流行した、是れを鶏骨の占と云ひ廣志に傳へて居る。

▲畫鶏帖戸　と云ふ事は歳時記に舊正月朔日畫鶏を戸上に帖り、葦索を其上にかけ、符を傍に挿めば百鬼之を畏るとある處からの迷信に起る。

▲鶏皮鶴髪　老人の皮膚が衰へて鶏皮のやうになり頭髪白く鶴羽の如きを云ふ。

▲鶏林　今は廣く朝鮮の別名に用ひ鶏林八道などゝ稱するが實際は新羅の別名である、新羅王ある夜金城の西、始林の間に鶏聲あるを聞き、明るを遲ちて人を遣し、之を視しむれば金色の小櫝ありて樹梢にかかり、白鶏其下に鳴く、之を開けば小男兒の其中に在るあり、閼智と名く、其金櫝に出づるを以て金氏を姓とす、鶏怪あり始林を改めて鶏林と名け、因て以て國號とすと東國通鑑にある。

▲鶏有五德　田饒魯の哀公に謂て曰く、君見ずや夫の鶏を、頭に冠を戴くは文なり、足距を搏つは武なり、敵前に在りて敢て闘ふは勇なり、食を見て相呼

ふに仁なり、夜を守り時を失はざるは信なり、夫是を五德と云と韓詩外傳にある蓋し德禽の稱此に始る。

▲鷄肋　に二義あり、一は体瘦て弱きに譬へ他はさして有用ならざるも亦棄て兼ねる意、前者は晋書の劉伶嘗て醉ひ俗人と相忤ふ其人袂を攘ひ拳を奮ひて逼る伶おもむろに曰く鷄肋以て尊拳を安んずるに足らずと、其人笑ひて止むと云ふに始まり、後者は楊修傳の楊修學を好み俊才あり、丞相曹操の主簿となる、操漢中を平げ因て劉備を討たんと欲し而して進むを得ず、之を守らんと欲するも亦功を爲し難し、操敎を出して唯鷄肋と云ふのみ外曹能く曉るなし修獨り曰く夫れ鷄肋は之を食へば則ち得る所なく之を棄つるは則ち惜むべきが如し、公の奇計決せりと、操是に依て師を廻へすと云ふに起る。

▲火鷄劫城　火牛と同一の奇計で將軍殷浩の諮議參軍たる道載が數百の鷄を長繩に連ね、火を足に繋ぎ敵城へ飛散せしめ遂に城を燒き、城將姚襄を敗つた有名な計略である。

▲鷄壇　北方錄に越人相交る每に壇を作り祭るに白犬丹鷄を以てすとあるより出づ、後世の人友人相會するを鷄壇と云ふ。

▲牛刀割鷄　小事を處するに大器を用ひざる事に譬ふ、夫子一日武城に往きて弦歌を聞き大に喜び鷄を割くに焉んぞ牛刀を用ひんと云つたのが抑もの始りである、それは當時禮樂を聖人の敎へとして居つたからの事で、此れしきの小邑を治むるに何ぞ必ずしも大道を用ひんやと戯れたのだ。

▲雲鷄天鷄　淮南の王安、仙去するに臨み余藥尙鼎中に在た、是を鷄犬が甜めて遂に共に飛昇し鷄は雲中に鳴き、犬は天上に吠ゆと神仙傳にある、又玄中記には桃都山に大樹あり蟠桃と云ふ枝相去る三千里、上に天鷄あり、日初めて出で此木を照せば天鷄卽ち鳴く、依て天下の鷄之に隨ひ鳴くと云ふ。

▲鷄鳴孜々　楠公の壁書きには鷄明に起きざれば日暮に悔ありと書いてあるが、孟子には鷄鳴いて起き孳々として善を爲す者は舜の徒なり、又鷄鳴いて起

き孜々として利を爲す者は跖の徒なりとある。

▲**鶏人**　平語には鶏人曉を唱ふる聲明王の眠りを驚かすと書いてあるが、所謂御垣守が火危しと唱へつゝ夜廻りするを云ふので今の夜番の事だ、都良香の漏刻之詩や周禮及び廣絶交論等にも見へて居る。

▲**鶏鳴之助**　古の賢妃が君所に御するや將に旦けんとする時に至れば必らず君に告げて、鶏既に鳴けり會朝の臣既に盈てりと云ひ君をして早起朝を視しむると云ふ、即ち國君賢婦の内助ある事なのだ、詩經の鶏鳴篇に書いてある。

▲**鶏口**　俚諺に鶏口となるも牛尾となる勿れとある畢竟大きなものゝ尻となるより寧ろ小さくても頭となるに勝さると云ふ事である、俳人に谷口鶏口と云ふ男があつた木犀庵と號し奇節あり、晩年蕉門正風の市井俗流に弄ばるゝを嘆き自らも句吟を絶つたと云ふ變りもの、享保二年八十幾歲で歿した。

▲**鶏狗馬之血**　春秋戰國の世には盟ふに凡べて牲を用ひ天子は牛馬、諸侯は犬豚、大夫以下は鶏と云ふ工合に相場が定まつて居た、故に稱す。

▲**鶏鳴狗吠**　人家が長く接續して居る事で孟子に鶏鳴狗吠相聞えて四境に達すとあり又老子には隣國相望み鶏狗の聲相聞ゆとある。

▲**函谷之鶏鳴**　齊の孟嘗君賢にして能く食客を遇す秦の昭王之れを殺さんとするや、孟即ち客の狗盗を能くするものをして狐白裘を盗ましめ王の幸姫に贈くつて纔かに免がる、されど關の法として鶏鳴後にあらざれば出さゞるが故、又客の鶏鳴を能くするものをして啼かしめたるに近隣の家鶏悉く和して鳴き、無事函谷關を過ぐ、誰れも能く知つて居る有名な話である。

▲**鶏窓**　宋の處宗嘗て一羽の長鳴鶏を買ひ書窓の下におく鶏遂に人語を解し終日談論す、處宗之れに依り功業大に進めりと幽冥錄にある處より後世讀書室を洒落れて鶏窓と云ふ。

▲**醯鶏甕裏之天**　孔丘初めて老子に見え後顏回に告げて曰く丘の道に於けるや夫尙醯鶏の如きか、夫子

の我が蒙を發する無かりせば吾豈天地の大全を知らんやと感歎した、是れが其本源である醯鷄は蚊蚋の醋甕中に聚れるを云ふ、即ち見る所の小なるを譬へたものである。

▲鷄聲茅店之月 と云ふ句は人跡板橋の霜とつゞく一聯の佳句で早行の名吟中此の右に出づべき作がないとの事で有名となつて居る。



▲雞頭肉 美人の乳の事を云ふ、楊妃が浴より出で乳を露せるを明皇が覗て捫弄しつゝ軟温新に剝ぐ鷄頭肉と云はれたより起る、楊妃外傳に當時を叙し其傍に在つた安祿山と妃との問答をものせ面白く書いてある。

▲鷄合　昔三月三日朝廷及び武家に行はれた遊興で鷄を鬪はせて勝負を見る今民間に行るゝ樣なカケはなかつたさうだ書物に此事が第一番に現れてるのは書記の雄略帝七年の條である、夫から鎌倉幕府には鬪鷄會があり又江戸時代には内殿の階前で行はれたと云ふ事だ。

▲鷄婁皷　古樂の皷の一種で傳來は詳かでないが胴の長さ及面徑共六寸左右に鐶を設け黄條を結びて頭にかけ一桴で撃つのである。

▲鷄頂上、鷄足寺　山は下野鹽谷郡にある中央高原連山の主峰で高さ五千九百十六尺、寺は仝足利郡に在りて佛手山と號し天慶年中の開基。

▲鷄冠花、鷄冠石　花は夏秋の頃紅黄白の色々に咲き花狀鷄冠の如きより鷄冠花と云ふは諸媛の能く知る處ならん、石は赤色の美麗なる結晶で其成分は砒素の硫化物であるから從つて温泉火山地方に產する又砒素を硫黄と共に熔融すれば人工でも立派に出來る、本邦では此石を重に礮彈及び煙火の製造に供し

或は製革上脫毛劑とし、支那では洋盃等を作て居る。

▲鷄卵紙　寫眞の用紙で鹽化アンモニヤと鷄卵の蛋白より取りたる蛋白質とを塗つて、鉛液を施したもの乃ち此紙の面を脫脂綿で拭ひ硝酸銀の溶液中に浮べ三四の手數を經て製したのが鷄卵寫眞である。

▲酉の町　十一月に行ふ所謂年中行事の一で、俗稱鳥大明神と云ふ鷲神社の祭禮で淺草が第一である、其由來因緣は諸媛が既に御存じの事だらうと思ひ差し控へる、其他書く事はまだ色々澤山あるが餘り書くとアラが出るから此處等で御免を蒙つておこう。

松の内令孃日記（抄）

伊藤楊花

一月元日‖晴

初鷄の啼き初むる頃から目が覺めた、除夜の鐘とゝもに妾は十八才の處女である、七時頃一同揃つて、お屠蘇の祝儀が濟む、其頃から續々と同禮の人が來た、十時頃には玄關の名刺受も山を築く、彼是して着物を着更へたり何かして居る内に氣の早い妹は追羽子をしやうと勸めるので、お庭へ下りて突いて見る、其時はお類(下女の名)も一緒に

なつて勝負した、妹は暮の内からお友達と練習したとかで流石に上手なもの、妾など迚も不敵ない、すると暫らくして駒込の民子(從姉)さんが被入つたので倉皇座敷へ戻つて祝儀を申上げる、見れば民子さんも今日大分お化粧がよく出來て紫縮緬の紋付に帶は荒い竹梅様の光琳式なのがキリヽと立矢の字に結んだ所が英迦に映りがよくつて、加之にお頭髮も今日は平日の廂ではなく、高島田に結はれたのは奈何にも上品で且つ高尙だと思つた、妾も母樣の言付て島田に結つて見たものゝ果して似合ふか何うか疑問てある、けれども民子さんも母樣も妹も皆なして盛んに似合ふと云ふから、賞められては萬更惡い氣持もせず、それなら似合つて居るのだらうと淺間しくも自惚れて置いた。

民子さんがお歸りになると入れ替りに峯村の糸子さんが而も自川車で威勢よく被入つた、平常華麗好きなお方だけあつて、今日はまあ恐ろしい高襟、衛褐色のお召に紅葉散らしの丸帶が配合よく、其上半襟には流行の寶石が燦然と輝き、金剛石の指輪は勿論、金のブローチまで、まぶしき許り飾られたのは、妾には反つて、民子さんの瀟洒な姿の方が品よく、糸子さんの姿は諄く厭らしく思はれた。

午後から妾は近いお友達を一通り回禮して歸宅したのは四時過ぎ、夜分になつて、弟や妹と一緒に双六などして遊ぶ、父君の仰せによつて九時頃床に就く。

一月三日――曇

朝から鉛色の雲がどんよりして居るので雪でも降らなければいゝがと豫定より少し早目に御年始旁々年玉をお類に持たして俥で琴のお師匠様の處へ行く、先生も寡婦なので切髮にされて被在るが今日は黑の紋羽二重をお召になつて被在るので、大變品よく見えた、何處かお出掛になる樣子だつたので、凡そ十五分もお邪魔して歸る、十時頃糸子さんが態々入らしつて、

「今晩私の宅で歌留多とりますから、入らつしやいな、兄のお友達も大勢參りますし、君子さんや、中野さんもお出で下さる約束なしましたから……」と頻りにお勸めになるので、妾も父の許可を得て妹と二人でお邪魔に上る事に決した、糸子さんは要事がすむと、急いでお歸りになる、何でもまだ五六軒歌留多會の御勸誘に行らつしやるのだと云ふ、却々な外交家、妾などは迚も寄り附けない。

午後に赤坂の孝男樣(從兄)が陶然と醉つて、蹣跚しながら被入つた、玄關の所で大きな聲に「お目出度う、お目出度うつてば、誰も居ないのか……」なんて大變な元氣なのに誰かと思つて妾が出て見ると、眞赧になつて孝男樣が立つて居るので不思「あらッ」つて笑ひかけると、

「あら?、あらとは何です、新年の御祝儀申上げるにあらとは何です……」なんて管を卷き初めるので、

「それぢや……」お芽出度うと云はふとすると、

「それぢやあと來ましたれ、それぢやお前の政所と來ましたれ、」なんて手の付け樣がないので、奥へ驅け込んで母樣に報告する、母樣も餘り孝男樣が醉つて居るので無理矢理蒲團出して寢かし付けたら、其儘鼾をかいて寐込んで了つた、目が覺めてから大笑ひ。

夕飯後妹の春さんと約束の歌留多會へ行く、着いたのが彼是七時に近い頃だつたので、人はもう一杯、座敷中は煙草の煙りや、人の息され

さで茫さ霧でも降りて居る樣、人々は鉢卷をして居る方もあれば、腕をまくりて妙な黃色い掛聲で「タイ〳〵」さ云ふ人もある、決戰際の正に酣の時であつた、勝負がすむさ妾にも這入れさ勸めるので仲間入りをしたはいゝが、さて却々取れさうにもしない、妾の向ひは糸子さんの兄さんで、富造樣さ在仰る方、帝國大學文科の秀才ださ聞いて居るだけに歌留多も何うやら大變お上手、それでも妾が富造樣の「戀ぞつもりて……」の札に手を出したら、それが双方同時だつたので暫く兩軍で遞い、遲いの悶着が起つた、するさ誰だか隅の方で、

「結局、二人で戀し合つたら可いでせう……」なごゝ云ふので並居る者も哄さ笑ひ、妾も耻かしさで顏が眞赧に染まる、富造樣は平然さして居られた。

其内幾回かの勝負はすんで中休みさなり、お茶が出たりお壽司が出たりしたが一人減り二人減り漸く女の方も少なくなつたので、皆樣の止むるも肯かず、辭して歸つた、宅に着いたのは夜も更けて十時半、妹は直ぐさ寐る、妾はこの日記を書く、襟の邊りがそゞろに寒い。

一月五日‖晴

朝から晴れ渡つた蒼穹には一點の雲もない、其上風は少しもないので妹は大喜び、女中を合手に羽子を突いて遊んで居る、それに引き替へて弟は風がないので凧が上らないさ云つて悲觀して居る、妾は暇なので日射のいゝ椽側に出て二三の新聞を讀み渉つて居るさ奥で父が妾を呼んで居るらしいので急いで奥へ行つて見るさ平日になく父樣も今日は大分御機嫌がよく、ニコ〳〵されて居るので一躰何の話だらうさ思つて居るさ、母樣が、

「今日はねえ、咲さん、ぎ天氣も快いし、風は無いしするから一同なして淺草へ遊びに行かうつて仰在るのだが、お前は奈何だれ、」つてこれもニコ〳〵して在仰る、元より妾も要事はないし、暇なのだから早速、二ツ返事で相談一决した、开處で妾も妹も晴着さ着更へ、父樣は死い背廣の洋服で、母樣は頭髮を結び直して、一同仕度の出來たのは十時頃、それから電車で淺草 さ急いだ、元來妾は人込みの中へ行くのは嫌らひだけれご今日何さなく面白い樣な氣がする、妹は勿論、弟の猛さんなご大喜び、海軍服を着て父樣に手を引かれ乍ら大威張りで濶歩して居る。

淺草は却々の人出であつた、花屋敷も見、玉乘も見、觀音にも參詣して常磐で一休みした、父樣は麥酒を召上る、妾連は好きな物を取る、弟は跳れ廻る妹や女中は笑ふ、父樣は赧く醉はれる、斯くして樂しく遊んで歸宅したのが電燈もチラホラ點き始める五時近くであつた、夜に入つてからは一同して、今日の面白かつた事、可笑しかつた事なご話合つて、九時頃草臥れたさ云ふので平常より少し早く床に就いた。

新年梅　　丸山　正彦

雪に堪へ霜を凌ぎてにひさしの
ひかりをぞ添ふ梅の初花

同　　丸山　釋枝

こぞさしゝを瓶の梅も咲そめぬ
しづがふせやのひかりそへつゝ

余の知れる故一葉女史

半井桃水

一部の人の誤解

過日故一葉女史の十三回忌の法事に參りまして、故人が生前の文學的作品に一方ならない苦心の跡や當時文壇の一名物たりし閨秀作家として、幾多の知己を有してゐたことを偲び、女史と昵懇なりし自分の今昔を對照して、少なからぬ感慨を催したのであります、女史が如何なる人物であつたか、死後十三年の今日になつて迄、一部の人々に誤解されてゐる本人の人と成に就ては、實際、氣の毒に堪へないのです。

洗濯を頼み込む

私が女史と始めて逢ふことゝなつた動機と云ふのは恁うなんです、其當時私の一家は兄妹四人で、南佐久間町に住んでゐました、妹は其頃築地の女學校に通つてゐましたが、妹の友達に野々宮と云ふのがゐて、常に女史から伊勢とか源氏なぞの講義を聽いてゐたそうです、その關係から一日本人が私の處へ尋ねて參りまして、『お宅の洗濯でもさせて戴きたい』と申すのです、豫々噂には聽いてゐたので、段々樣子を訊くと、當時中島歌子さんの處へ、代稽古に往つてゐるが、先生との關係上、報酬を頂戴するのは心苦しいし、さりとて母と姉妹ではとても、このせち辛い世の中は渡りかねるとの話なので、私も氣の毒に思つて、色々出來る丈の心配もしてやりましたのです。

世間の惡口が辛い

固々和歌は上手だし、文字を書かしても美しいし

私もその頃文學雜誌で『武藏野』と云ふのを出してゐましたから、此雜誌に何か書いてもらひたい、本人も小說に筆を染めたいと云つて例の『闇櫻』も其時分書いたのです、私は如何にも本人の文字が美しいし、草稿を反古にするのも惜しいと思ひ、別にその原稿を淨寫して、私の書いたのを本人に與へたのです、今でも『闇櫻』の原稿は私の手許に殘つてゐると思ひます、何か雜誌に書かせたいと心懸けてゐる矢先へ、本人が來て『どうも洗濯料だけの收入ではとても喰べられない、亦女同仕が這麼眞似ばかりしてゐると、世間から何のかのと惡口を云はれて困ると云ふのです』。

到底通常の人ではない

夫れから趣向の相談をして追々小說を書かせると却々旨い、天才と云ふものは恐ろしいもので、到底通常人の筆致ではないし、私も感心して改進新聞へ書かせる約束をするし、大橋乙羽君に紹介して博文館に關係することになつたのです、私の『武藏野』は三號で廢刊になつたが『都の花』は殘つて久く續いてゐた樣です、全体本人は什麽人物かと云ふに。

女史の人物は如何

頭髮は常に『銀杏返し』に結ひ、脊は小作りで、平素は極ジミな木綿物を著、外出の折は銘仙位でした、少し近眼の樣子で原稿を書く時は紙を手に持つて眼前へ心持寄せてゐました、それで本人は驚く程能辯な人、且口を突いてゐるもの悉く秀句で、その言葉の中に警句を狹んで巧みなことは實に不思議な位でした、本人は亦これを成るべく隱すやうにするつまり恁うしたら生意氣に見えはしまいか、アヽしたら何とか思はれはせぬかと氣を配るやうにも見えた、私の處へ來ると、一しきりは肩呼吸をして、如何にも切なさそうな工合でした、その頃から餘り身体は優れなかつたのでしたらう、神經の鋭いことは云ふ迄もありません。

玄關に三時間を待つ

或日例の皮肉家の緑雨がやつて來て、『今日は一葉女史の處へ、惡口を書く積りで見に行つたが、什うも彼女は僞つてゐる』と云ふのです、そこで私は一葉は那麽女ではないと答へると、緑雨はムキになつて『君はだまされてゐるんだ』と承知しない、私も實は本人の人物も深く解らなかつたが、或雪の降る晩です、女史が尋ねて來れたところ、私は氣分が優れないので床に臥つてゐた、すると女史は別に私を起さうともせず、玄關に凡そ三時間も待つてゐたのです、私もよく／＼の用向かと思つて逢つて見ると、本人は『、、、キマリが惡いから、今日は申しません』と云つて、そのまゝ默つて歸つて行つた。

情死の氣持

翌日手紙が本人から來た、跡から思ふと『五月雨』（明治二十五年六月作）の趣向に關係のあつたことで『どんな氣持になつたら情死が出來るだらうか』と、云ふ意味なのです、これ程正直な女だと、緑雨に話すと、『矢ッ張君はだまされてゐるんだ』と云ふ、其は何故かと訊くと、緑雨は冷笑を含んで『實は今日一葉があなたは何處にお住ひですか』、と訊くから、『淺草の貧民窟に住んでゐる』と云つた、すると一葉が『そんなところにお住ひ遊ばさずと、チヤンと蒲團の上へお据ゑ申して、立過す人がおありになるのでせう』と云つた、『什麽も普通の女には云へない文句だ、きつと彼女は泥水に育つたものか、妾でもやつた女だらう』と、云ふのです。

緑雨の天然痘

其後緑雨は度々一葉の處へ遊びに行つてゐたソウで、亦ある時私の處へ來て『私は一葉の惡口を書かうと思つたが、外の雜誌に出たから廢にしたのだ、と云つて歸つた、二三日經つて一葉が來たから、緑雨が是々云つてゐたと話すと、女史は『有難いこと

です、結搆な植疱瘡をして貰つて、綠雨さんの天然痘に罹らずにすみました』と云ふのです、すべて、此通りの文句ですから實に驚くの外はありませんでした、それで私のところへ來ると、どんな冬の寒い日でも蒲團を敷いたことがない、いくら勸めても敷かずにそれでは困るからと云つても、疊二枚程隔てゝ、整然と三ツ指を突いて淑やかにしてゐるのです恰で、御殿女中のやうな、行儀の正しいことは他に例がございません位です。

小說家と風說家

女史が親しく私の家へ出入するので、世間では色々惡い風說をする、これでは行末本人の爲にもなるまいと考へて、當分私の處へ來ないやうに賴んだ、それ以來手紙の往復を致して居りましたが、本人の病死少し前、綠雨が來て、近頃種々な小說家と風說家が多くなつて困る』と云ふから、私は冗談半分『風說家は君も其一人だらう』とやり返してやつたこと

もありました、すると綠雨が『一葉を過つてゐるものは、慥かに四五人はある、僕は其男の面皮を剝いでやりたいが氣の毒だから廢めて置かう』と云つてゐました、藤村、孤蝶君等の一葉を訪ねたのは綠雨より多分以後でせう。

誤解を招きたる理由

女史の病氣のことも、實は綠雨が知せてくれたので、私は死ぬ一週間前に見舞に行たが、女史は夫でも蒲團の上から下て挨拶をするので、私は八釜敷云て蒲團へ上たのでした、女史は非常に感情が强かつた、殊に女史が短い生涯の晩年には、所謂當時の文士諸氏と交際した者で、何も女史には感服してゐた樣子でしたが、今申す通の『風說家』の爲に過られた事も決て少なかつたらうと思ひます、女史の情熱が燃えるやうで觸るゝもの悉く燒き盡すと云ふ有樣でしたから、自然世間の誤解を招くやうになつたのだらうと信じて居ります。（文責在記者）

家庭舞踏の三　梅は咲いたか

梅は咲いたか紹介の理由

理學士　田邊尚雄

既に紹介されたる家庭舞踏も、木曾節、大漁船の二段を經て、茲に第三歩として『梅は咲いたか』を紹介するの運びに至つたのは、誠に喜ばしいことであると同時に、諸君は正に一つの困難に遭遇したのである、それは外でもないが、木曾節及大漁船は素地方の盆踊を修正したものであるから、頗る古雅の趣を存すると共に、手足の運動は極めて單純で、如何なる人でも二三度之を見れば直ぐに飛入で仲間入が出來たのに反して、茲に紹介する『梅は咲いたか』は、既に藝術化せられた俗謠から採つてあるから、餘程技術的であつて稍準備の修練を要するのである、其代り多少の熟練を以て此舞踏を行へば、其興味は又格段である、一体人間といふものは、初めから立派な事は望まれない、又望んでも得られないのであるから、第一着として、先づ自分の出來得るものを望む、然し之が既に自分のものとなれば、決してそれで滿足しない、必ずそれより一段進んだものを望む、斯樣にして漸々進歩發達し、之に伴つて興味も駸々として盡きないのである、家庭舞踏に於ても全く同じ事で、初めから『梅は咲いたか』は中々出來ない、それで誰も出來る所の木曾節を擇ぶ、然るにそれが充分出來るやうになると、それで滿足しないで、又一歩進んで大漁船を學ぶ、それが又出來ると、又それよりも一歩進んだものを擇ぶ、茲に於て追々と盆踊の範圍を超脱して、漸く技術的に入らんことを望む、之は誰しも望む所であるから、予は茲に第三歩として、稍技巧的なる『梅は咲いたか』を擇んで、諸君の希望に供へんとするのである。

前にも述べた通り『梅は咲いたか』は、もと端唄から採つたので、端唄の通性たる色つぽい歌詞が用ひられてあつたり、又踊り方に淫らな様子が無いともいへないので、これ等は高尚な家庭的の遊戯としては聊か耻かしい所があるので、之は改良されなければならぬ、今美音倶樂部の舞踊部員が、如何に此等の事に注意したかを次に記して見やう、先づその歌詞の中、初め『山吹や浮氣で色ばかり』とあつた、之は花柳社會に流行した爲であらうが、斯の如き詞は、高尚な家庭では口にするのを耻づる次第であるから、玆に之を改めて『山吹や實なしで花ばかり』として行ふことにした、これを某博士の結婚披露會の餘興として用ひた時『實なしで』といふことは目出たくないと云ふので『山吹や黄金の花ばかり』と改めた、歌詞を一部分更革するといふことは、困難な事であるにも係らず、斯く流暢に改められたることは、部員の苦心尠くないことが解る。

次に此舞踏は二人づゝ一組となつて踊るのである、而して一人置に逆に廻るので、右廻りするのは男、左廻りするのは女と定めて、男女交互に列んでやると面白い、男女混交に遊戯するといふは弊害があるといふ説もあるが、之は適當な方法を取らないからの事で、男ばかりの遊戯は自然と荒くなつて尚武といふ方面にはよいが、趣味の快樂を得ることはむづかしい、又女子のみの遊戯は稍ともすると、猜疑に傾き易い、それ故親密な男女が相寄つて遊戯するといふことになると、男も粗野の氣象を和らげ、女も亦男の手前自分の缺點を矯めて、あらゆる美點を發揮することに勉め、自然と優美になつて來る、但し男女混交の遊戯は、兄弟姉妹とか親子などを除いては、格段の注意を要するので、敎育家などの最も苦心して居る所である、そこでこの『梅は咲いたか』も、もと俗謠から採つてあるから、花柳社會の影響を幾分にても受けて居れば、誠に面白くないのみならず、之を家庭舞踏として高尚な家庭に紹介するとなれば、我々の責任は免れないことで

梅は咲いたか樂譜


梅は咲いたか
(三味本調子)
稍早ク
むめわーさいたか
ーさくらーーわまだかいな
やーなーーぎゃーーをよーーなーーよ
かーーーぜーーーまだーいーー
中せりふ
やまぶきゃみましで
はなばっかり
D.C.

ある、之に依つてこの方面に充分の注意を拂はなければならぬ。

初め此舞踏は『梅は咲いたか櫻はまだかいな』といふ所で、男女互に手をつないだ、又『山吹や黄金で』といふ所でも互ひに手を握つた、男女互ひに手を握つたからとて、敢て醜行とは言へまいが、無言の内に弊害がないとも限らぬ、そこで之は改めた方が宜からうといふので、その結果元の姿容を變へないやうにして、手を握ることを止めさせた、之も部員の苦心に歸すべきものである、然し婦人のみで之を行ふとき、又親子兄弟等で之を行ふ時は、素より手を握つてやることは何等の差支ないのみならず、却つてそれが爲に興味を増すことになるであらう。

次に此『梅は咲いたか』の舞踏が技巧的であることに就いて、猶一言して置きたいことがある、それは技術的の舞とか踊とかに就ての事であるが、既に知らるゝ通り木曾節及大漁船は盆踊から採つてあるから、頗る古雅な代りに、唯單に手足を動かして居るといふに止まつて、優美な身振りといふべきものはない、それ故誰かゞ美音倶樂部員の木曾節の踊を見て、奴凧が枯木に懸つて風に吹かれた形だと評したさうであるが、踊つて居る人間は興味駸々として夜の更けるを更に覺えないのである、『梅は咲いたか』に至つては、之と異り、舞踊者の興味は素よりであるが、他から見て居る人も、亦優美な流麗な一の技術と感ぜられる、斯樣な性質の舞踊であるから、舞踊者も亦其心持で優美にやつて貰ひたい、今唯二三の特別な事柄に就て之を、注意しやうと思ふ、先づ手の運動には肩の張ることを避け、肩には成るべく力を入れぬやうにして貰ひたいそれから肩を無理に振ることは下品な感を與へるからよした方がよい、又手先に力を入れて指を揃へて離さぬやうに注意する、但し紅指と小指は少しく曲げると大さう舞踊に艶が附いて來る、又足は成るべく内輪に踏んで、常に少しく膝を曲げた氣味で下脚に力を保つて居るやうに心掛ける、然し之は熟練を經ないと腰が

定まらないから、身體が安全に保たれない、腰を定めるといふことは、舞踊には最も大切な事であるから、折がある毎に馴らして置く方がよい。

それから注意をすることは所謂『南蠻』と呼ぶことで、盆踊などでは、右足が出る時右手も出ることがあるが、之は南蠻と謂つて是非とも避けなければならない、南蠻は人間自然の運動ではなく、人は自然に歩けば、右足が出る時は、右手は後へ下り、左手が前に出る、それ故南蠻を見ると、故意に力を加へて居るから滑稽といふ感じを與へるので、優美な舞踊では、是非とも南蠻にならぬやうにしなければならぬ、手と足ばかりでなく、首の運動も、右足が出れば頭は右に向き、左足が出れば左に向かなければならぬ、此事にはよく注意してもらひたい、これ等の事柄に通じたならば、その次に歌詞の表はし居る意味を考へて、成るべく之を現はすやうに勉めなければならぬ、例へば初めの『梅は咲いたか』で兩手を上げるのは、梅の花が開いた形、『櫻はまだかいな』で兩手を下げるのは、櫻の花はまだ莟んで居る形、『柳はなよ〳〵』は、柳の枝の垂れて居る形、『風次第』で兩手を廻はすのは、風が吹いて居る形等で、其他は多く合の手の運動である、此歌の意味を表はす所は、出來る限り情を籠めて重くやることに勉め、又合の手の運動は出來得る限り、拍子に合はして輕くやるやうにしなければならぬ、これ等の事は技巧的舞踊の秘訣であつて、斯樣に説明すると、大さう六かしいやうであるが、さて自分で其氣持でやつて見れば、決して困難なことでもなく、人をして感興を惹起さしめることが大である、

今甚だ長い講釋をしたが、玆に『梅が咲いたか』を紹介するに當つて、前の木曾節及大漁船に比較して異る所を擧げて、唯之に二三の注意を加へて置いたのである、諸君此注意を心に止めて互ひに手をとつて、花々しく『梅は咲いたか』を謳歌舞踏されんことを望む。

舞踏　梅は咲いたか

『梅は咲いたか』の拍子と手足の振（上）

拍		一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
唄子	トントチ	チンチリ	トチン	チチ	チントン	むめは	―さい	たか	―さく	らは	まだかいな	
舞踏・手		1	2		3	4		5		6	7	
舞踏・足			1		2	3		4		5	6	

拍	十二	十三	十四	十五
唄子	テンツツ	ツツン　ツ	トンテレ	トンや
舞踏・手	8	9　10	11	12
舞踏・足	7			8

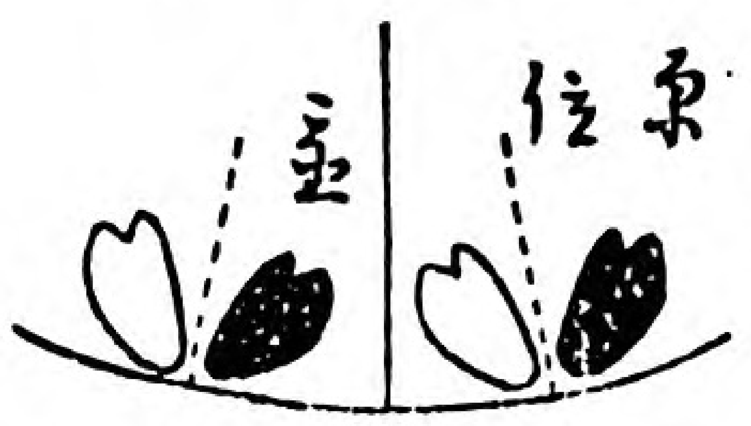
この『梅が咲いたか』は、明治の初年、宮さん〳〵の武ばつた唄が歌はれた後で流行した、一の端唄である、歌調極めて無邪氣な中に、多少の艶味を帶びて居る。

その歌詞

梅は咲いたか、櫻はまだかいな、柳やなよなよ風次第、山吹や實なしで花ばかり。

（かへ歌）君は百まで、わたしは九十九まで、歌もよかろし舞もよい、朝夕たのしい事ばかり。

（かへ歌）鷺は舞ふたか、かもめはまだかいな、家鴨たよ〳〵泥次第、鴛鴦つがひて樂しかろ。



この舞踏は二人一組となり、一回毎に組の相手がかはりて循環するなり、この一組は男のみ、また女のみにてもよけれど、男女なればよく、假りに男女とし、男は左方女は右方に並びて、手の混線せぬやうにすべし、向合の外は同じ手振なり。



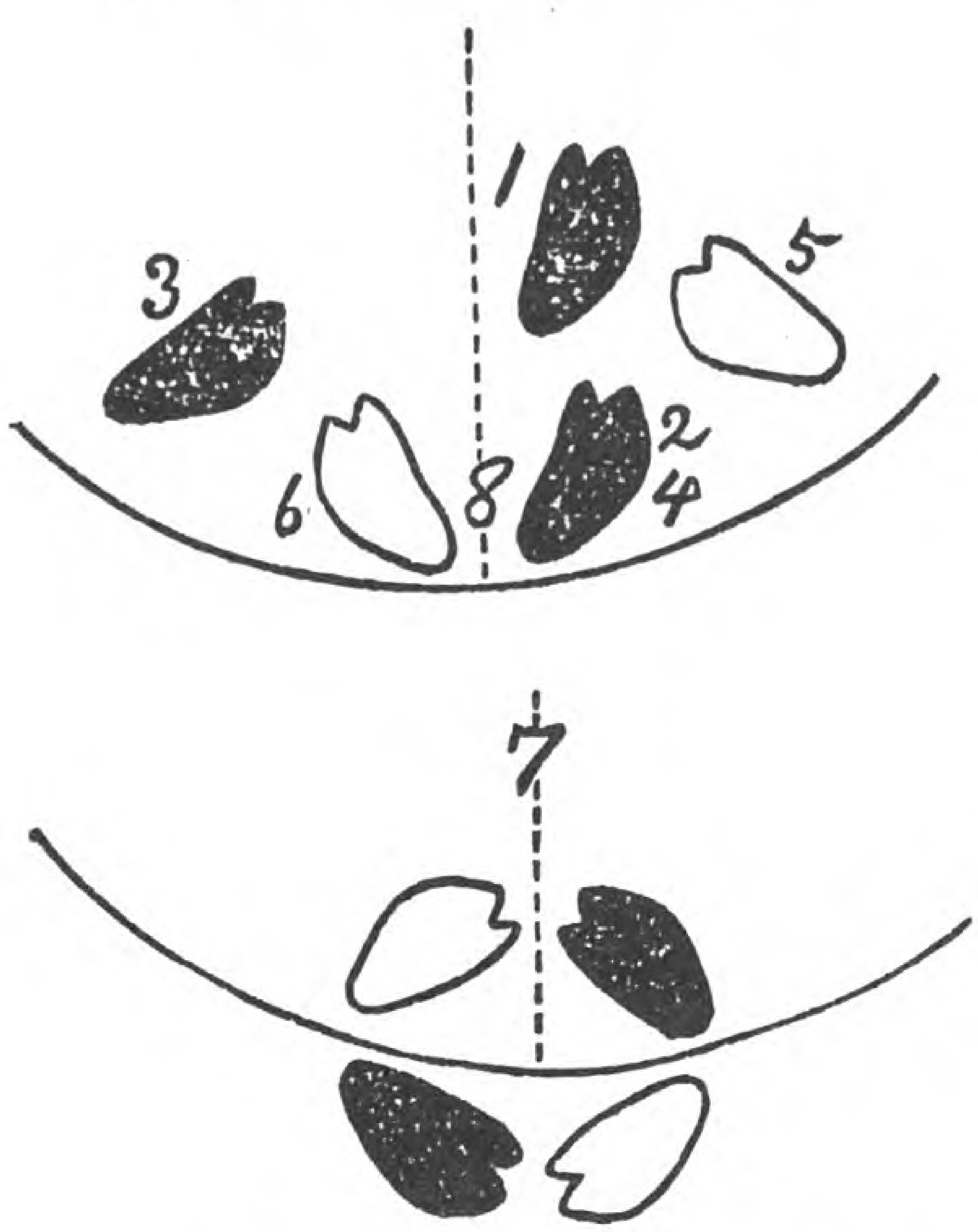
◎振の一　右の足を少し前に出すと同時に、兩手を輕く左右の顔側面に掌の向ふやうに上ぐ。
◎振の二　上げたる手を左右に開きつゝ右足を原位置に引く。
◎振の三　手を拍子よく拍つ。
◎振の四　左圖の如く兩手を掌を上にして左右は伸ばし、同時に右足を左方斜に入れる、足の入れやうは上圖の如し。
◎振の五　兩手を上圖の如く左右に開きつゝ、足を元の位置に引く。
◎振の六　振の四と同じく、たゞ足を反對に右方斜に入れるなり。
◎振の七　振の五と同じ、唯だ足を引くの差のみ。
◎振の八　兩膝を輕くうつ樣にして男は右に、女は左に、横に向かはる。



◎振の九　男女向合となりたる所に、男は女の、女は男の左の掌を右の掌にて輕くうつ
◎振の十　今回は左の掌にて相互に右の掌を前の如く輕くうつ。
◎振の十一　振の九と同じく相方右の掌にて左の掌をうつ
◎振の十二　手をひらきつゝ元の位置に向きかへる、この向きかへる時、右の足を馬の足を後に屈む如くにして、トンと下へおろす時、兩手を垂れ、次の姿勢をつくる。

下駄足跡は、前頁に示せる原位置の如き二人組を、向合になる外は一人にて略す。

「梅は咲いたか」の足跡





この舞踏は、田邊理學士の詳述せる如く二人一組にて、幾組かゞ圓形に並び、循環舞踏するなり、故に奇數の人にては出來ず。

振の四より七に至るまでは、手をつなぎて舞踏せるが原作にて、即ち『梅は』で手をつないだまゝ手を上げ、『咲いたか』でおろし、また『櫻は』で上げ、『まだかいな』で下す、足は前に説明するものと同じこれは男女間に於ける遠慮より避けたるものなるが、小供同士などはこの方おもしろし。

されば次のテンツツ、ツヽンツといふ合の手の所も、男女互ひに手をうち合ふ所は遠慮して、美音倶樂部にては、殆んど形式にうつ眞似位にとゞめ置けり。

雙六と歌留多

理學博士夫人 坪井直子

來る春ごとにいづ方の御家庭でも、はつ春のお遊としては、まづお子さんなれば凧を飛すとか、又は獨樂を廻すとか、その他種々なる遊戯を爲さるゝのでありますが、女の子となりますと、大抵は突羽根とか、鞠遊びとか、その外種々の娛樂をするのでありますが、まづ男も女も通じて小供衆が春の遊として、即ち家庭内に於ける遊戯として弄ばるゝものは、双六と歌留多との二種でございませう。

この二種の遊戯の中で、手前共では每年春になりますと、小供等と歌留多遊をいたしますが、どうも双六は餘り喜ばぬやうでございます、何故と申しますに、双六といふ遊戯は、なか〳〵あれが上るまでは手間取るのみならず、あのさいころと申しますものが自分の思ふやうに目數を出すことが出來ないのでございます、それゆゑ何うしても餘り好かないのではあるまいかと存じます。

右に反して歌留多遊となりますと、双六に比べますと非常に興味が多い、といふものは、おの〳〵組を分けて勝負を爭いますので、互に負けまい負けまいとの氣込が盛んでありますから、單に自分の前の札のみに注意するばかりで無く、相手の札にまで注目して居るのでございます、去れば此間に知らず識らず物の注意力といふものを養成するの利益があるので御座います、それに一体この歌留多の遊といふものは、つまり自分の勉强次第で相手に打勝つ事が出來るので御座いますから、從つて興味も深く感ずるのであらうと存じます、尙ほ此外に歌留多遊は、この遊戯を爲しつゝある間に、何時覺えるとは無しに歌の詞句等を暗んじて、おのづから國振の素養を成して行くので御座いますから、この位利益の多い遊戯は外にまたと有るまいかと存じます、まだ此外にも歌留多遊に就ての利益も數へ來つたならば澤山にある事で御座いませうが、何分突然の事で御座い

ましては思ひ浮ぶる餘祐が御座いませんので、まづ差當り胸に浮びましただけでも是位の利益が御座いますのですから、春の遊戯としては双六よりは歌留多の方が宜いかと存じます。

看護婦の內幕

堀田天眼

看護婦といふ職業は、電話交換手とか又は計算員とか、その他種々なる女子の職業がある中で、この職業ほど高尚で、さうして慈善的なものは無いのみならず、女子が自活の方法としても亦最も好い適當な職業であればこそ、都鄙の別なく此職に從事する女子の數が增加すると共に、或は個人として、或は團體的として看板を掲げて居るものゝ數も、田舍は暫らく措き、東京のやうな都會では、謂ゆる雨後の筍ではないが、日一日と增加するのである、固より女子に取りて此上もなく、仕事そのものが女性的、

時としては男性的のこともあるけれども、多くは外面は如夜叉でも、內心は何處までも如菩薩で行かなければならないのであるから、ある意味に於ては女子の天職といつても差支ない位である。併し

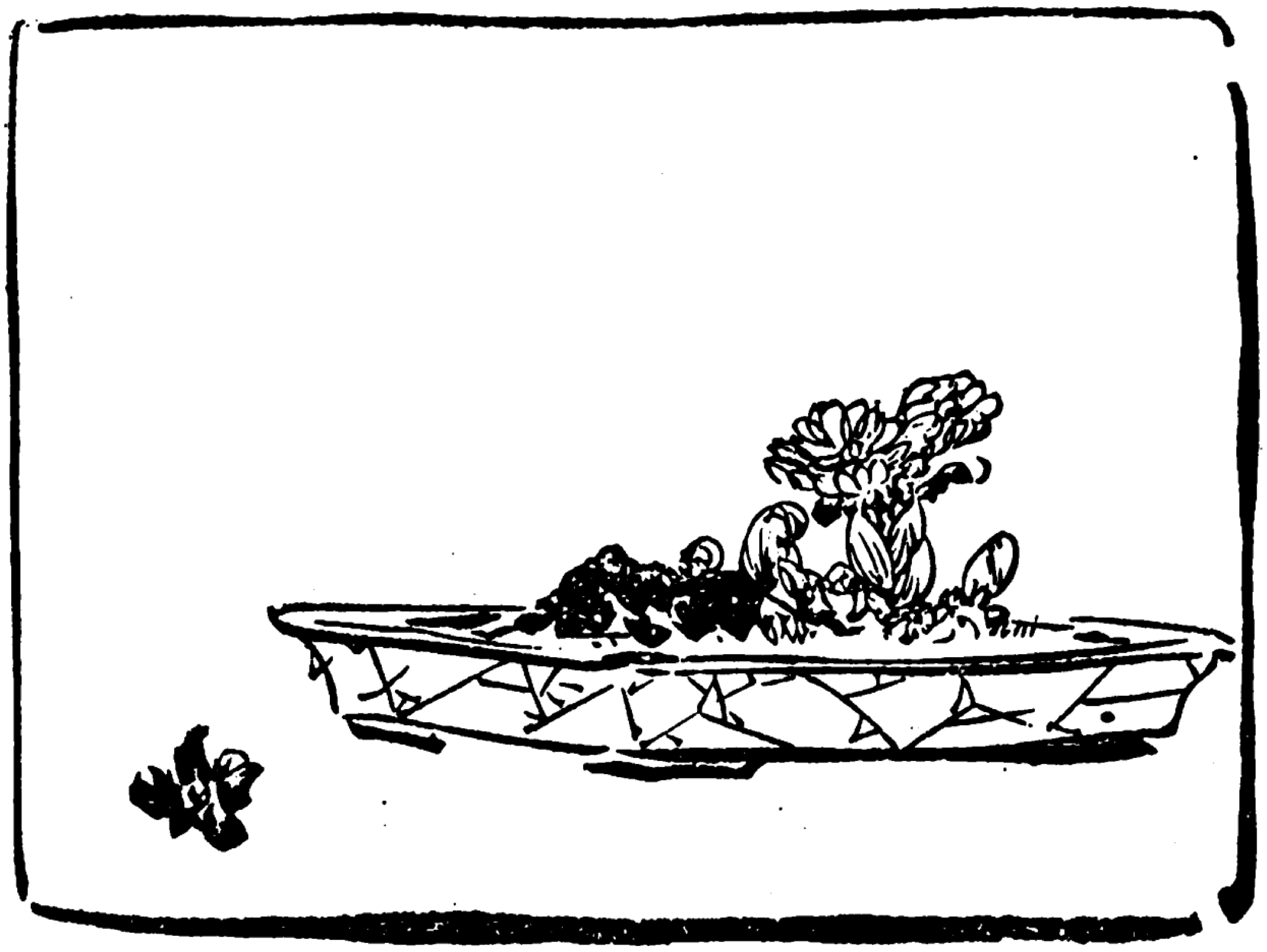
この看護婦の起源

はと尋ねると、今日その商賣をして居る人々でさへも、動もすれば御存じない方が多いのである、遠き外國の事は措置くとしても、自分の國に於ける之が起源ぐらゐは知つて居らねばなるまいと思ふ、その職に從事して居る人は勿論、さうでない人でも、一應は此邊の事を心得て居らねばならぬのであれば、ザツトその筋書を咄して見やう。

わが國に於て初めて此看護婦といふものゝ出來たのは、今を去ること幾んど二十二年ほど前、即ち明治十九年の頃、陸軍の衞戍病院と云つて、將校や士卒の病人を收容して治療する病院が、全國の諸處に散在して居る、今も尚ほ在るのである、此所へ入院した患者は、矢張同じ或一部の軍隊內の人に看護さ

せたのであるが、どうもそれだけでは不充分であるのみならず、或場合には如何しても女子の手を要する點があると云ふことを感附かれて、今の赤十字社病院長たる橋本男爵と、陸軍々醫總監足立寛氏と相談の結果、種々なる苦辛設計によつて、初めて看護婦養成所といふものゝ設備が成立つたので、これが抑も今日彼方でも此方でも看護婦々々と云つて、別に耳新らしく思はなくなつた流の源である、越えて翌明治二十年に至りて萬國赤十字社へ我國も加盟することゝなつたので、看護婦の養成法といふものは頓に盛んになつて來たのである。

　そこで團体組織としては、當時篤志看護婦人會といふものが出來たのであるが、これは現今坊間に任る某々看護婦會などゝいふものとは違つて、女子の自活とか、但しは一種の職業とする抔といふ事は更に眼中に置かれなかつたのである、されば其會の設立には故三條公爵の未亡夫人及び故毛利公爵未亡夫人抔を初として、橋本足立の兩氏が熱心に盡力せられて、赤十字病院で次第々々に看護婦を養成して居らるゝ中に、大學醫院や慈惠醫院等でも争うて看護婦を養成したのであるが、夫が何れも好結果を得たから、存外早く我國には此看護婦といふ者の隆盛を來たしたのであるが、既に左樣盛んになつて見れば、軍隊や病院許では人が餘る、其餘る所の人々は民間の需めに應するとい



ふ工合になつたのであるが、其給料も又從來の賃仕事や、又は有りふれたる内職に比べると格外の收入があるといふ所から、漸次現今の樣に個人の看護婦會といふものが出來て、續々諸方の需要に應じて出張する樣になつて、之が爲には幾ら一家の中で助かるか知ない、大きく云へば、國の利益になるか知れないのであるが、併しそれが爲に他の半面に於ては種々なる弊害も生じたので、一口にア、看護婦かと云はるゝやうな、一種の侮蔑冷嘲を含まれたる語氣を聞くやうになつたのであるが、何處までも相當な敎育と、眞面目の考とを以てしたならば、女子の獨立自活の方法としては、必ず社會から女子に最好適良の職業である事を認むると同時に、看護婦その者の眞の價値をも認めらるゝに至ることは疑ない。

繰返すまでも無く、看護婦の責任といふものは最も重大なるものである、意味に於ては、

看護婦は醫師と同等

であると云ふことが出來るのである、何故なれば、

看護婦は醫師と同樣に人の生命を托せらるゝのでは無いか、昔から我國の諺にも、病人に對しては、一に看病、二に藥といふ言葉が眞實なりとせば、この時は慥かに看護婦の偉力が醫師の上に在ることと證するものと云はねばならぬのである、併し全然さう云ふことは出來ないが、この諺に一部の眞理を含んで居ることは爭ふ餘地がない、して見れば看護婦の責任の重大なる事は、いよ〳〵ます〳〵明白である、左すれば矢張看護婦たらんものは、固より醫師までいは無いが、相當の敎育や修養が無ければならぬといふ事も火を覩るよりも瞭らかなる所以である、さもないと自然自分の職業が何れだけの値打のあるものであるかと云ふ事が解らないから、知らず〳〵自分から自分の品性を破壞するやうなことが出來て、遂には人からも後指を指されて、寶の持腐れに終るやうな羽目にも立至ることは尠なくないのである。

無論それは各自の過失で、今更に誰を咎めて見やうもないのであるが、ツマリ自分が過失に陷るまい

危害を招ぎたくないとは思ひつゝも、彼の教育といふものが無くして、單に賃銀といふ事にのみ重みを置くやうになつては、自然肝腎の職務が疎かになるイヤ自分では爾ういふ心持が兎の毛ほども無いと思つて居ても、人間といふものは男女に關はらず、慾の無い者はない

筈であるから、若しもその慾の念ばかりが募つて居ると、何時しか其が表に顯はれて來る、それは看護の事のみでは無い、之が人間の弱點である、それに賃銀が高いとか安いとか云ふ事は、誰にも直ぐ分るけれども、仕事の値打といふものは爾うチヨツト判らないので、ツイ左樣いふ事になる、とは云ひながら、その人にして教育あり修養あるものなれば、決して左樣いふ事にはならない、何故といふに、智識といふものゝ案内があつて、それは善い之は悪いといふ事の見分けを附けるからである、それに斯うだん／＼世の中が進んで行くと共に、何の仕業に限らず、自分のする仕事に對しては、何處までも守るといふ約束と決心、即ち德義上の覺悟が無ければならぬのである、就中看護婦たらん者は此心持を常に忽にしてはならぬのである。

斯く云へば大層看護婦になるのは六ケ敷さうに思はれるが、その修業と云つたからとて、別に大した事では無いが、從前は赤十字社病院とか大學醫院とか、或は慈惠醫院等へ入つて、實地と學說とを二ケ年研究して、そして其附き／＼の院制の試驗を受けて及第さへすれば、それで最早立派に看護婦として獨立して行けたものであるが、近來は產婆と同じく內務省の撿定試驗を受けなければならぬ規則となつて居て、そして其試驗が是までのとは違つて、チヨツとした藥劑の事までも知らなければ成らないやうに成つた、と云ふのは、突然患者に就て、直ぐに之は傳染病であるか無いかと云ふ見分けの付けられる位の智識と、それから夜中など不意に患者に異變の起つた時、醫者の來るまでの應急の手當を施す場合に例へば、充血性だから冷すとか云ふやうなことが、

頗る必要であるからで、決して重荷や餘分のことを脊負せらるゝのでは無い。

それを爲るに附けても、學資といふ程の學資を入れないでも、相當に勉強して獨立自活の職業を得らるゝのは此看護婦で、それが赤十字社病院や大學醫院へ志願して入るには、何時でも缺員さへあれば、一文無しで入れる、そして内務省の試驗を受けるまでの間は、相當の給料から被服までも貸與され、食料は無論醫院賄である、尤も試驗に及第したからと云つて、直ぐに其處を出る譯には行かない、乃ち規定の年限だけは其所で勤めなければならぬのである併し及第の前後に拘はらず、不品行であるとか、或は他の不正行爲によつて解放さるゝか、若くは自分から退く時は、最初からの食料等は悉皆支拂はなければならぬ事となつて居る。

市中にある各看護婦會でも、矢張り學資の無いものは、相當の手續を以て入會すれば、學說と實地の兩方を兼て勉強することが出來る、その代りに兩親の手元で何も爲ずに居たものが、急に餘地へ行つたなら隨分辛いであらう、といふは、ツマリ女中代りに働いて、そして其餘暇に實地に就いたり、勉強するのであるから、夜分も遲くまで遣らなければならず、又外から賴みに來れば、夜が夜中でも起きて行かなければならぬ塲合もある、併し之は外の病院へ入つたからとて同じこと、却つて左樣いふ塲合が多い位だ、それが即ち勉強で、何をするにも、眠る目も眠ないで遣る程でなければならぬ、そこで其年限となれば、

普通の人で二ケ年

も遣れば大抵は内務省の試驗には差支はない、とは云ひながら、最初から學力が無くては然うは行かぬが、それも舊の高等小學二年級ぐらゐの學力があれば、赤十字社で出來た看護學や、大學醫院の講義錄は讀める、尤も大學醫院のは少し六ケ敷い理屈はあるが、それも見馴れたなら大して解り難いこともあるまい、先づ三年の苦學と思へば大丈夫だが、十分

に學資があつて勉強するなら、たとへ實地は不熟練でも、一ケ年位で十分內務省の試驗は受けられる、それから患者に就て實地を研究するのも妙であらう一体何に依らず、修業や研究は一生の問題、內務省の試驗に及第したとて、實地患者に就て見ると大に魔誤突ものである、左樣いふ場合に主任醫が親切な人なら一見して、また此看護婦は初心だと思ふと、患者に知れないやうに內所で能く細かに敎へて呉れるが、若しも其が不親切な意地の惡い醫者であつたら、ポン〳〵患者の前でも耻を與へて、ガミ〳〵小言を云つて、更に何にも敎へて呉れないから、當人は萬事にドギマギする、患者は信用しなくなるといふ風で、終には附添を斷はられるとか、或は自分から身を退かなくてはならぬやうな事が出來る、それも自分で確かな心得があれば、決して其樣な事はない、却つて主任醫師の見落してある事までも、自分で注意することが出來る、ツマリ其人の力量である、如何に主任が名醫でも、看護婦ほど絶えず患者に接近して居るのでは無いから、自然見損ひや見落しが有勝であるから、それを補足して看護するのが看護婦の責任といふものである、であるから、夏場の非常に忙しい期節に向つて、速成看護婦會といふやうなものが澤山市中に出來るが、如何して五ケ月や六ケ月位で滿足な看護婦が仕上がらう筈がない。

それから看護婦の賃銀問題だが、之はツマリ其病症に依つて等級と賃銀との區別があるので、例へば、傳染性の肺病とか又は天刑病患者等に就くのは一等賃銀で、日當一圓、その他內外科の重輕症に依りて、八十錢、六十錢、四十錢、また同じ傳染病中にも、彼の黑死病、虎列剌、窒扶斯等の激甚なる流行病になると、東京市內なれば、一等賃銀に二割增だから一圓二十錢、市外なれば、三割乃至五割增といふ標準になるのである、それから普通の患者になると、腕の出來たものと未だ出來ない者とに依りて、賃銀にも種々差等があるのである。是の故に某看護婦會から出張を命せらるゝ事になると、一等の賃銀を取

つても、その內から二割五分即ち二十五錢といふものは、會の維持費として會主にせしめらるゝのである、尤も其代り會主たる者は始終仕事先を見附けて遣らなければならぬのである、斯う云へば利益交換とやらで孰れも奇麗に聞こえるが、双方ともに尙だ此外に、底に底ありといふ點があるのであるけれども、それは天機洩すべからず、否、洩してはヨードホルムでも防腐が出來ないから、此所らで打切りとした方が花であらう。

裁縫の話

女子高等裁縫學院長　小出新次郎

本來前の順序からすれば、まだ小裁物に就てお話すべき事が澤山にあるのであるが、今回は一月號の事であるからして、一足飛に小裁物なると、又は本裁物なると、若くは小袖なると振袖なるとの別ち無く、總て三枚襲としての造方に關する大意をお話する事にいたしませう。

この三枚襲と云ものは、總てゆき丈の揃はぬものであるが、一般に其を揃へるやうに造らうと苦心なさるのであるけれども、勿論上衣と下衣との材料に依つても直ぐに其弊害が生ずるからして、隨分至難には相違ない、併しながら大体に於て規定の方法を正確に實行してさへ行つたならば、決して大なる過に陷るべきものでは無い、去れば如何なる方法に依れば過失が無いかと云ふに、初め寸法を定むるに當りて、假りに三枚襲とすれば、その中間なる二枚目に襲ぬべき物のゆき、たけ、後巾、前巾等、凡て普通の寸法にして、それを標準となし、上衣は前後で五分延若くは六分延とし、又一番下なる下衣即ち三枚目のものは其反對に、中間の寸法より五分縮にするのである。

尤も右は身巾に關する事であるが、然らば丈は何うするかと云ふに、もし三枚共に其材料の性質が粗同一であるとすれば、少しも延も縮もせずして同じ

寸法にして行くのである、左様さへすれば下に襲なるたけの厚みだけ順に次袵が見えて行くのである、併ながら若しも上衣がだれる物であるとすれば五厘若くは一分位をつめても差支は無い、去りながら同一の材料であるものを左様するときは、次の袵が案外に出過ぎて頗る見苦しいものである

世間には襲なるからと云ふので、何でも其厚みだけは下衣のたけをつめる方が宜いと悧恰な智惠を出して、或程度まで下衣を順につめて行くが、萬一上衣の材料が少し、だれ氣味の物であつたとすれば、下衣の袵を少し見せる所では無い、却つてあべこべに上衣が冠さつて餘程見苦しい物が出來る。



元來を云へば下衣の方が袵の四分の一位づゝは順に見えて行くのが法である然るに其が却つて上衣の方が冠さつて行くやうでは、迚も二目と見らるべきものでは無い、去なが

ら下衣とすべき材料が非常にだれる性質の物であるとすれば、それは五厘なり一分なり順につめても宜いのであるが、其邊の工合や手加減といふものは、なか〳〵敎へて敎へらるべき筈のもので無く、種々の材料で數當つて、折々失敗して、其失敗から得た智識で無ければ眞に完全なる應用は爲し得らるべきものでは無い。

去りながら前にも云つたやうに、同一の材料の時は同一の寸法とし、もし上衣がだれ氣味の時は少しく之をつめるその反對に下衣がだれるときは、それを幾分かつめるのである、この規定を標準としてさへ居れば、決して甚だしい仕損じの出來得べき筈のものでは無い、丈の定め方は其で宜いとして、

次は襟肩の切込方とゆきの定め方との事を少くお話しやう、その襟肩の切込方といふものも、前に言つたやうに三枚の中を標準として身巾を定めたものとすれば、矢張襟肩も其中を普通の寸法として、上衣は五厘若くは一分を切込み、下衣は其反對に五厘乃至一分をつめて行くのである、左樣さへすれば三枚の襟の襲りといふものは、寸毫のくるい無く行く者である、從つてゆき丈に關する肩巾の定め方といふものが、同樣中を普通の寸法として上下への割當を知るのである。

但し此所にゆきを揃るが爲に特に注意すべき點は袖巾が上衣より下衣、また其下衣と順につめて出るのであるからして、その袖巾でつめた寸法を肩巾で出て行かなければ、袖口の所に往つてゆきがきちりと揃ものでは無い、此事はゆきを定むる上に於て一番注意を要するのである。

以上述べ來つたやうに、その規定を正直に守つて遣てさへ下さつたならば、ゆき丈共に左樣甚だしき不出來は絶對に出來るものでは無いからして、くれ〴〵も自分了簡の猿智惠を出さずに、何處までも斯法に遵つて行かなければならぬのである、萬一少しでも自分了簡を挾むときは、何時までも正當の物の出來る時節は無い。

教訓七草

彩紅道人

手折らるゝ人に薫るや梅の花　千代

下世話一口に「仇を恩で返せ」と、云ふ事あり、由來女子は極めて嫉妬心の强きものなれば、些細なる事に打腹立ち、深く思ひなして遂に江戸の敵を長崎で撃つ例は日常これを見る、最も愼む可し、嫉妬は女子の惡德なり、彼梅花は氣韻の淸高なる點に於て花中第一と稱せらる、海棠櫻花の婀娜たる、牡丹芍藥の濃艶なる、蓋し及ぶ可からず、女子にして此花意を體し、厳冬葩を開き、凛乎として俗情の迫るを許さず、淸夜には善く月に薫じ、淸晨には善く霜を戴くの美德を學ばゝ、期せずして賢夫人となる、敢てむづかしきものにはあらざる可し。

我子なら供にはやらじ夜の雪　羽紅

折から降り募る吹雪、漸く激しくて、日は昏れたり、今宵は寒さ厳しく外出も成り難しなど佗ぶるに、無情き夫は夜噺に參ずる約ありと云ひ捨て、はや、雇人のたれがし兒捉へ、供に立て、用意せよと焦く主の命は重し兒は恐れ畏みつゝ一介の饅頭笠に、身を包む古合羽、凍てたる足に草鞋結び固めて甲斐々々しく主家の定紋打つたる提灯片手に、おのゝき行く後姿いぢらしくも亦憐深し、見送るに有繋女心の得堪へで、よゝとばかりに泣き伏しぬ、實にやさしさは斯くありてこそ然るべけれ、人を用ゆる自ら道あり、雪の日の樽拾ひ、彼も亦人の子なり、殊更主婦としては情濃やかに思遣りなからざる可からず、世にはひたぶるに人をのみ酷使するをもて己れが勤めとし、獨り長火鉢の向ふに陣取りて叱咤日も是足らざる者多し、憎むべきものゝ一ならん。

右ひだり知れぬ蕨の手先かな　園女

都會は諸藝學問の淵叢なりと知り、場所によりては鄕畝の大根さへ、都の市に上ると聞くに、妾、草深き片田舎にあたら一生を、權兵衛、田五作と伍して朽果つるこそ今はなか〳〵に恨みなれ、よしや、家貧

しく竈の煙揚る事薄しと雖も、妾の心鐵よりも堅し、心茲にあれば飯炊き、水仕事何かあらんとて都會に來る、云ふ迄もなく都會の人は薄つぺらなり、輕はづみなり、僞善なり、右ひだり知れぬ誘惑の手はそも何者を囚へんとしつゝあるか、此危險界に好んで投じ來る、幾千寧ろ幾萬の子女は遂に知らず、那邊に導かれ行くにや、闇は黑白なし、日々の新聞の三面欄はよく此間の消息を明らかにしつゝあり、噫、天下恐る可きもの多し、就中誘惑の事は頗る寒心すべきものならんか、可愛い子に旅をさするはよし、旅に出るの道を過らざらんこと肝要なり。

身を耻ぢよくねるとあれば女郎花　秋色

そもや、天神七代の古へより、貞操を守るは一に女子の淑德となり來れど、此道の兎角當世では繼兒扱ひにさるゝこそ本意なし、少くとも今より五十年前、横濱岩龜樓の一賤妓に、『降るアメリカに袖は濡らさじ』の悲歌あり、我身皎々の白、何ぞ醜奴に侍するに堪へんやと、感慨雨の如く、辭色嚴にして脚

徐ろに香を燻じ、衣を新たにし、紫電一閃、達觀の往生を遂げたる櫻木の事は、今の世到底天外が『魔風戀風』一册の値に及ばず、若し秋色の句意を現代の女性に問はゞ、蓋し女郎花の柔順に行かず、曲りくねるは其性なり、性は自然なり、自然主義は二十世紀の流行なぞ、怪しき理屈を並べ給ふものなきにしもあらざる可し、そも〳〵如斯は世の末なり、忘れても自墮落は切に戒めざる可からず、女子の貞操は『あらし』に際して尙、『枝は折れよと根は折れぬ』松の立姿をこそ、望ましけれ。

我年のよるとも知らず花さかり　智月尼

嫉風妬雨、世の中は三日見ぬ間のさくら哉、自分は齡が若い、若いからよいなぞと、及びもつかぬ空想に耽つてゐる間に、紅顏いつしか衰へ、我から鏡面に映ずる鬢髮の白きに驚くはよくあることなり、女子の婚期を失ふの例は多く虛榮心の結果に基く者の如し、近時、晩婚者の多數なるは、生活問題に歸因する事勿論なるも、亦女子の側に於て、良人撰擇法に決

せず、高きを求めて到らず、低きに就くを耻として事茲に及びては自然姥櫻の歸り咲きを待つが如き、悲惨な結果を見るに終る、世の中のことは爾う自分の得手勝手に行くならば、別に苦勞もいらぬ道理にて、故緣雨の所謂、世間の夫婦者の多くは『壽司をと思つたが、蟇口の都合で蕎麥にして置いた』の類であるを知らば、さまで深い穿鑿立も要なかるべく、先づ身分相應の口を探して嫁く方安全ならん。

蝶々は花にはなれぬ間かな　捨女

女子の職業問題は遂に缺く可らざる者となれり、蝶々たる妻の寢あまる樂みは、良人たる牡丹の露を帶びたる間にこそ、誰論芳槿一朝新、其處に人生須臾の果敢なきを覺らば、少くとも、近代の教育を受たる者は豫め萬一の覺悟なかる可らず、是故を以て一面富家に嫁くを便とすと云ふものあれど、富貴は固浮雲の如し、若かず女子は何事にまれ、女藝學問の一を得て自家藥籠の物となし置く方肝腎なり、亦近頃、夫妻共力して一家の生計費を分擔する事、中流以下の家庭に流行す、女子の自由を認めて多少活動の餘地を與ふるは可なり、然れども、如何に生計の困難からとは云へ、全然之が爲め女子が天職たる家事の責務を擲たしむるは、其當を得たるものとは云ひ難かるべし、自ら其間に手加減なからずやは。

ぬきん出て咲けよ若木の梅の花　多代

世の少壯なる女子に對して勤勉なれと勸むるの意なり、『ぬきん出て咲けよ』と云ふ、其ぬきんづることが最もむづかしきものに屬すと雖も、努て達せざるはなし、學んで及ばざるはなし、勵み給へかし。

流行の配色は完全なるものにあらず

岡　不崩

色彩といふ事に就て、昨今大部注目せらるゝやうになつたといふ事は、之は誠に喜ぶべき現象と云はねばならぬ、殊に女子に取りては最も之が必要を感ずるのである、豫て予は本誌上に於いて繪畫が女子

に必要であると云ふことを説たが、何が爲に其が必要かといふに、畢竟その必要の一つは、色の配合といふものが總ての點に就て必要であるが、之を研究するの捷徑は繪畫であるといふ意味に於て述べたのである。

一口に配合といふけれども、其範圍はなか〱廣いのであるが、今は單に狹い範圍內に於て此配色といふ事が應用せらるゝと云ふ事のみを話して見やうと思ふ、例へば、室內の裝飾とか、又は衣服の裝飾とか、若くは食卓の上に於けるものとか云ふ點に於て、この中に於ける食卓上の事などになると、その重なるものは何であるかと云へば、言ふまでも無く

形と色

とであつて、その如何によりては吾人に非常の快感を與へ、又その食物をも美味感せしむるのであるがその形と色との二つの中で、何れが最も吾人に快感をも與へ、又不快の念をも惹起せしむるの力があるかと問へば、寧ろ色彩そのものこそ形以上に吾人を感せしむるのである、換言すれば、色彩は形態に優つて居る、如何に其物の形が美しく、謂ゆる曲線の配合が調つて居ても、若しその色彩が惡ければ其物を損ずるのである、けれども之に反して、もしも少々形は不充分であつても、その色彩さへ調和を失はなければ、優に其形の不足を補つて餘りあるのである、此事を此所に細說したいが、暫らく其は後日に讓るとして、直接女子に影響を及ぼす所の

服裝の色彩

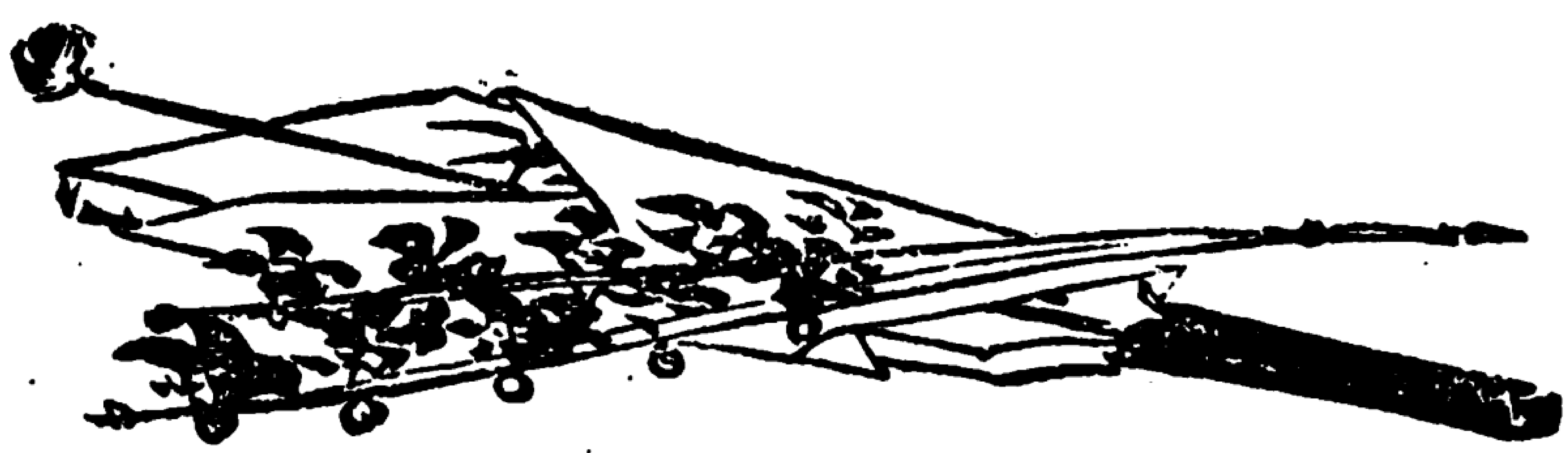
の事を話して見やうと思ふが、元來配色法には一定の形式もある事とて、それを逐一說けば心理學上の作用などに就て最も趣味あると同時に高尚なる理論にも涉るのであるから、正月早々そんな肩の凝る話は抜として、當時有觸たる事實に就て御參考までに述べる事としやう。

この頃種々の雜誌や新聞紙上に、服裝の色彩の事に就て彼是と云はるゝ向を見受けるが、それらは色彩といふよりは單に配色の事に關して云はるゝので

あるが、何に致せ大部世人が配色の必要を認めて來られて喜ぶべきの現象であるとは云ふものゝ、この配色といふ事は前にも逃べた如く、之には一定の形式があるので、委しく說くには之が原理から說き來らねばならぬのであるが、是まで世上に彼の是のと配色の事を談せらるゝ向を見るに、

概ね專門的の研究を缺いて居る者が尠くない、既に彼の是のと配色の事を談ずる御本尊樣が專門的の研究を缺いて居らるゝのであるから、從つて其言はるゝ事も推して知るべしで、誤解の點が少なく無い、多少配色の事に就て智識あるかの如く見ゆる或一部の人の所說が斯ういふ風であるから、之が爲に誤まられつゝある人も多い、のみならず現今の配色が非常に誤まられて居る。

流行の配色は完全なるものにあらず



大体色の種類といふものは、物理學上の所說と我々專門家とでは數を異にして居るので、乃ち

物理學では七色
專門家では六色

といふ風に一つの勘定が違うのであつて、專門家の六色とは

黃、赤、靑、橙色、綠、紫、

の六色に區別せられてあるのであるが、物理學上では右の六色に桔梗色を加へて七色と數へるのである、けれども專門家は其桔梗色を除いて居る、寧ろ之を除いた方が便利なのである、一体言ふまでも無く色といふものは

調合に因つて各種の變化した色

が出るのであつて、配色とは右の六色の中の

二種以上が適當に配合されたもので無ければならぬのである、尚ほ一歩を進めて言へば、その二種以上の色が適當に配合されて、そして其物の精神を充分に發揮する所の色彩で無ければならぬのである、假りに黄、赤、緑の三色にて其物を彩りたりとしても、その色彩の爲に充分其物の精神を發揮する事が出來ないとすれば、开は眞を得たるの配色法とは云はれぬ、之に反して、それらの色を以て彩りたる物が、其配色に關せずして精神が生々と發揮されたりとすれば、开は能く配色の調和を得たるものと云ふべきである、例へば、玆に或一人の品性高き婦人を畫きたりとして、その人物に施されたる色彩の爲に、一層その人物をして品性の高きを想はしむると云ふやうな配色こそ、眞に調和されたる配色法といふべきである、故に古人の描かれたる佛畫の如き、之に接する者をして轉崇高の念を起さしむるといふものは、これ全く此理由に基くものである。

去れば諸嬢は各自の身邊を装飾するに就ても、必ず右の觀念を土臺に措かねばならぬ、常に斯觀念を離れずして諸嬢が身邊を装飾せられたならば、素より容貌も關係するが、然すれば**より以上の高潔なる風采**を發揮する事が出來るので、女子に取りて此位必要な事は無いのである、尤も摸樣も關係するのであるが、それ以上色彩が大切である、實に此色彩如何に由りては令嬢と賤業婦とが明らかに區別せらるゝのである。

然るに當今間違つた事には、配色の必要といふ事認めつゝも、その謂ふ所の配色なるものは如何と見るに、たゞ或一つの色の濃と淡いとを以て標準として居る、乃ち實際之が今日一般の現象で、多くは澁んだ色の鐵とか鼠とかいふやうなものを以て流行の色として居る、實に笑ふべきの至りと云はねばならぬ、元來色の淡いものに依つては完全なるものと認められぬ、何故なれば、淡い色と淡い色とでは最早

調和の餘地が無いではないか、而かも淡い色を配合したものを以て品格の宜いものと心得て居る、强い濃色や熱色を使つては、高尙な優美な配合は出來ぬものゝやうに思つて、何でも淡い鼠色の種類なれば品の宜いものと一般に承知して居るが、これは全く誤解である。

斯く配色法が極めて單純な事ならば、誰も心配はせぬ、又色彩の事を喧しく議論はしない、我々專門家は苦心する必要は無いのである、而かも其强い色を使つて其を適當に配合させて上品にする事が六ケ敷いので、其處で之が研究の必要を生ずるのである

そこで予はかねぐ〳〵女子の服裝を造るに就て、尤も多少年配にも依るが、小兒から或時代迄は赤若くは紅を用ゐねばならぬと云ふ主張である、併し其にしても用ゐる塲處を擇ばねばならぬといふ窮屈な事を云ふのでは無い、既に何れの婦人でも頭の先から足の爪先まで之を用ゐて居るのでも分かる、で予は其赤を土臺として各種の色を客分として配色を用ゐたならば、女子は餘程賑やかな裝飾が出來ると思ふ、或は少し派手と云はるゝとも此方を奬むるのである。

成程現今流行の色合はオトナシイかは知らないが、併し或一面から云ふ時はサムシイので、此サムシイと云ふ事は人々が好くものでは無い、畢竟今日の流行は其柔和といふ事が亢じて陰欝に傾いたのであるが、併し其が爲に各自の品性に及ぼす所の影響を慮からなければ不可ぬ、今や我日本は世界に向つて大に活働すべき時代、乃ち人なれば血氣盛りに働くべき青春の時代なるにも拘はらず、如何に流行とは云へ、陰欝な凄涼な色彩を好み用うるの結果、國民の元氣の上にまで其を及ぼし、延いて食住等の上にまで影響するとしたならば、實に恐るべく戒しむべき事ではあるまいか、それよりもモット活々した生氣のある少し强い色を裝飾するやうに爲ねばならぬのである。

强い色は決して下品でない

自分の口から言ふのも妙なやうであるが、一體今の流行の色合は陰欝であつて、恰かも頭を剃らぬ尼らしく感ずる、されば何々鼠といふよりは寧ろ墨染の衣を用ゐた方が宜い、多少地位ある婦人が兎角色彩の事などを饒舌らるゝが、お氣の毒な事には、その御本人は一向に配色の事などは研究せられて居らぬ、故に其高説は往々人を誤まるまでも、三文の價値だも無い、否、其人自身が既に流行の支配を受けて居るのであるから、寧ろ哀むべきである、世の諺にも、餅屋は餅屋であるから、左様いふ事は專門家に任せらるゝやうに御注意を願ひたい。

兎角世の人は熱色を下品といふが、それは使方が惡いのである、尚ほ一つは世人が此色は彼の雛妓等が用うるので、その邊からして之を卑しむのではあるまいか、もし左様とすれば、淡色は賤業婦が好んで用うるから、之と同様のものを着る者は卑しむべきであると云ふ事が出來るのであるが、それは不條理である、つまり配色の使方にあるので、濃色でも熱色でも其等を配合したものは下品でない、否、却つて其調和宜しきを得さへすれば、之が爲に崇高、優美、柔和、淑德の感を深からしむるのである、その證據に、例へば昔の畫、即ち藤原時代に於ける紫式部其他淑德高き人々の肖像を見ると、何れも藍鼠とか又は西行鼠とかいふ淋しい色彩は無い、寧ろ單純な赤とか綠とか黄とか云ふ濃色で裝飾されて居る、又凡て高貴な婦人は燃えんばかりの緋色の袴を穿て居らるゝが、それにも關はらず何處かに品が高くして、決して惡感を催うさる事は無い、又男子の側であつても、彼の義家といひ、義經といひ、その他有名なる武將の着けらるゝ緋縅の鎧は如何かといふに、これ亦下には赤地錦の垂衣を着して居らるゝけれども、少しも滑稽には見えぬと同時に、人物としても下品には見えぬ、何處までも武將らしく崇拜すべき價値が見出さるゝのである。

我々專門家は研究の爲に、時としてはモデルを使つたが、その場合は傭男に緋縅を着せた事もある、

又傭女に五ッ衣を着せて寫生した事もあつたが、其時に彼等は其が爲に孰れも品格を揚げて見らるゝのであつた、尤も形との關係もあつたが、併し何處までも其は色が主である、即ち形と色との調和が取れて居るからである、斯く云へば、それは我々に既に歴史上の感念があるからであると云はるゝであらうから、且らく我國を離れて遠き外國に於ける、而かも時代を隔つる羅馬の服裝を用ゐて見ても、矢張高尙峻殿に映ずるのである、そして其が何れも日本古代のものゝ如く赤、黄、綠等の熱色を用ゐられて居る、尙ほ斯くの如き實例を擧ぐれば澤山にあるが、熱色が下品で無いといふ事は是等を以ても證し得らるゝのであるから、まづ是位で畧して置かう。

右に反して淡色のみを用ゐると、前述の如く淋しく哀れッぽい感じが起る、されば極端に云へば、淡色の流行は乃て亡國の兆と云つても差支ないのである、故に成るべく活々した風になつて貰ひたい、再言すれば、少しは華やかと云はるゝも寧ろ賑やかに裝飾しなければ不可ぬ。

特に予が諸孃に向つて注意して置きたいのは流行の事である、一体この流行といふ事は、或一部の者が利益上の必要より造つたもので、決して世の趨勢といふ事は出來ない、之を忘れてはならぬ、從つて

流行の配色は完全のものでは無い

然れば夫等に支配されずして、自ら工夫して淡色を避けらるゝが良い、尙ほ強い色の事を詳說したいが、それは後日に讓るとして、この配色を擇ぶといふ事に就て、未だ我國には適當な道具が無いので、實は予も多年此事に關して苦心して居た折柄、友人大原鉦一郎氏の考案に成れる、衣裳色あはせといふ、新案物を寄せられたのを見ると、また完全といふ事は出來ないが、一寸手輕で家庭上に於ける一種の遊戲具ともなれば、又一部實用上にも供する事の出來るもので、三十色のものと五十色のものとの二種にせられ、三越吳服店と東洋社で發賣して居るが、その使用法も簡便で、大に有益な器具である。

この寒空に貧民は如何暮らすか

下谷萬年學校訓導　山下城之

饑へと、疲れと、寒さ

貧民生活の狀態に就ては、既に各種の雜誌新聞に同情の記事を載せられて、殆んど遺憾なく世間の人に知られてゐる、さりながら知つた上にも、知つて貰いたいのは彼等社會の內情です、わけて良家の方々には重着をしてさへ、堪へ難い此寒空、間斷なく迫る饑と、疲れと、寒さとに、悶え戰ひつゝある彼等悲慘の有樣に對して、一掬同情の淚を分けて戴きたい。

貧しき職業の種類

私の學校は、東宮殿下御慶事の折、兩陛下より特に下し賜つた資金によつて、其當時設立されたもので、以來、下谷、淺草其他界隈の貧民子弟を敎育して、少なからぬ卒業生も出しました、そこで是等子弟の保護者は如何なる職業に從事しつゝあるでせうか、則ち

人力車夫、荷車挽、日雇人足、土工夫、紙屑拾ひ、薦人足、配達夫、砲兵工廠職工、工場雇人、遊藝人、鑄掛職、洋傘なほし、刃物研、下駄なほし、空瓶買、青物行商、納豆賣、魚屋、緣日商人、飴行商、賃仕事、紙箱張、靴下ほごし、かもじとき、パイプ造、提灯骨編、紙屑撰、狀袋張、大工、左官、木挽、屋根葺、鍛冶屋、桶職、革職、賣卜者、烟管ラウ替、按摩、剥貝屋、魚の腸拾ひ等。

紙屑拾ひが慘の慘

以上數々の中で、魚の腸拾ひ、紙屑拾ひなぞが慘の慘なる者です、拾つた紙屑は問屋へ持込むのですが、通常は一貫目一錢位です、最も別に大襤褸と小襤褸の區別がある、大襤褸は木綿切の稍大きなので五錢位に賣れますが、小切類は一錢五厘より高くは

ありません、朝薄暗い中から我家を出て日の暮れまで夫婦で歩いてやつと二十八九錢の收入よりないのです、一体この拾ひ集めた、襤褸や紙屑は如何なる要途があるかと云ふに。

　どんなものも役に立つ

　大襤褸は繼ぎまはして船頭達の着物に縫ひ、亦は勞働者の足袋の底などに致します、小襤褸切は什麽するかと申すと、布に染めた藍を絞つて茶碗類の繪を畫く資料にするそうです、其外紙に製したりなどするのは誰方も御存知と思ひます、其内で拔毛は一束にして油を拔き髢に作りい、ブリキ屑なぞは土地の古池を埋るやうに使ひ、大概な物は



廢物利用の道を講じ、さて最後に殘つた塵埃は湯屋が高價に引き取るそうです、なぜ這麼ものを買ふかと云ふに、大層火もちがよいからと聞いて居りますして見ると、どんなものでも役に立つ譯です。

一家五人の糊口の因

私が調査に歩いて見ると實に悲慘極まる一家によく遭遇致します、前申上げた紙屑拾ひの家なんぞは、家族五人で、夫婦二人の外に三人の小供を抱へてゐるのです、夫婦は毎日打揃うて紙屑を拾ひに出る、其收入が二十七八錢で、一家五人の命を繋いでゐるのです、それでどんな風に二十七八錢を使ふかと訊くに、家賃(四疊半位)と、蒲團の賃借代を合せて一日十二錢と云ふ約束になつてゐる、ツマリ親子五人が僅かの煎餅蒲團を引張り合ふのです、まアそれもよいとして、收入の中から先づ十二錢を引くと、殘金が二十八錢とすれば十六錢となる、此內から小供三人の飯代を出さねばならない。

子を思ふ親ごゝろ

萬年町には殘飯屋と云ふのがある、病院や軍隊の拂ひ下げの飯米屋で、味噌漉一杯六錢の相場です、朝夕の二度小供の分と見て十二錢で足りる、跡の四錢は漬物代や小供の駄菓子代に宛ると云ふのです、それでは夫婦の食料代が出ないので、更に尋ねて見ると『先生お耻かしい話ですが、私達は晝日中稼ぎまはつて居りますから、掃溜で拾つたり、又お慈悲に貰ひましてどうにか恁うにかやつてゐます、それゆゑ干だるいこともあります、けれど宅には小供が待つてゐますから、それを考へては却々に夫婦が勝手に喰べることは出來ません』と申すのです、子を思ふ親の心は何れも同じ筈なのです、私は眞實心から泣きました、何と云ふ悲慘な一家でございませう

一枚蒲團と裸の兒

亦あるところに這麼のがありました、主人は俥引ですが、客を乘せて歩く內、御徒士町邊で何かに蹴いて大怪我をなし、以後持病のリユーマチスが再發して愈々商買にも出られない、一枚の蒲團の中には

當年五歳の兒が丸裸で寢てゐる有様で、着物はどうしたかと訊きますと、質屋にやつて、此預り蒲團を質屋から請け出して來たとの事でした。

帶も鍋釜も質屋の庫

同じ家でしたが、ある時尋ねて行つたときに、主人が帶を占めずにゐるのです、段々訊いて見ると質屋へ十錢でやつてあるとのことです、そんな僅かな金ならと云つて、私が十錢を渡して請けて來いと云ひますと、二月の利子で二錢餘分に拂はねば先方から渡さぬと云ふ、成程最もな話ですから、十二錢をやつて受出させた事もありました、全体生活の困難には殆んど閉口して、質屋なぞへは、色々なものを持込むそうで、商買道具は勿論、股引、腹掛、鍋釜中には米などを持つて行くとか聞いて居ります、實にお話にはなりません位です。

五厘の團炭と俎板の薪

其他或家では木炭を買ふに三錢でなければ賣らぬ餘義なく團炭を五厘丈買つて來たと云ふのです、それで、薪はなくなる、仕方がないゆゑ俎板が殘つてゐるを幸ひ、今これを割るところだと申すのです、恁う云ふやうな生活の家から來る子供の教育ですから、其困難も一通りや二通ではありません、同じ机を並べてゐる朋輩でも一寸過つて、他生徒の肩に觸でもしたら忽ち仰山に『痛い』と怒鳴るのです、それで『誰さんはどうかう』と一々申出るのです、什麽も子供はヒガんで困ります。

正月の餅はどうする

貧民町の最も慘憺な狀態を赤裸々に觀察するのなら、師走も二十六七日と押迫つたとき、萬年町邊なら先づ山伏町あたりを歩いてごらんなさい、數多く並んだ熨斗餅の小さな切を三ッ四ッ位買つて行く者がある、細かく刻んだ餅の切なら誰でも一人して三ッ四ッは喰べられる、それを家族四五人が分割して心祝ひに正月を壽く心のあはれさ、なか〱に涙の種でございます、それゆゑ私の學校では、毎年正月には生徒一般に對して、小さな鏡餅を一個宛やるこ

とにしてあり升が、有繁、自宅へ持歸つて最初神棚へ祭り、後に到て親から貰ふ樣にする者が多い樣です。

子供の樂しみは玉乘と活動寫眞

平素學校では生徒の貯金を奬勵して置く、そして盆正月には夫々二圓なり、一圓五十錢なりを子供に渡すのであるが、親は其金圓を以て、質屋から衣類を受出してくる者あれば、古着を買つて遣者も有る、何れも僅の小遣錢を貰てすぐ淺草公園なぞへ行くのです、其金で江川の玉乘や活動寫眞を覗くのだ、一体浪費の傾きが有ます、貧民町の状態と申して、取止もない話でした。（責任記者）

羽子板の句

玄洞閑人

實に樂しきは春なり、一夜明けたる曉の雲の、帶、初日の光さつと、紅ゐなせる伊勢海老の表に照りて、門松の緑彌々濃やかに、笹の葉風注連の紙片を戰がせつ、神代の事も思はるゝと云ひし守武が俳諧も趣見えて、そゞろ嬉しさに涙溢るゝは老の我のみにもあらざる可し。

一家團欒しての屠蘇酒、床の鏡餅に千代を壽ぐ根松、熨斗昆布神馬藻の垂れ懸れる、橙の赤きを見に付ても、心ときめく、況してや男の子は紙鳶、女の童は遣羽子に興を盡して、一日の清閑を縱いまゝにするは初春の賜とも云ふ可く、杖曳きて孫の手を執りつゝ、小松が根に倚りて腰をさすりながら、徐ろに風霜の犯し難きに習ふ子の日の故事も思ひ出でらる今は文明の有難さに電線と申す蛛の絲の如きもの縱横に引廻され、紙鳶の唸りも空に聞えずなりしが、羽子板のみは押繪附の贅澤な態に殘りて、下町の夕邸小路のあした、墨塗らるゝ男もありけり。

羽子板やたゞにめでたきうら表　嵐雪

正月の樂みの一ツ、たゞにめでたきものとのみ思ひ捨てゝ表の押繪も、古さ異りて次第に俗惡に流るゝを迫めず、返し見る裏繪の松竹に、瀟洒なる墨色

をめでゝ、末の愛子に購ひ與へやりたるが、幼し子の獨り羽子突き飽きて、長き振袖の間にほの見せつゝ、人の問ふに恥かしとツト逃げたる、なか〳〵に興多きものぞかし。

遣羽子ににくい男の手出しかな　　多代女

下町の軒先によく見たる圖なり、今日を晴と着飾りたる町娘、小僧の長松連を相手の遣羽子最中、折から御慶戻りの男千鳥足覺束なく、矢庭に通りすがりさま、ハタと横手に拂除けたる『隨分辛い人ねエ』の怨聲を、一身に集めて行過ぐるなぞ、女性の心を遺憾なく現はしたるは、多代女が手柄の一句なる可し。

羽子つくや用意をかしき立まはり　太祇

腰打て逃たる、墨に代る白粉に顔色どられながら遣羽子の下手を續て笑るゝさまの滑稽なる、初春の長閑なる瑞氣は、四邊限もなく立こめて實に心地よき極み、邪氣なき遊とこそ云ふ可けれ、召波の句に

羽子板の一筆書や内裏髪

と云へるあり、昔振の素朴なる墨繪を許せしものにて、今の俳優の似顔に、錦を競へる、召波の今日にあらしめば、如何なる句をや詠出でたらん、今は知らず

羽子板の事、世諺問答にをさなきものゝ蚊にくはれぬまじなひなりとあり、一名胡鬼板と申すは、木蓮子なぞを蜻蛉の頭に見立てゝ是に羽根を附して板にて突く時は、恰も蜻蛉の如く蟲を恐れしめんが爲なりとか、以前は東京市内にても、到るところこの遊びありしも、往來の賑はしくなれると、無事を好まざるとにより廢れ氣味となりたるものにて、偶々遣羽子に興ずる折から、大喝一聲、道路規則を持出されては萬事ぶち毀しなれば、自らこの優美なる遊びも廢れ行くと思ば、何となく心細き感なからずや。

一家の圓滿を心懸けよ

錦秋女塾長　秋間爲子

人の生涯といふものは、短いやうで長いもので、その長い間には何時病に罹らぬとも云へぬ、其勤ま

のとれぬ秋に際して、必ず丈夫であつた時代を繰返し、其時の有難味を感ずるやうな次第です、だから常に圓滿な家庭に處してゐる時の心掛を大事にし、其心得を忘れずに萬一の悔を貽さぬ樣にして戴きたいので、私が染々感じた事を少しお話し申上げます。

不幸な私の家庭

私の實家は元來男子に緣が薄く、二三代前から男の子が生れると昔の驚風、今の腦膜炎と申す病氣で悉く倒れて了ひ、私は姉妹八人の末ツ兒でございましたが、皆死まして、殘り三人の內姉の二人は良人に別れて苦勞して居りますし、其當時私一人は無事良人もあり、一家を組織してゐましたが、云ふに云はれぬ一家の不和が出來、私の婚家に居ります間の苦勞はとても口には出ない位でございました、併し姉の二人が良人に別れての苦勞を見るにつけても、亦母の心を推量つも滅多に別れ話なぞは持出されず足掛十年と云ふもの、泣きの淚で暮して居りましたが、所詮別れた方が互ひの爲と諦め、愈々離緣の相

談をして實家へ歸りました、私は他に緣附くと云ふ望みは毛頭なし、尼にでもなつて、浮世の風を防がうかとも考へたのですが、一層看護婦にでもなつて不幸に惱む多くの人達を救ふことが出來たらと亦思ひ、進んで帝國大學病院へ志願を致しました。

漸く家庭の趣味を覺る

看護婦の役目は唯器械的に働くと云ふ丈では道でない、とても情熱のないものには出來ない仕事で、老人は我生みの父母、中年者は兄弟姉妹、の心持でかゝらねばならないと思ひまして、修業を積んで病院を出たのは去る廿六年頃でございました、斯う云ふ有樣でしたから、固々一家の經營に就ては餘り語るべき資料を持ちませんし、自分の不幸から深く家庭の圓滿と云ふことに心を止めて、いつも塾生には此事を申し含めるのでございます、以來十五年間、私は看護婦學校の經營、塾生の監督に從事し近頃は大日本婦人農藝會の爲に盡瘁して、殆んど餘閑がございませんが、姪の夫婦が親しくしてくれます爲、

此歳になつて漸く家庭の趣味を會得した樣な譯でございます。

婦人の獨立と云ふ事

今では別に苦勞と云ふのも自身一個にとつてはありませんから、過去を思ふてはよく當時の苦んだ時代を切拔けることが出來たかと自分ながら不思議に感ずる位です、御承知の如く、婦人は決して獨立すべきものではない、私は餘儀ない事情で、一家の趣味を覺ることが出來ず、この歳まで非常な苦勞をして參りましたのですが、それでなくて安全な家庭の人が、好んで獨立なぞを企だてるに到つては實に沙汰の限りです、女子は昔から婚家の人となるべき約束にな



つてゐるので、特殊の家庭のもので、止なく獨立をする者の外、この心掛の違はぬ様に願ひたいのです。

獨立はどの位續く乎

萬一可弱い女子が獨立したとて、五年や三年は續くかは知れませんが、生涯と云ふ長い年月の間の貞操を全うするものは殆んど稀ではございませんか、世の中には誘惑がある、女子の不確固な心につけ込んで誘惑の手が邪魔をする、斯して大方の女子は救ひも出來ぬ墮落の淵に落込むものが澤山ある、始め獨立を標榜したもので、この不幸な境遇に泣いてゐる、女子が天下にまアどの位居るでせう、女子には女子の職分がある、一家にあつては臺所の經濟から衣類調度一切の切盛に容易ならぬ苦勞が入るものです、今の若い人達は昔とちがひ嫁に行くことを何の事とも思つてゐなさらぬやうですが、實際己れが其任に當つて見ると、困難八分の樂は二分位です、その困難を次第を切り拔けて行く中に、追々樂になるのです。

一國圓滿の基

一家のことは實驗せねば解るものではない、男女に限らず、生家から學費を送つてもらつて勉强する間のことは疊の上の水練で、いざ大海に泳ぎ出すとすぐ沈んで了ふ、だから學校にゐる中一生懸命、他日大海に泳出す心掛けを積んで置き、學校を卒業し愈々社會と直接交渉するやうになつては、嘗て學んだ功能を見せて、其困難の度を減殺するやうにせねばならぬ、つまり一家の圓滿を計ることは大にして一國の圓滿を導く所以となるのですから、他日の悔を貽ぬやう心得て欲しいのでございます（文責記者）

春のおとづれ

白雨野人

冬の東京は意地惡く風が荒む處だ、雪や霰と、凍つた雲が日本海から吹送られて來るのを、本州の脊梁山脈が喰止める、さて水分を除去つた、空つ風を

『武藏野』の東京へ放り出す、だから東京の冬は無闇と乾燥する、『大寒、小寒、山から小僧が泣いて來た』の童が聲、凍てたる大地にカラコロ響かせ行く駒下駄の音を聽いては、初春の陽氣は何處から來るかと思はれる、斯うして霜月も師走も過ぎ、百八除夜の鐘を數へて、竈神にさゝぐる有明の灯、漸く白くなり行くところ、初鷄の一聲、二聲、春は我宿を訪るゝのである。

春を待つ蒲團の中

愛娘の絲子と、當年八歳の三郎は枕頭に紙鳶と羽子板を置いて、眼をパチ〳〵させてゐたが何時しか寢てしまつた、絲子が不圖、氣が附くと、臺所では母が襷懸けで何かしてゐる、餅の焦げる香がして來る、矢庭に夜着の袖から手を出して、三郎の鼻をつまんだ、三郎はビツクリして『アラ姉さんがおいたをしま——す』と喚く、絲子は『私ではなくつてよ』『イエ姉さん——』と三郎が泣聲になる、隣から父さんが『五月蠅い』と云ふ、臺所では今母さんがお雑煮ごしらへの最中で『絲子、元日ですよ、お起きなさい』と、云ふ、絲子は默つて夜着の中へ潜り込む、今度は三郎が、夜着の袖から手を入れて絲子の顏を撫る、絲子は『阿母さん、さぶちやんが』と小さな聲で云ひ附ける、父さんが『ほんとに五月蠅い子供だ』と獨言を云ふ、二人はおとなしくなつた、絲子から段々と起る。

我床の間の春

窓の戸を繰ると、庭先の梅擬を透して初日の光りがパツト射し込む、眩いので障子を締めると、横たへた物干竿が薄く映る、鳥影がさす、床の間にはいつのまにか鏡餅が据えてある、白木の三寶の脚が見えて、昆布、穗俵、小殿原、ところ、根松が飾つてある、上へ刎ねた裏白の葉に、紅なせる伊勢海老も面白く、橙の黄なるは色彩の調和を得たと思ふ、水仙の瓶ざし、福壽草の一鉢も眼に附く、表玄關から出ると、門松の緑の若々しさ、はや御慶の人々の袴著けたるが通る、庭を一周して、井戸側へ來て見る

と、こゝにも輪飾がかけてある、若水は今朝、此夜の主婦の手にくまれたのだ。

樂しき一家團欒の春

『お雜煮を祝ひます』と云はれて座に就く、いつになく父さんも畏まつて『お目出たう』と云ふ、母さんも同じやうに『相變らず』と云ふ、絲子と、三郎は兩親の顏を等分に見較べてゐる、『サア絲子も三郎もお目出たうとおつしやい』と母さんが云ふ、絲子は默つてお雜煮の這入つた鍋を見てゐる、鍋は可成大きい、そこから堪へず濛々と立騰る湯氣の中に母さんの顏が見え隱れをする、三郎も絲子の顏を見てゐたが、いつしか雜煮の椀に手を出した、母さんは別に何とも云はぬ、父さんは『餅はよく嚙んで喰べるんだぞ』と分つたことを云ふ、そして『お夏、今日はフロックにしやうか、それとも和服にしやうか』と訊く、絲子も三郎も、箸を止めて母の顏を見た『それ零れるワ、それ〳〵』と父さんは三郎の膝に手巾をあてゝやる、『和服になさいよ』と母さんが答へた、斯して樂しき夫婦は屠蘇の杯を重ねた、

他人の家の春を尋ぬ

『ア、酔ふた、お夏冷水を一杯くれ』と父さんが歸つて來た、母さんは苦い顏をしながら洋杯の水を取りに行く、絲子は『亦お酒、父さまはお酒好きね、ね、母さま』と云ふ、三郎は蜜柑の皮を剝きながら椽先に腰を掛けてゐたが振返つて、『父さまはお酒が好きなんだ、きつと好きなんだ』と云ふ、主人は笑顏で『お正月だぞ』と其儘火鉢の側へ坐る、母さんは馳け寄つて『夕方まで何處に』と訊く。

春の行衛はいづこ

春の氣は東京の隈なくに行渡る、年賀の名刺受山と積んで、松の內の日數も漸く立ち、十五日の小豆粥に、行く正月の名殘を惜んで、春やもとの我にあらざるを覺る、門松は冥土の旅の一里塚、人の一生は、蓋しかゝる間に存し保たるゝものではあるまいか、春の行衛は遂にいづこ、朧月夜か花吹雪か、老鶯か、煙雨遠里小野を罩めて、尋ぬるに其心なし。

女子教育の困難なる實例

女子技藝學校長 足立駒子

學校に迷ふ

近年、社會の風潮が著しく、女子の自由を尊重するやうになり、隨つて、女子教育の呼聲が大分八釜敷なると同時に、一方生活上の壓迫に對し、自然造花とか、編物、刺繍など云ふ職業の智識を要求することゝなつた、それ故この機會に乘じて、設立された學校の數は甚だ多く、生徒は何れの校に學ぶを得策とするか、頗る撰擇に迷ふ如き有樣なのです、併し、學校の方では餘りに實科に重きを置くと、肝腎の婦徳の養成を疎かにする、さればと云つて、修身の心得ばかり無闇に詰込んで、時勢の要求を忘れてもいけませんし、其邊の手加減を考へて、帶には長し、襷には短かしと云ふやうな、批難のないやうにせなければならぬ、當事者の苦心と云ふものは一通りではありません。

お料理の失敗

私の口から恁う申すと憚りあることですが、什麼も唯今の女學校を卒業なすつた方に家庭から小言が出る、則ち學校を出て一家の主婦となつたときは兎角姑の側から不平を申されるのです、先日も私の心易い方へ、お輿入なすつた奧樣が、姑御のお指圖で鹿尾菜を煮たさうです、ところが學校でお習ひになつた割烹の中には、這麼料理法がなかつたとやらで始めから水を澤山入れてだぶ〳〵にして終はれたのです、學校で教へるのは實際に遠い傾きがありますので、這麼失敗もあるのでございます。

學校設立の動機

私が此學校を興しました動機を申しますと、屢々世間の家庭から前申したやうな批難の聲を聞きますし、なるべく家庭と連絡のつくやうな、平易な教授

法によつて技藝學科を授けて見たいと思ひまして、他の助力を仰がず、私一個人の考へから設立致しましたのです、何しろ、世間の女子の多くは、まだ小學教育を受け、やがて家事に從ふと云つたものばかりの者が、數に於て優れて居りますから、入學者も小學卒業を程度としたのです、ですからこの學校では、裁縫の衣類などはなるべく汚れた儘を持つて來させるのです、それを解いて、洗張をさせ、綿入なら古綿を入れさせますのです。

衣類の縫直しを面倒がる

困ることには女子と云ふものに虛榮心があつて、他生徒の手前、古着や古綿を持參するのを嫌がるので、勢ひ衣類の縫ひ直しなぞを面倒がる弊を作りましてはと思ひ、八釜敷申して一時賞與を出して奬勵した事がございます、これは一面に於て儉約と云ふ女德を養ひ、古綿のちぎれ、絲屑なぞの細かな整理法を練修いたしますので、他日主婦となつてから利益も少なくなからうと信じます、其他、割烹料では西洋料理もございますが、一家を組織した上の普通料理と云へば、專ら世間で行はれてゐるものでなければなりませんし、お壽司とか、キントンなぞと云ふやうな、手輕いものに重きを置いて居ります。

女子の稼いだ結果

女子の職業問題に就ては、色々皆樣の御意見もあるやうですが、私は矢張、女子と云ふものは他家の人とならねばならぬ約束があり、一家の稼人たる良人の命令に基いて、家事の整理に隨つてゐた方がよいやうに思ひます、普通裁縫に達し、算盤をよく彈き、文字をよく書き、簿記の道に通じてさへ居れば先づ女一通りです、何も女子が獨立して稼ぎ得たとてどの位の報酬が得られませう、世の中には小學教員なぞを望んで結婚され、お子達を擧げられた後までも、お通ひになる方がございますが、留守中子守は雇はねばなりませんし、こんな費用に自分の報酬を擲つて了ひます故、先づ結局不便と、勞力の提供だけが損となる勘定です。

造花は職業に適せずとは申すもの丶、萬一一家の不幸と云ふことを頭に置かねばなりません、それ故藝に秀で丶いなければ駄目です、いざ稼人を失つた場合には自巳が覺え込んだ腕を振はねばならぬ時で一家の經濟を支へねばならぬ、この職業には何が適當かと云ふに、刺繍なぞは今日のところよいでせう、併し造花丈は疑問です、造花が女子の職業として、利益が果して多きものかどうかは斷言出來兼ねます。

家の用は澤山ある



何故かと申すに、造花の需用は近年非常なものではありますが、其用途の重きを云へば簪でせう、造花術の遺憾なく普及された今日女子は何人でも自分の髮に挿すもの位は造ります、這麼次第ですから、私の知人の關係した造花會社も、一時外國へまで輸出したのですが、トウ〳〵潰れて了ひまし

た、單に一家の主婦が慰み半分と申したとて、毎日赤や紫の色に兩手を染めてばかりはいられないでせう、まだ我邦では男女同權と云ふことは許されません、女子は家に在て仕なければ成ぬ用事が澤山ある。

男子と二人連でくる生徒

女子の教育は容易でない、それは今更申迄もありませんが、私立學校、殊に實科に重きを置く學校には、如何はしい生徒が什麼かすると紛れ込むのです、亦この取締には餘程骨が折れますので、少しの油斷も出來ません、過日も此校へ、男子と二人連で入學を願ひに參つたものがありました、私が會つて見ますと、願書は持つて來たが履歴書はないと云ふ、願書には保證人の名がありませんから更に連署してお出しなさいと云つて歸しました、するとやがて持つて來ました。

情夫と同宿する生徒

願書には身許保證人の姓名住所印鑑までありますし、一々身許調べをやると云ふのも手が屆きませぬ

ゆゑ、入學を許可しました、然るにこの生徒だけは白粉を眞ッ白に塗つて恰で遊女のやうなのです、本人に訊くと、自分には夫があつて、それは大學生だと申すので今は夫の友達と同居してゐると云ふのです、愈々怪しいと思ひましたから他の生徒に探らせますと、此女子は願書に認めた保證人と云ふのが情夫で、殆んど話にならぬ自墮落ですから直ちに退校させました。

墮落は男子より早い

恁う云ふ始末ですから、唯今では容易に入學を許しません、私はまるで人相見のやうに顏から何からすつかり調べたり、聞きたいした上で、保證人の印鑑を求めるのです、うつかり入學をさせますと、他生徒の風儀を紊したり、遂に大變なことになりますので、充分警戒しては居りますが、實に女子と云ふものは男子より墮落の道も一際早いやうに思はれます、夫々教育の任にある者は一層の注意を此點に拂つてもらひたいと存じます。（文責在記者）



一

はや、松の内も僅かになつた折からのひと日、恰度、ちらつきだした薄雪が緑濃やかな門松に輕々積んでやがて晴れた黄昏かけて、法學士工藤金彌の宅には骨牌會が催されつ、少なからぬ人數も集つてゐる。ことに新婚後日の淺い若夫人が得意の交際振を見んとて、態々、同窓の串田が物好きに押掛けて來たのにさへ、肝腎の主人は顔も出さぬ。

ぶちまけて謂ふと、金彌は元來理性に優れた男、ベースボールの外には何の嗜好も持たぬ、而巳ならず永く學校生活を續けて來た者に似合ぬ交際下手の因循家で、あれでよく檢事の役が勤まると思はるゝ位であるが、本人は一向平氣なものだ、それに舊臘以後妙に鬱氣勝で、些細な事にまで氣が荒む、唯さへ面白くないのに、今夜の骨牌會なんぞ、心中大いに進まなかつたのであるが、美千子がたつての頼みに澁々承諾だけはしたのである。

這麼事で始めから骨牌の場所には出て來ない、自分の書齋と極めてある二階の六疊に引込んで、美千子がせめて挨拶だけでもと謂つたが、

『俺は那麼悠長な時間は持たない。』

と膠もなく刎附けて獨りウヰスキーを呷つて居る。

二

『俺に骨牌を遣れと謂ふのか、フヽン。』と苦笑して

『吾輩は如何にも君の知つての通り、骨牌黨ぢやアないんだ、星が什うの菫が恁うのと云ふなア、お門違ひで、これでも遊球ではお互ひに撰手になつたこともあるなア。』

と、金彌は芳烈な酒をグッと、一息に飲み干して思出したやうに、

『併し、吾輩だつて、全くの嫌ひと謂ふのぢやアないんだ。ナーニ是でも君津先生のところでは、一夜、骨牌で血戰をしたことさへあつた、實際。』

と、妙に力を入れて、

『厭なことを聞かせて濟まないが……………』と云つて、直ぐ、

『吾輩は何故か今の妻が蟲が好かぬ、結婚したばかりだつて、當り前さ、吾輩の蟲が好かぬと云ふに就いては、實に變な證據物件が手に這入つたのさ、其證據も解らないやうな、解つてゐるやうな、吾輩、考へれば考へるほど不思議なものだ、まア聞いてくれ給へ。

實は、彼女が舊臘實家へ些と歸りたいと謂ふから歸してやつた、其故吾輩は日曜一日丸潰しをしたのだ、午から退屈だし、書籍なぞを整理し始めたが、不圖、見馴れぬ彼女の銘仙の平常着らしいのに、唐縮緬の

下者を添へて、片隅に置いてあつた。

三

『そこで吾輩は手に觸れて見た、樟腦の香がムツと鼻を衝く、察するところ、久しく箪笥の抽斗にでも藏つてあつたのだらう位の鑑定はついた、無論好奇心からではあつたが、右の袂の底を探つて見たが何にもない、ないのは不思議はない。

更に左の袂に手を入れると、揉みくちやの紙片が出て來た、其證據物件と謂ふのはつまり其れさ、紙は西洋罫紙で、これに然かも紫洋汁で何か書きつけてある、文字を讀んで見ると恁うだ。

……今はなか〳〵に戀愛に醉ふ時に非ず、御身は先づ人の母たる實際問題を自ら處決するの時機に達したる者と存候、秘密の必ず僞りならんことを望む、若し果して御身の言の如く事實とせば、寧ろ此際豫ての術策を斷行し、秘密を秘密として永久に存續……

唯是だけで跡も先もないが、君！

吾輩にとつては致命傷で容易ならぬ問題だ、亦吾輩の見地からしても捨置けない大事件だらう、書面の上では名宛人も差出人も破つてあるから解らないし、一概に美千子の貞操に疑惑を抱くのは、酷かも知れないとしてだ、吾輩は爾後大いに煩悶を重ねてゐるのだ、胸中を察して呉れ給へ。

四

『彼女が實家から歸つた時、いつそ離縁しやうかとも思つた、全くのところさ、だが、吾輩は一面冷靜に搆へて見る氣にもなつた、兎もすれば、夫れが火の如く熱してくる胸を押へて、此解つたやうな、解らないやうな謎の紙片に對し、殊更に落附いて見たのだ』と、金彌は悵然として嘆じ、如何にも遣瀨なささうに

両腕を撫りながら、

「それで、彼女は其晩遅く歸つて來ての文句が善い、妾は這麼ものまで出し忘れたのね、眞實に慌てゝゐた事」と、云ふのだらう、吾輩が合槌を打たないのに一寸失望した樣子だつたが、彼女は矢張巧みなものさ。

「妾もつと早く歸つてくれればよかつたにね、眞實に御不自由でいらつしやつたでせう、どうぞ許して頂戴」

と云ふのさ、と、客を一瞥して、

「ね千君。世の中の若い女性は皆、這麼秘密を持つてゐるのだらう？」

五

下座敷では今がた一勝負濟んだ樣子で、一同のどつと笑ひどよめく聲が手に取るやうだ、次で拍手の音さへ起つたと思ふ刹那、誰やらミシリ／＼と、段梯子を上つてくる氣勢に、金彌は礑と口を噤んだ。

すると、境界の襖が開いて、ポツと上氣した顏に庇髮の後れ毛を掻いやりながら這入つて來た、其れは美千子である。

「串田さん、まアいつの間に…………這麼處へお逃げになつて了つたのです、隨分お人がお惡い事、オホ…………………」と、蓮葉にやつて除けながら、金彌を見て、

「貴郎、良人は這麼な事が嫌ひなのですつてね、交際の惡い方なんです。」と、云ひ過ぎたかと思つたが、一轉して笑ひながら、元氣よく

「サア、いらつしやい。皆樣がお待ちですから」と、其儘、襖も開けたなりで、二階の梯子をドン／＼下りて往つた、金彌は尻目に見送りながら、獨語のやうに、

「まるで氣違ひぢや」

「イヤ、祭するよ。」と、串田は眞顔に云つて、殘りの洋杯を飮み干した時、下から
「串田さん。串田さん。」と、連呼する。聲は美千子に違ひないのである。金彌はモウ疊からの仕草に刧を烹やしてゐたが、堪らなくなつたと見え
「莫迦!!」と大喝した、下座敷まで屆いたか、それは解らぬ。
「まア。」と、串田は制したが、急に慰ぐさむる言葉さへ見出せなかつたのである。
かくして骨牌の夜は過ぎた。

六

松飾も何時か取除かれて、骨正月も近づいた或朝のことである。串田は例によつて、會社の出勤を急いで日比谷の停留所で電車を下りた途端。
山高帽子の一紳士が、俥で勢ひよく蒐抜けやうとしたのを、眼覺く認め
「工藤君ぢやアないかね。」
「オヽ。」と、紳士は俥夫を止めた。
「過日は失敬した。」と串田が挨拶を押附けるやうに引奪つていきなり。
「君。妻は離縁したよ。」と、平素の金彌とは全く別者のやうな、極めて薄ぺらな調子で、云ひ放つたのを、餘りに仂ないとでも思つたか。俄かに俥上に腰を屈めて小聲になり
「獨身が餘程氣樂でいゝや。……………翌の晩遊に來給へ、大に飮う。今日は事件で急ぐからこれで失敬する。」
俥は一散に馳け去つた。呆氣にとられてゐた串田は何か、永い惡夢に襲はれてゐたのが、愕然と覺めたやうな氣持で、歩き出したのである。

（完）

鹽鮭を甘く喰べる法

冶庖會第四教場々主　龜井まさ子

何時も變らぬお料理のお話ですが、新年になつて氣が附くのは、鹽鮭は如何して喰べたら甘いだらうかとの事です、少し大家になると到來物の鹽鮭が臺所に何本もあつて、ソウ毎日々々燒いてばかり喰べてもゐられませんし、何かよい方法をと思ひました時次の料理法によつて召上つてごらんなさい、大層旨しうございます、其方法はいろ〳〵ありますが、

其一法　鮭を丸ごと水に漬けて鹽出しのため、三日ばかり置くのです、最も二三度水は替へます、そこで豫め注意することは鱗を引くことです、普通市で賣てゐるものは、鱗が引いてありませんから、先づ始めに鱗を取つて水に漬けるのです、その鮭を五寸位宛筒切にして、骨を去り、その切身にしたのを醴の堅煉に二日も漬けて置く、是を串に貫して燒いて喰べるのです。

其二法　同じやうに鮭を一日水に漬けて置く、夫れを取出して茹る、茹あがつたのを粉な〳〵にする、別に五合入位のどんぶりに鷄卵の黄身のとこを三個程破つて入れる、それに馬鈴薯の茹たのを一合程裏漉にしたのを交せる、それと一所にし、鹽胡椒を入れて兩面を燒くのです、なか〳〵旨しうございます。

其三法　矢張鮭を一日程水に漬ける、これを三分四方位に賽の目に切つてざつと茹る、別に大根を千に刻んで、鹽でよく揉み、其を洗つて酢に漬けて置く程よい頃を見料つて前の鮭を是に交合せ、上に甘酢をかけ生薑の纎に切つたのを振りかけて喰べるのです、甘酢の造り方は味淋を煮て、酢を交せ、醬油を加へるのです。

其四法　今一ツは水に三日餘り漬けて置いた鮭の身を離してたゝくのです、その叩き拔いた身を更に擂鉢でするのですが、一方味淋の煮出しを入れながらやります、それの五合に玉子の白身二個の割合で茹でゝ交せ、蒲鉾の形にしてから、蒸しても、燒いて

も宜しうございますが、燒いた方が旨しうございます、それに就て、忘れてならないことは前に申上げた鹽出しの水を二度代へることとです。

軒端の梅

石井枯梅

初めて松島の觀瀾亭に遊びたる時なり。二七ばかりの少女が、其可憐なる容姿に似も付かぬ裃着たる如き東北辯にて、豐臣秀吉より伊達政宗に賜はりし桃山御殿の一部を、宗忠の御時、江戸品川より更に此地に移してふ、一わたりの說明したる後、澁茶など召させ玉へ、名物の煎餅も候ふと、もて來たるを見るに、大さ彼女の掌にひとしく、薄紅の色褪せたる、宛がらに紅蓮の花の散り重れるが如く、試に口にすれば、味淡泊にして茗香一入清かりき、埋木の盆のかたくななる、松島燒の湯呑のねぢけたる中に、優しくも雅びたるものかなと稱ふれば、耳聾て齒疎なる老人、行燈袴に蔽へる膝を進めて、御口に適ひたるか、是こそは貞尼紅蓮の作り始めし茶菓にて、今は松島煎餅と呼べども、其昔は松島紅蓮とのみ傳へられき。裏手の觀音堂こそ、紅蓮尼が庵の跡にて、尼が紀念の軒端の梅も殘れり。瑞巖寺への道すがら、訪はせ玉へといふ、故こそあらめと、亭を出て、導かるゝまゝ北に數十步すれば、果して荒れに荒れたる庵室あり。茅檐傾きて、朽壁僅かに存するを見る、庵側の石ぶみと、案內の老爺とに就て、尼の事蹟を聽くに、彼は出羽象潟の商賈の子なるが、其父三十三觀音巡詣の爲め、諸國徘徊中、松島の人掃部と會して、同氣相投じ。一見舊知の如く相携へて肝膽を照したる後、白河の關に到りて、惜別の情に堪へず、其女を以て掃部の子に配し、以て親交を新にせんと誓ひ、互に袂を分ちける。かくて父は象潟に歸りて、娘を松島に送りしに、先是、掃部の子小太郎は病みて黃泉の客となり。風の如き訃報は、愛嬢旣に在らざる象潟に達し。花の如き新婦

は、新郎消えて淋しき松島の家に入りぬ。掃部夫妻、慰めかねて婦を還さんとせしも、婦はいつかな聴かず、小太郎に代りてこそ、舅姑に事ふべけれど、細き腕の甲斐々々しく掃部夫妻を養ひけるが、一日、偶小太郎が幼時庭先に植ゑたりてふ梅の花の盛りなるを見て、追悼の念やる瀬なく、

　栽え置きし花の主ははかなきに
　　軒端の梅は咲かずともあれ

と詠み出てしぞ痛はしき、花神同情或は人に超ゆ之より後、花更に笑はずなりたるぞ不思議なる、婦は之を見て、花咲きてこそ慰むすべもあれ、由なきことをしてけりと、取りあへず。

　さけかしな今はあるじと眺むべし
　　のきばの梅のあらん限りは

と歌ひたれば、元の如く満枝悉く花となりたりといふなりき。佳話與に傳ふべく、情致何ぞ茶菓に似て淸き、紅蓮は、彼が孝養の道つくしはてゝ、落飾したる後の名なり、庵は心月といひ彼が修道のあとなり、紅蓮去て後、春雨秋霜幾百回、碑畔の古井舊苔滑かなる處。今猶庵の名の心月を宿し、八百八島の老松いよ〻緑に、福浦島の實竹益茂れる中に、彼が主と見たる遺愛の梅の幾代の孫なるか、淸痩の枝古雅の花、僅かに其俤を留めけるこそめでたくも優しけれ、當時我は梅幹を撫して、躊躇去るに忍びざるもの多時なりき。

我が見たる梅散て更に一歲、訪ふ人もなき心月庵趾軒端の梅は、今年も猶故人の德を語つゝあるや否や。

正月の行事

齊木龍吉

西洋では日本や支那のやうに餘り正月といふことに重きを置かないが、その代り十二月の二十五日をクリスマス即ち基督が誕生せられた日だといふので我國の正月にもまして祝ふのであるが、併し正月といふものは左まで熱注しないのです、併しそれは彼

國と我國とでは自然建國の由來も異にして居れば、從つて風俗人情等も異なるので、敢て彼を珍とし我を貴びたりとすることもあるまい、依つて我國は我國の風習として何處までも正月を祝ふが宜しい。
　そこで此お正月は、是まで我國の仕來りとして門に松飾りといふ事をするのであるが、なぜ門の飾りに松を立てるかといふに、松は古來からして常盤木と云つて、その色の何時までか變ること無き瑞祥を採つたものである、而して竹は如何かといふに、松は千歲を契り、竹は萬代を契るのみならず、一体この竹といふものは仙境のもので、仙人か之を愛すると共に、その中が空虛で少しも汚らはしい物を含んで居ない、そして其色は四時變らない、恰も松の常盤の色の如く芽出度く、且つ直ぐで而かも上下に節のある事は、如何にも有道の心に契へる所からして、前の松と同じく芽出度い植物としてある。
右の松竹と共に吉瑞あるものとして、春の飾りに用ゐられて居る植物があ



る、即ち楪葉なるものが其で、これは新らしい葉が出ると古い葉が落ちる、で此楪葉と合せて橙を使うが、この二つを合せ稱してだい／＼ゆづり葉乃ち父の身代を子に讓ることを意味した者であるさうな。

それから齒朶、これは學名に書く時は羊齒と書くべきであるが、今は通俗に從つて齒朶と書いて置くが、これは何に事寄せたものかといふに、齒はよはひと訓み、朶はえだと訓むから、そこで朶の長く延るやうに、よはひの長くのびるやうにとの意を寓したものである、尤も齒朶は一名もろむきといふ所から、其名に因んで夫婦の和生を祝したものとの說もある、何れにしても芽出度いものゝ一つに相違ない之に次で籔柑子なるものが使はれるが、之は名を聞いたばかりでは餘り芽出度くも無い樣だが、其實を洗つて見れば面白いので、乃ち其寶石の樣な眞紅の愛らしい小な子供を持て、そして何時も變らぬ青々たる綠の葉の色の樣に家庭が變らぬ事を祝うのであるから、是以て芽出度と云はねばならぬのである。

植物類に關した事はそれ位として置いて、吉春に用ゐる神馬艸のことをお話いたさう、これは却々古い歷史があるので、神功皇后が三韓を征伐なさるゝ時、海中の藻を採つて軍馬の秣となされたのに基くといふ事で、神馬草または穗俵と書き、そして春の吉例に用ゐらるゝのである。

右に似寄つたお話は注連繩のことであるが、これは如何いふ意味かといふに、太古天照皇大神が其弟の素盞雄命の爲され方に面白く無い事があると云ふので、御腹立の上天の岩戶にお隱れになつた爲に、天地がスツカリ眞暗になつて仕舞つたので、八百萬の神々は天の安河原で御評議の結果、やうやう大神の御心を宥めまつりて天の岩戶よりお出し申したが再びお隱れになつてはならんといふので、それを防がんが爲に注連繩をひいたのが抑もの始まりださうで、左繩に綯つて端を揃へぬのが法であるといふ事だが、何故左綯にするかといへば、總て左は清淨なるものと致し、そして端を揃へぬのはすぐ其儘すな

をといふ意を表したものであると傳へられて居る。
元日迄の仕度は大抵何處も似た者で、此他に昆布はよろこんぶ、海老は老の字にあやかり、熨斗は鮑の何々といふ樣に左樣異つた事は無いやうである。

こゝに元旦早々行はるゝ事を申ますれば、一番鷄が東天紅と鳴くや否、望み多き年の初めの曙の光がまだ微けき頃、何かにつけて改まる年中行事の第一番に手を下さるゝは何かと云へば、まづ若水のことで、之は當節元旦早朝に掬む水のやうに我人ともに心得て居るのであるが、その起源を探つて見ると、これは昔朝廷の公事であつて、舊年十二月の土用以前に主水の司といふ役人が、翌年惠方に方る井戸の蓋をして置いて、その年の正月立春の日、朝早く土瓶に汲上げて天子に奉りましたもので、この立春の日に若水を飲むと、一年中の邪氣を除き拂ふといふ實は支那の故事から來たものであるさうなが、何時の頃よりか元日の朝といふ事になつたのであるが、何も僻事だなどゝ云つて支那を崇拜するでもあるまいかと考へる。

次に屠蘇のお祝の事であるが、この名の根源は、屠蘇は思邈が庵の名にして、鬼氣を屠絶し、人魂を蘇醒すといふに起つたのであつて、即ち邪氣を屠殺して、人の魂を蘇生せしむるといふ意味であるからこの屠蘇酒を飲めば一家に病無く、一家これを飲めば一鄉に病無しといふので、この位芽出度ことは無い、併し何うも此頃は藥種屋で販賣する紅絹入りの屠蘇には、白朮、桔梗、山椒、防風、肉桂、大黃の六種が果して入つて居るか何うかと云ふ事は疑問のやうに思はれる。

それから諸孃が春待かねの羽をつく事であるが、今は誰の似顔の押繪の羽子板が宜いとか惡いとかいふやうな事を言つて、ホンの遊戯としてのみ玩ばるゝのであるが、これも其本を尋ねると禁厭から起つたものであるといふ事ですが、併し換れば變るものではありますまいか、それは昔子供が蚊に喰はれぬやうとの禁厭で、今の羽根の形は蜻蛉に形取つて遊

つたものである、といふものは、知らるゝ通り蜻蛉といふ蟲は好んで蚊を食べる蟲であるといふ所から木槵子などを蜻蛉の頭となし、これに羽根を附けて板でつきあげたに基くといふ事である。

次に手毬あそびであるが、これも諸孃の春遊としてはふさはしいもので何となくその毬歌を聞くのも優しく感ずるものであるが、併し其起源を聞くと寧ろ男性的のものゝやうに覺えるのである、なぜなれば、これも支那で昔黄帝の臣下に蚩尤といふ、兎角心のねぢけた者があつて、この者は兄弟が八十一人もあつて、孰れも身體は猛獸の形をして居るのみならず、その額の硬さ加減は銅か鐵のやうで、その上砂をムシャ〱喰べるといふ、イヤハヤ言葉ばかりは人間でも、その心根は何處までも曲つて居つて迚も黄帝の命令などは聞く者共で無い、それであるから無暗に良民を害して仕方が無い所から、遂に黄帝は怒つて之を征伐せられ、なほ誡めの爲に蚩尤の首を毬に突かれたのに形取つたので、ツマリ惡を懲す見せしめの心持だといふ事であるから、即ち年の初に之を突き、遊戯の傍ら年中の災難を除ける事になるのであるから、諸孃は盛んに突いて娯しまるゝが宜い。

松の話

林　天　然

松は我邦では、百木の王と稱へ、高齢に達すると千歳色の變はらざるとにより、古來新年の裝飾や、其他の慶事に用ゐられ、又梅、竹と共に三瑞と呼ばれ、圖畫及び其他美術品の好題となツてゐます、支那にても、松は群木の長と稱え、木に公なる字に造れたのです、我邦にてマツといふは、千歳の壽を保つといふ意義より起り、タモツを略してモツといひ、後モツよりマツに轉訛せるといふ說であります。

植物學上の松

松は、裸子植物であツて、松柏科に屬し、概ね喬木で、大なるものは、周圍、一丈餘、高さ十餘丈に達し、そして常綠木であツて、四時綠葉が蒼々としてゐます。葉は針の如き狀で、普通二本であるが、往々五本の葉があります、幹の表皮は、粗くて、鱗形を爲し、老ゆるに隨ひ、順次に剝がれ落ちます、四五月頃になると新に芽を出すが、之をミドリと呼び、花は風媒花で、一株の枝に雄花と雌花を生じ、雌花は、ミドリの上方に位し翌年の秋に至り、はじめて成熟し、所謂松毬と爲り、果實を散布するの後落下するのです。

日本に於ける松の種類

世界に於ける松の種類は、實に七十種以上もあるが、日本では、十種に達しないのです。其内最も普通なるは、赤松と黑松の二種で、外に五葉松、姫小松、偃松、海松、琉球松、臺灣松などあり、又蝦夷松、色丹松、落葉松、(一名富士松)など、マツの名稱があるけれども、これは眞の松類ではないのです。

▲赤松は、一にメマツと呼び、樹皮は赤褐色で、葉は軟かであります、我邦の松類中、其分布最も廣く北は北海道から、南は、九州の端にいたるまで、到る所の瘠地に生じ、大なるものは直徑五六尺に達し有用の良材となります、此松には、蛇目松、黃金松エンコウ松、虎斑松、單葉松、白髮松などの變種あり、多くは庭園に植えられてあります。

▲黑松は、一にヲマツと呼び、樹皮黑き故、黑松と名けられ、葉は硬直で一般に赤松より強剛なるが如き觀あるより、男松と呼ばはれたれども、決して雌雄の關係あるのではないのです、此松も日本普通の種類であるが、其分布赤松の如く廣くない、主に潮風の吹き來る所に產し、殊に本州の西南部に多いのです、此松は、赤松よりも大くて、其風姿雄壯であるから、山野風景を飾るに適して、ゐます、變種には、霜降松、枝垂松、蛇目松、虎斑松、サンゴノマツ、單葉松などあつて、園木或は盆栽として、賞揚されてゐます。

▲五葉松は、葉の數五本より成るを以て、又五鬚松と名けられ、深山に自生する松で、さして大木はないが、優美であるから、庭園に植えて愛賞され、根岸五葉松、カムロゴエフマツ杯の變種があります。

▲姫小松は、形赤松に似て、葉は五葉で其形細くて短く、裏は白色が多いのです、此松は姫小松といひながら、大なるものは、高さ八丈周圍七八尺に達するのがあるそうです、五葉松と同じく寒地に適し、我邦では奥羽地方に產し、多くは庭園に植えられ、霜降五葉、蛇目五葉、イカリゴエウなどの變種があります。

▲偃松は、別にイハネマツ或は千疊松と稱え、六七千尺以上の高山に生じ、寒氣の爲め丈低く、地を這ふが如くであるから這松と名けらる、信州御嶽、加賀の白山、日光の女体山の如き、一面此松で塞がれてる所があります。で北海道から千島邊には諸所に生えてゐます。

▲海松は、一に葉長五葉と稱え、我邦の東北地方から樺太に產すれども、多く朝鮮に產する故、朝鮮松と名けられ、高さ十間以上に達し、松毬の大さ五六寸もあつて、果實は食用と爲り、若葉は肥料となります、此松にも白斑朝鮮松、黃斑朝鮮松、蛇目朝鮮松などがあります。

▲琉球松は、琉球に產するから、琉球松と名けられ幹は赤松に似て、葉は剛いが著しく細いのです。

▲臺灣松は、主に臺灣に產する松で、赤松に似てゐます、又一種五葉の松は同地の高山にあります、以上の內で、五葉の葉を有するものは、五葉松、姫小松、偃松、海松の四種で、高山或は寒地に產するものは、偃松、五葉松、姫小松、の三種であります。

◎世界に於ける松の分布

松類は、主として北半球に產し、東は亞細亞の東部から、中央亞細亞を經て、殆んど歐羅巴全洲に及び又北米合衆國にも、各種の松類が多く產出してるのです、で亞細亞の南部から、阿弗利加全洲に及び南亞米利加には、松類は殆ど產出しないと云事です。

世界の各地に產する松は、其種類數十種もあるが、就中普通なるは、亞細亞から、歐羅巴の大陸に生ずる學名ピヌス、シルブヱストリス、俗に森松といふ松であります、北亞米利加に產する一種の松は、葉は三葉で、長さ一尺五寸に達する珍品です、此松は園木として最も賞揚され、俗に大王松と呼んでゐます、又北米にはストローブといふ松が多くあつて、有功な建築材に用ゐられてゐます。

◎松の用途



松の用途は、頗る廣く、殊に赤松、黑松の二種は、建築材をはじめ、或は薪炭となり、或は船舶材と爲り、或は橋材と爲り、殊に松脂があるので、よく水氣に堪え

土臺杭や川杭には最も適してゐます、それから近頃西洋紙の材料となり、其他種々の器具となり、松脂はまた工業用及び藥用の油となります。で松煙は、墨の原材となり、若葉は製して煙草の代用となり、そうして赤松の下に松蕈が生え、黒松の根に茯苓が生じ、また兩松の林には松露が出來るから、これ等は皆松の副産物といつて可いのです。

五葉松、偃松、姫小松杯は、園木或は盆栽となり、海松及び偃松の果實は、食用と爲り、此他一般の松は、新年或は祝賀の時、裝飾に用ゐられてゐます。

◎松と風景

松の姿態は、雅趣に富み、年老ゆるに隨ひ、益々妙觀を呈し、殊に黒松の如き、樹皮黒くて、龜甲明かなれば、恰も龍の、或は天上に昇るが如く、或は地に臥するが如く、實に屈曲百態、人工を加ふるも、猶及ばざるが如きものがあります、そして黒松は潮風を好むゆへ、海岸の砂上といはず、岬角上といはず、冲の小島といはず、よく繁茂する故、天然の風

景を飾ること頗る多く、日本三景中、松島の如き、天の橋立の如き、其他舞子の濱、須磨明石の濱、博多の濱、三保の松原の如き、皆松あるを以て賞觀されるのであります、彼の東海道五十三次の並木の如きは、古來旅人の心意を慰めたことは決して少くないのです、或學者が、日本の名勝地から、松の樹を取り去ると、眞に殺風景になつてしまふと、言つたが、全く其通りであります、松は實に風致を添ゆるものであるから、神社佛閣の境内或は公園に植ゆるには、最も適當の木であります。

◎松の名木

松は、我邦到る所に生育してるから、所々に名木が有ます、今世間に知れてる著名の松を揚てみましよう。

▲高砂の松は、播州高砂町の高砂神社の境内にあつて、一に「相生の松」といひ、古來謠曲に謠はれてゐます、古今集の歌に

誰をかも知る人にせん高砂の
松も昔の友ならなくに

▲尾上の松は、矢張播州尾上村尾上神社の境内にあつて、高砂の松と共に、謡曲に謡はれてゐます。

▲倉禰の松は、矢張り播州印南郡にあり、和漢三才圖會に周圍一丈八尺、高さ一丈、樹の高さ一丈三尺艮より坤に向ふ枝幹の長さ十一丈、乾より巽に延長せるもの七丈許り、枝を支ふるの支木百五十八本あり、傳ふる所によれば、菅原道眞左遷の時、自ら植えたる松であると、和漢三才圖會は、今から二百年前に編著された書物であるから、今若し此松が生存してるとすれば、當時よりも餘程巨大となつたでありましよう。

▲手枕の松は、矢張り播州別府村住吉神社の境内にあり、東西に廣がる枝四十八間、南北に張れる枝十八間、殊に地に横はれる一枝あり、其形狀により、手枕の松と名けられしいふことです。

▲唐崎の松は、近江國琵琶湖の岸にあり、古來近江八景の一に數へられ、また三百二十餘年前、明智左馬介光春が、湖水を渡りし馬を、此木に繋いたので有名であります、名木には、往々植えかえたのがあるのに、此松の如きは、三百年前の歴史を記されたまゝ生存してをるのです。

▲日出の松は、三河國六連村百郷區清水氏の庭内にあり、高さ二丈餘、東西の枝は十四間、南北の枝は十五間に餘り、恰も蓋を覆ふが如き形狀です、此松には小野湖山の題詩があります。

▲龍伏の松は、安房國西岬村汐見岬にあり、一に「汐見の松」とよび、高さ八九尺しかないが、幹の周圍一丈三尺に餘り、偃蹇として、地上に横臥し、其形恰龍に似てるので「龍伏の松」、或は「臥龍松」と稱し關東一の名松であります。

以上の外「羽衣の松」、「鎧掛の松」、「旗掛の松」、「袈裟掛の松」など、諸國の名所案内記にあれども、多くは附會の傳說で、信ずるに足らぬのです。

◎松と歴史上の傳說

▲昔秦の始皇帝が、泰山へ登ッた時、急に暴風雨が起ッたので、側にあッた、松の木の下に風雨を避け

た、すると不思議や、其松の枝葉が折り重ッて、始皇帝の爲め、風雨を禦いてくれた、始皇帝非常に之を感賞し、此松を太夫といふ官位に封じたといふことです、然し事の眞否は分りません。

▲呉の丁固といふ人が、若い時、腹の上へ松の木が生えたといふ夢を見、松は十八公といふ字から成ッてるが、われも十八歳になるまでには、必ず出世するであらうと誇言して居ッたが、果して十八歳の時司徒といふ官職についたといふことです。

▲昔我邦の宮中に於ては、子の日の遊びとて、一月初子の日に野原に出で、小松を引抜いて、千年の齢を祝ふたものであります、之を「小松引」といひ、子の日であるから、小松を根ごと引抜くのであるといひ、第五十九代宇多天皇の寛平八年正月六日北野の雲林院に行幸して御祝宴をお開きになッたといふのが、抑も子日の遊びの始めでありましよう。

◎松と文學

松は、千年の齢を保ち、そして四時變色せざると、其姿態が、如何にも雅趣であるので、或は歌、俳句に、或は漢詩に、或は文章に作ッて、其徳を賞揚してあります、近く我邦の御勅題にも、去る三十七年には、巖上の松、四十年には新年の松、四十一年には社頭の松、今年四十二年には、雪中の松と、ある如く、まことに幸福な樹であります。

松の異名には、木公、太夫、壽擬、龍鱗、枯龍、龍骨、霜骨、霜幹、霜傑、後凋、宗老、貞幹、青幹、常盤、新甫などありますが、多くは、形態、性質、傳説等から出たのです。

松を詠みたる和歌は、古來非常に多くあるが、中にも、祝賀の題として詠めるものが多いのです、今僅に其數例をあげてみましよう。

常盤なる松の緑も春來れば
　今一ほしの色まさりけり　　源　宇于

春日山岩根の松は君が爲め
　千歳のみかは萬代ぞへん　　能因　法師

君が代を何にたとへん常盤なる　　詠人　不知

松の緑も千代をこそふれ
君が代に引くらぶれば子の日する　公實
松の千歳も數ならぬ哉
位山木高くならん松にのみ
八百萬代と春風ぞ吹く　實朝

千變万化の娯樂

松山裕

正月やうしろに近き大晦日とやら、げに一夜明ければ元日で、謂ゆる元日やゆふべの鬼か禮に來たと云ふやうに互に心をうちとけて新年お芽出度と年禮に廻らるゝのは、これは重に御主人側のことに屬するので、そのゆふべの鬼などゝいふものは、二本角のあるものやら、又は三本乃至五本の角を有つて居るものやら、但しは其顏色が如何なる色をして居るかも御存じの無い諸嬢は、たゞ〳〵一夜明けての元日が待遠しかつたので、サテその元日がすぐ目の前に來て見ると、サア何をして遊ばうか知ら、歌がるたか、双六か、又はトランプか福笑かなどゝ其遊方の多いので、實は之が擇り取りに困らるゝ事であらうとお察しするのである、もとより何れも興の深いので勝り劣りは無いのであるが、併しまだ夫程趣味の深い遊戯とする事は出來まいかと想ふので、ツマリ夫等は少女方の弄びにしか適しないものではあるまいかと察するのである。

之に反して花がるたといふ娯樂は、餘程前の數種に比べると興味の多いものゝやうに考へると、申すのは、歌がるたとか双六とかいふ遊戯は、その弄方が單純であるに反して、花がるたの遊戯は、その札數は僅か四十八枚であるけれども、その弄ぶ方法が澤山にあるので、從つて興味も深いやうに感ずるのである、約めて言へば、花がるたといふ遊戯は變化が多いからして、自然興味を感ずることも深いのであらう。

一体遊戯娯樂といふものは、多少その間に益する

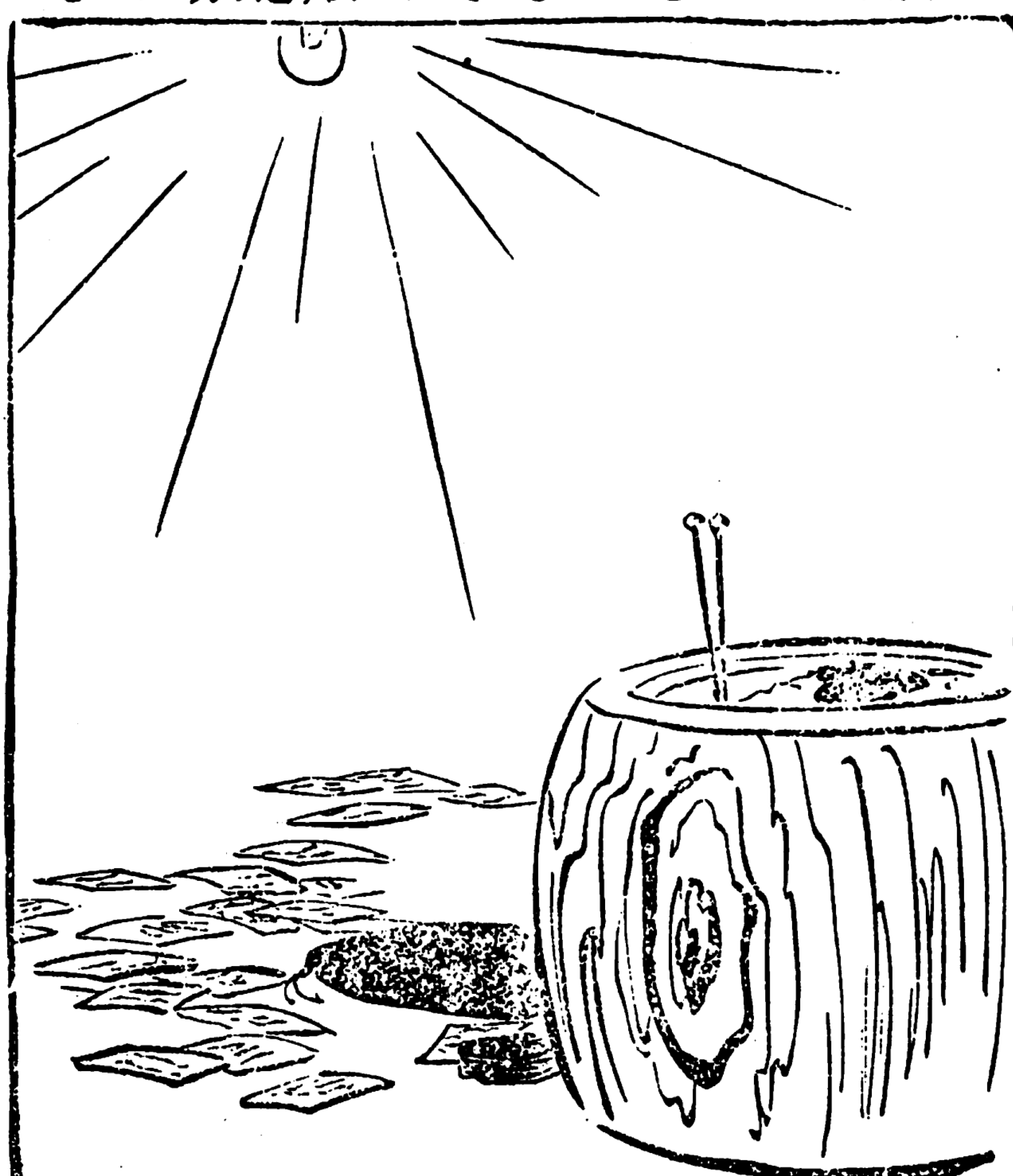
點が無くてはならないのであるが、餘りその弄方が單純であると同時に、謂ゆる理に落ちては興味を減ぐものであるから、成るべくは變化の多い興味の多いもの丶方が遊戯とし娛樂とするもの丶本意にも適ふものではあるまいか、併し玆にチヨツト斷はつて置きたいのは、この花がるたといふ遊戯の具が、是まで兎角惡用せられたことの一事であるが、それは惡用したもの丶罪で、道具そのもの丶咎ではあるまいと思ふ、若しも其戯具が惡用せられたからと云ふので之を憎み之を擯けるとならば、むかし支那で名高い大盜賊の盜跖といふ者は、夜中に他所へ忍込む爲に、水飴を敷居に塗つてソツト雨戸を明ける道具に遣つたと云ふ事であるが、去りとて孔子の一の門人の曾參といふ人は、老母の歯が無いので、始終これを供して其心を慰めたといふ、斯樣な美談までも打捨てらる丶ものであらうか、それは道理に適はない言分であらうと思はる丶で、予が今こ丶に御注意を願ふといふのも畢竟はそれで、遊戯の具として娛樂を取らる丶のみで、斷じて之を惡用せられないやうに望むのである、物は僅かの差別で高尚にもなり又は野卑にも陷るのであるから、くれぐ\/も其邊の分ちを混じてはならぬのである。

この花がるたは通俗にいろはがるたともいふて、紙製の札であつて、その數はいろはに因んで四十八で、その表面には梅、松、櫻、藤、かきつばた、鹿、猪、杜鵑といふやうに、云はゞ月令に分けて十二ヶ月となし、その一ヶ月が四枚づ丶の組合せになつて居るので都合札數が四十八となる、この四十八枚を三人以上の組で優劣を角するのである。

傳ふる所に依れば此かるた遊の起りは、初め元龜天正の頃、かの貿易に來て居た和蘭陀人が弄んだものを、その荷揚人足等が何時しか見覺えてから流行し出して、それから寛永の頃になつては餘程四方に廣がつたものであると云ふ事だが、元來かるたと云ふ語は、西班牙の紙または牌といふ事である、尤もその當時のものと現今玩ばる丶ものとは其繪模樣が

大變に異うので、これは段々變遷して來たものだといふ事である。

サテその遊戯の作法は、前述のやうに大抵は三人を一組とするのである、けれども時としては四人乃至五人を一組とする事もあるがその時は相應に札數を分配するけれども、その内の何人か其休んで殘り三人にて勝敗を決するのであるが、普通この札に就て後に優劣を定める爲に、其札と札の點數といふものを定めて置く、恰度トランプのやうである、その點數は總計で二百六十四とし、之を三人に割つて一人の得點數が八十八、四人なれば六十六點を標準となし、これらの點數に超えたものが勝となり、その足らざるものは負となるので、それには鶴、銀櫻月、道風、銀桐の五枚は一札を二十點と價値を附け置き、鶯、杜鵑、八橋、蝶、猪、盃、鹿、雁尾長の九標を十點を定め、その他の短冊印の札は凡て五點の値とし、餘のものは一



點と極めて置くのであるが、前の二十點中の道風即ち通俗にあめと稱するものは、ふけといふ玩方の時は無點にも用ゐらるゝの特權を持つて居るのである。

それから此遊戯に役といふ事を稱へて、之に手役と出來役といふ二種がある、すなはち前者は、自分に配られたる札の模樣によりて、短一とか十一とか又は二十一若くばすべといふやうな事があるのであるが、それらの事は同じ遊戯者から聞き取らるゝ事として、茲に出來役のことを少しお話いたさう。

これらも左まで深く說明するまでゝも無いと思ふから、成るべく畧して置いた方がお爲であらうと思ふのである、そこで誰しもチヨツト口の先で云ふ表菅原といふのは、松と梅と櫻の三枚の短册が揃へば宜いので、裏菅原といふのは鶴、銀櫻、鶯の三枚の札の揃つたこと、靑短とは牡丹、紅葉、それに紫色の短册のついた菊と、この三枚の札の揃つた時、三光とは鶴、月、銀桐の三枚、四光とは前の三光に銀櫻の加はつたものをいひ、五光とは上の四光に道風の一を加へたものいふので、尙ほ此外に月見、五短花見、忠臣藏、正月、大鳥、小鳥、梅月、八橋、有明、鶯宿梅、月役、中梅などいふ種々の出來役があるが、この外に一つ面白い出來役でふけと云つて誰でも札數が六枚以下で、そして十六點以下を取つたものは、どんなに側の者が善い役を拵らへても、それから吹消て仕舞つて、その者が一番の勝者となるとは云ふものゝ、實は一番の勝負を無計算にせしむる特權があるのであるから、云ばだゞッ兒のやうなものであるが、時としては面白い事である。

それから札の扱方を云へば、假りに三人一組として、まづ競技者の前、これを俗に場といふ、その場に六枚を開いておいて、他は殘らず伏せおき、かくて親番すなはち札を一番最初よりめくるものは自分の手にある札と合ひたるものを一枚打出し、更に伏せたる札一枚をまくり見て、その枚と場にある或札と合ひたる時は之を己が所得となし、然らざる時は其儘となしおき、そして次の者へ送るのである。

羽子一つなくして二つ見出しけり



正月の化粧

三越呉服店雑貨部　森　盛一郎

寒風木の葉を吹き、冬知り初めてよりは、厚化粧薄化粧、さては素顔の粗れは一しほで、炊する手のおのづから水に遠からんとするも人情である。金殿玉楼ならずとも、片田舎に客待の車小屋にも防寒の設備はあるが、まさかに顔に炬燵をつけても

歩かれず、足一たび戸外に出づれば、天然は平等であつて、深窓の佳人にも、屑拾ふ乞食にも、用捨なく寒き風、冷たき雪は彼等を見舞ふのである、さるが中に寒さに慣れたる人々は左程にも感ぜぬが、日頃外出少き婦人などは、寒さの身にこたへることと一方ならず、忽ち寒き外氣に觸れて、肌理を粗らし頬を紅に染めて、社交上美容を損すること甚だ尠からぬのである。

かく天然の寒氣の爲に、自然美を害ふを防ぐ方法は、化粧に若くものはない、さなきだに天のなせる美貌を彌が上にもかゞやかすべきを、ましてや寒氣の侵害を受ける塲合に於てをや。

さて化粧をするには、誰も知る如く、先づ第一に顔を洗ふのであるが、顔面には脂肪染潤し、塵埃附着して居るから、微温湯を以て清潔に洗ひ、その上にクリームを塗るのである。

クリームは純潔なる脂肪性のものであるから、能く顔面の皮膚に脂肪性の滋養分を吸入せしめて、皮

膚に彈力を發生せしめる効力があるから、顔の皺などなくなり、永久に美容を保存することが出來る、又クリームを付けた後に白粉をぬれば、最も落付いて永く持つ効がある。

クリームの種類は極めて多いが、實驗家の説によれば、巴里のシモンクリーム(Simon Creme)が一番よいと云ふことである、シモンクリームは肌理を細かにし、皮膚を滑らかにするのみならず、能く寒氣に抵へ粗を防ぐを以て、冬の化粧には缺くべからざるものである。

クリームを付けた後、白粉を塗る塲合に、その塗方は平面主義ではいけない、濃淡の差をつけなければ、顔面に活氣なく、趣味に乏しくなる、例へば鼻を起點として比較的濃く塗り、順次薄くする等の事は、婦人方の實驗上言ふ迄もないことである。

次に白粉の色にも、種々あるのであるが、白色の外に桃色、薄紅色などがある、近來皮膚の色に似寄つた黄色の白粉が、巴里シモン會社製(J. Simon)

のもので、佛蘭西にて最も流行し、最新を競ふ日本人間にも大好評を以て迎へられて居るので、三越の化粧品部に於てはシモンクリームと共に、黄色白粉を推擧し販賣して居るのは、頗要領を得た事と思ふ
日本婦人の交際期とも云ふべき正月の第一日から更に佛蘭西式の化粧法に留意せられて、天のなせる麗質を益々發揮し、錦上更に花を添へられて、文明的最新式化粧法の益々發達流行せんことを切に希望するのである。

晴衣のいろ〳〵

白木屋呉服店流行及裝飾係　大西武次郎

貴婦人方の春の御盛裝として、即ち紋服として御嗜好になる所の地質はお召の中でも橘お召、白金お召、金剛鶉お召等であるが、これらは何れも紋服の事であるから無地物で、色は極淡い鼠、或は紺桔梗などゝいふ所である、けれども派出な向になると藤紫および桔梗鼠等である、模樣は總別極淡い色な一種の色で彩られたものが好かれて、以前のやうに葉牡丹に水仙といふやうにゴタ〳〵したものは流行らない、すべて寫生と光琳式とを交ぜたもので無ければ不可ない、そして金枠に刺繡が主で、裾廻は表と同色の淡い色が歡迎せられて、何れも二枚重である。
夫から中流に屬するものはと云へば、元來流行といふものが主に貴婦人界に限らるゝやうなものであるから、云はゞ中流以下は取立てゝいふ事は無いやうなものであるが、掻摘んで云へば、矢張御盛裝の紋服としては、普通從來の縞お召を除くの外に、前と同じく橘お召、之に次ぐものは京華織、鶉お召などで、縞柄は極淡い霜降の羅紗柄で、地色は何れも鼠であるが、さうかと思ふと之と反對の竪縞に横絣といふ異なものを好かれ、色氣は紺地に茶或は赤といふやうな色で、極美はしく派手やかなる鼠で、ツマリ淡泊なものを愛するのである、そして裾廻しは何れも表と共色とは云ひながら、少し淡色にして共

下着附の二枚重の注文が多いのである。

帶の貴婦人向となると大内織、高浪織、おぼろ織または有明織などであつて、極澁いものには琉球錦或は紬緞子其他相變らず、繻珍、糸錦、つゞれ錦等の需用が多いのである、そして其模様は時代めいたもの、或はハイカラなるもの、例へば、ハイカラものなれば、孔雀の羽に薔薇、又は西洋の草花などを外國風に微かに出すと工合で、その高尚なるものになると、時代を勅題に因める老松を金箔の繍地やうに出すとか、或は古代の切盡しとか、又は天平式とか、即ち京都の正倉院の御物などを模した物とかいふ物が喜ばるゝ、之が上流に於ける趨勢で、中流一般には、博多から變化した千山萬水織、アラスカ織、さゝれ織其他繻珍、厚板、糸錦の類が勢力を有て居るのであるが、極生粋な物になると霞織、これは在來の金剛鹽瀬に、金沙金泥でスナゴのやうにした友禪の其上に刺繍を施したる物で、その模様は有職の鳥や蝶や、又は梅の老木を施したるが如きものである。

それから羽織の地質も是亦第一番は縮緬で、粋なものゝ色は黒であつて、紋は九分位の三ッ紋であるが、高尚な向になると淡色を好まるゝ、そして無地お召の珍柄に相良繍を施したるものであつて、裏地は羽二重の友禪か、或は絞りのものが好かるゝのである、茲に一つ面白い前兆は、紋附の中で何か黒の代用として黒ツぽい色を要求せらるゝ向と、またその反對に鼠等の淡い無地を好まるゝとの二つであるが、やがては流行の風潮を持つて居るのではあるまいか。

次にチョット下着の事を云へば、白の下着は淡鼠に、而かも模様を施したもの、ゝ御注文を受けるのであるが、色合も一般の流行の中心は納戸から變化したる鼠色、または鼠から變化した茶氣のものが流行するやうな傾が見える。

襦袢、これは盛裝の時は赤さか白とかに限られて居るが、之はツマリ古來の儀式に則つたものであらう、で變つたものと云へば千代田縮緬、紋縮緬など



ゝいふ所で、普通はお召である、尤も伊達着となると別染友禪として、之に勅題やえどに因める物等を顯はしたもので、地色は褪紅色またはオレンヂ若くば洗朱等に留めを刺すのである。

それから半衿は衣服に比べると、惣別に衣服よりは地色の濃いものを好かれて、これに勅題物等を繍つたものゝ御注文が續々ある所を見ると、まづ之が流行するものであると云つても差支なからうと思ふのである。

終りに一寸コートの事を摘んでお話して置きたいと思ふのは、大体から云へば鼠薄地のメルトンなどの大柄の格子物を歡ばれ、裏は質素な無地甲斐絹、羽二重、無地サーテー等を用ゐられ、派手となると縞甲斐絹、絞八ッ橋、羽二重友禪等であるが、極上物となると縞琥珀を使はるゝ向もある、併し何れも柄合は男子の洋服地に用うるものが歡迎せらるゝので、色は鼠の霜降が重なるものであつて、伊達着のコートとなると謂ゆる半コートと云つて、裾から二

三寸位上つた丈のものが流行で、この方の地質には其格子の御召無地、ブライト御召、或は鶉お召といふやうな絹地のコート用の羅紗柄がある、之は昨年當店に於ける新製品である、尚ほ伊達着の仕立方となると、紐なしの謂ゆるかくしぼたんでホック掛とするのであるから却々凝つたものである。

初春のはれぎ

大丸呉服店販賣係　村田正俊

舊冬から本年にかけて流行服の重なるものは如何かといふと、左まで例年とは變りは無い、矢張二枚重と三枚重とで、地質は是また縮緬であつて、この縮緬も普通の物が多く、その變つた種類といへば、先づ指を鶉縮緬や杉立縮緬等に屈するのである、茲に杉立縮緬のことを説明するのも素人臭く、或は諸姉を侮蔑したやうであるが、多くの讀者の中に或はお初の方が無いとも限らないから、一口これをお話

して置く必要があらうと思ふ、そこで此杉立縮緬といふ品は、昔流行つた發老縮緬といふものゝズット縮緬の粗いものを云ふものである。

　それから色氣は如何かといふに、一般に藍氣を中心とした淡い色の方に傾て來た、例へば、桔梗お納戸、或は錆お納戸等で、ツマリ藍氣を中心としたる鼠氣が氣受けが好いのである。

　上衣と下衣との色氣の關係は何んなものであるかといへば、概して云へば共色であるが、その中に伺ほ上衣と下衣との鹽梅で色に濃い淡いの分ちがあるけれども、小紋物となると殆んど上下同様の色氣を用ゐらるゝのである、併し別の好みは別として、まづ上層の流行の衣服は以上の如くで、それが中流になると、云はゞ單に品物に就て高下があるといふ位にしか過ぎないのである、所で中流向の三枚重は幾何ぐらゐかといへば、まづ百二十圓位であるが、上流向となると一重二百圓から三百圓ぐらゐ、その上は限りが無い、何故極上物となると直段に不同があり、且つ左様高價に騰るかと不思議に思召ませうがそれは染の直段に限りが無いからである。

　そして模様は矢張江戸褄が流行の大部を占めて居るのであるが、昨今は裾模様風のものが流行しかゝつて來た傾が見えるやうである、而して其模様の出し工合は、例へば、上下とも共色の中にポッチリ模様を出すと云つたやうな風なのである、伺ほ言を換へて云へば、キッパリとした模様が歡迎せらるゝのであるから、だん〳〵派手になつて來る傾向が見えて居るのである。

　昨年の新小説の十一月號に、本店と三越と白木との比較評が出て居つたが、あれも或一部の如きは三越が首位を占めて居るやうに考へますが、一體本店で昨年圖案を募集した裾模様は、敢て蘆手とか又は明治式光琳模様とかいふ風に範圍を限つたので無い謂ゆる廣い意味に於ける圖案を募集したものであつて、同情せる考案を寄せられたる者は、一道三府三十縣に渉つて、九百二十一人、圖案の數は實に三千

七百八十餘點の多きに達したが、その中に蘆手摸樣は皆無と云つても好い位、又光琳式のものは僅に數十點を認める位に過ぎなかつたので、是を以ても流行の大勢を卜することが出來やうかと思はれる、尤もその中には高山植物も少しく見えた、元來言ふまでも無く、衣服摸樣の材料は植物が最も多いので、動物の類は殆んど無いと云つても宜い位で、まづ動物として胡蝶ぐらゐのものである。

以上は衣服の事に屬する概畧で、次に羽織のことをお話すれば、まづその地質は大抵衣服と同質で、色氣も大して異りは無いが、やゝ淡い色を好まるゝ點が違うのであらう、例へば、若い御婦人なればお納戸、少し年の行かれた方は其より少し濃い色、すなはち藍に鼠がゝつた色が歡迎され、裏地は極上物は矢張繻珍または緞子で、普通多くお徳用向を兼ねられたる物としては、多くは友仙羽二重である。

帶の類も極上物としては相變らず繻珍が多く、之に次ぐものは厚板若くは緞子、その他つゞれの錦等であつて、その摸樣はといふと、豫て裾摸樣として募つた若竹とか、又は龍田風等を應用したものは優美で高尚に見えるのである。

それから繻袢はといへば、これまた友仙縮緬が主で、變り物としては鶉縮緬、鎧縮緬等で、色合は派手な納戸であるが、少し變つた向になると洗朱と云つたやうな異な色氣をお好みになるが、如何も變りの無いのは紅色である。

コート　これの地質としては頗る羅紗地は勢力が無くなつて、昨今の流行はお召縮緬、ブラート織、光華織等であつて、之に刺繍を施したものがあるが隨分面白いものである、もとより此コートといふものは防寒用と裝飾用とを兼ねたものであるが、當今は少し衣服よりは丈の縮つたものが流行るのである前に云つた刺繍を施したものといへば、例へば、成るべく目立たぬやうに、まづ上前に鶯、下前に梅といふ工合に粋に行くので、すべて草花の類が多いので、時としては其染拔にした粋な向もある。



いつも教鞭を採つて、鹿爪らしく口髭を拈る講師も、今日の女子部新年校友會大會には、餘興席として雨中運動場にしつらへた舞臺の、装飾方、道具方、幕引を兼ねた上、少しく羊羹色に變じたフロツクコートの釦を堅く締めて、黑白の緞幕の前に立つて、觀客へ一寸會釋。

『えゝ印刷いたしました番組でございますと、第一活人畫である筈でございますが、いろ〱準備やら支度がございますので、不本意ながら順序を變更いたしまして、先へ薩摩琵琶を出す事にいたしました、左樣御承知を願ひたいのでございます』。

ある小數は拍手もしたが。

『オヤ〱』。

『つまらないわねえ………』。

『どうしたんでせう？』。

不滿の聲を漏らすのが大方で、やがて緞幕がぎごちなく、ぎゝゝと音がして揭れば、那須某といふ人が琵琶を抱へて、某大佐が日露の役に戰死した事蹟を語る。

單調なもの、詰らないもの、可笑しくも何ともないもの、寧ろ睡くなるものとして、薩摩琵琶に趣味なき者は、中古之を聽いて泣いた人があるものが却つて異樣に思ふ位の、それでも校友の內には然るべき所の夫人ともなつて、賤しからぬ風俗をして居る衆は感に堪へたかのやうに、伏目になつて、お行儀もよい有樣なのに、まだ肩揚の取れやらぬS卷や、マガレットや、お下げや、さては桃割などの寄る所は、不意と出かゝる欠伸を飮込んだのを、隣席に友に見られると、兩方でふつと吹出す、聽き得たその次の席の友は、

『何が可笑しいの？　一寸』。

『好い事があつて、可笑しかつたの？　ねえ、さうだわね。

例の欠伸を飮込女史は頷いて、

『さうよ』。

『何が可笑しかつたの？　言つたつて可ぢやありませんか』。

『だつて、言ふ必要なんかありやしないわ』。

『此方二人しか、知らない事なんだから……ね、さうだわね』。

後をまた思ひ出して笑ふのに、何と感違へてか、彼方は勃然とした顏で外向いて默り。

『あゝ、面白くない、面白くない』。

飮込女史の顏は少し高かつたので、大分耳に入つた人もあつて、此方を見て笑ふのは、我と同意者、窘め

顔なのは、琵琶のやうな――大層お品の好いものを、お好な方。
「私達は、下品な女だから、こんなものを聽いたつて趣味を解さないわねえ』。
「それより早く、私は花岡先生の獨唱が聽きたいんだわ！』。
「あら！」と此方は吃驚して。
「手放しだわねえ……』。
「ごつご　びい　うゐす　ゆう！』。
「有難う』。
「まア、驚いたわねえ……、ちや花岡先生の獨唱を、私おとなしく聽くから、何か驕つて頂戴』。
「驕つて上げてよ、何でも』。
「屹度よ……』。と確めた後。
「私はまた、咲澤樣の活人畫が見たいのよう』。
「さう、あれも見たいわねえ！』。
「濱田樣は氣が多いのね……。だけどもまア可いわ、咲澤樣の活人畫を見たいと云ふのは、奇持だわ――私嬉しいのよ』。
「ごつど　びい　うゐす　ゆう！』。
「有難う！　これでお互ひの事よ……』。
「だけども私――濱田樣の姉君だから、讃めるんぢやないけども、咲澤樣は全く美人だと思ふわ、今女子大學の文科に行つて入らつしやるんでせう、……目白で評判の美人だつてねえ。羨ましいわ私、濱田樣

があんな美い姉上を持つて仕舞ふんだもの…………』。

『嫉妬を起すだけは、止して頂戴よ』。

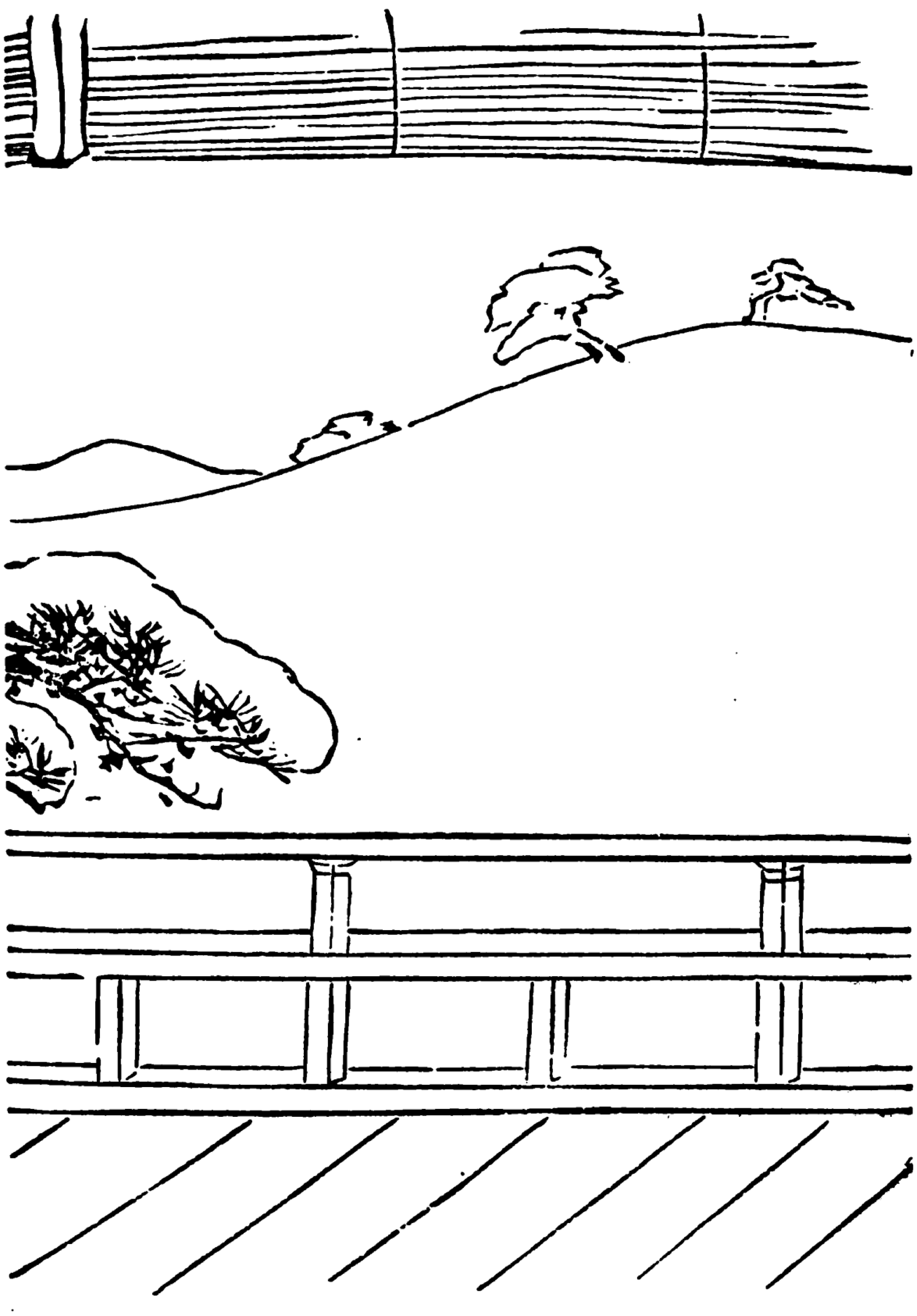
『貴女と私の中ですもの、嫉妬なんぞ起しやしなくつてよ。私は咲澤様を貴女の姉上として敬愛して居るばかり…………、どうせ、片思ひだからさつぱり斷念して居る事よ』。

『片思ひなんて、そんな事はありやしなくつてよ、咲澤様は御自分を愛してくれる人ならば、誰でも歡迎する事よ、そりや、そりやもう善い方なの…………』。

『ごつと　びい　ういす　ゆう……………まあ、そりや常談だけども、ねえ濱田様、折があつたら私が、あの方に戀して居る事、話して置て頂戴ね、可くつて……？』。

『向ふで、却つて貴女に戀して居るかも知れなくつてよ』。

『あら！あんなお世辭の好い事ばつかり』。



とは言へ、内心嬉しくて堪へられない樣も、

『さう言ば、咲澤樣の活人畫——何ていふ題でしたつけねえ』。

彼方は袴の前挾から番組を出さうとして、

『香爐峰よ、御題の『雪中松』に粧へてなのですッて?』。

『香爐峰つて、淸少納言でせう? あら、それぢや咲澤樣は十二一重を着て、丸眉で下げ髮………まアどんなに奇麗でせうねえ』。

と話だけでも醉へるが如く、

『けれども何ね、ある一部ではこんな、活人畫なんぞやつたり何かするのを、常識を沒して居るものとして非難する方もあるけれども、かういふ校友會や何ぞの、同じ母校を出た人達が、一所に集つて樂しく遊ばうと云ふのには、よしんば少し仕常識を沒したからつて、惡い事はなからうと思ふのよ』。



『それには、あれほどの御器量を持つて入らッしやる咲澤さんなんですもの、あの白薔薇のやうな美しい顏

を大勢に見せて上げるのは、どんな功德になるか知れやしないわ』。

「私も、さう信じて居るの』。

此方は舞臺の方を見て眉打顰め、

「あら、まだ琵琶を遣つてるのよ。ぴてぃい　てぃす！　長いんだねえ………まあ！』。

ともう一つ欠伸もしたくて、

「一寸、一寸津越さん』。

「何よ』。

「花岡先生の獨唱が濟んでから、樂屋になつて居る整裝室へ行つて、咲澤さんの衣裳を付けて入らつしやるのを見ませうぢやないか』。

「さうしませう、さうしませう、而して私は咲澤樣に、貴女が死ぬほど戀して居ますつて、さう言つて上げるわ』。

「あゝ！是非、さう言つて私の切ない心を傳へて頂戴』

「ごつど　びい　らいす　ゆう！』。

「あら！そりや、此方でいふ言葉よ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

やがて花岡先生の獨唱になると、數多の崇拜者また鳴を鎭めて靜聴し、次いでは今日の呼び物「香爐峰」は畫面の如く、實に女子大學の閨秀が、己の理想も明らかにこゝに在るほど、美しき高眉の匂、尊き下髪姿の僅か數分時ながら全く見る人は醉へる如く打眺むるに飽かず…………。



東京帝國大學講師 佐々木信綱先生選

茅屋の梅

天

岩代國信夫郡鎌田村　木内よし子

紫に山はかすみて湯の山の茅屋にさむく白梅の花

（評）おだやかなる趣を以てまされる歌、以て新春歌壇白眉の作と謂ひつべし

地

越後國西蒲原郡巻校　松永繁子

小さなる藁屋へまがる猿曳の子猿のせなに梅ちりかゝる

（評）一首情景ともに活躍せり

人

須磨　有村保子

梅さける茅の軒端の日あたりにおきなあみすくのどかなるあさ

（評）漁村の初春の景寫し得てよし

秀逸

東京　水田ふみ子

◎茅のやは梅のはやしにかこまれてのどけき風に香やみちぬらん

相州　高橋つれ子

◎鶯もまだたつね来ぬ草の戸に香りゆかしき梅の下風

品川　繁子

◎軒あれし野守のいほも春のきて人待ちがほに梅のにほへる

岩代　岸野菊子

◎村はづれ翁媼の酒うれるわらやのさ庭梅のはなさく

讀者文藝

◎ 咲きそめて梅が香かをろ我が宿は
藁屋ながらも心嬉しき
横須賀　小野ゆき子

◎ 梅香る軒の日向の花蔭に
翁藁打つ媼衣縫ふ
横須賀　渡邊比佐子

◎ 網ほせる磯の小家の藁廂
靄暖く梅に鳥啼く
横須賀　柏原美奈子

◎ やぶれ風かゝれるまゝに日あたりの
わら屋の軒の梅の花さく
名古屋　山根しげ子

◎ さなりさち牛なきあひて茅が屋に
梅の花ちる春風の村
美濃　目島まさ子

◎ かやぶきの日なたに臼の目をきざむ
翁がやどの白梅の花
美濃　傍島曉子

◎ 山陰の草の庵を中にして
梅ざきつゞく谷の崖まで
臺灣　浮洲德子

◎ はらからのまゝごとすなる賤がやの
岐阜　中西よし子

垣根に匂ふ白梅の花
岐阜　中村はな子

◎ 襁褓ほす庭あたゝかく賤かやの
やれしまがきに梅の花咲く
美濃　傍島小枝子

◎ むもむろに首さし出す牛のかほに
梅の花ちる茅ぶきの家
東京　平塚いさ子

◎ 片びさし野火にこげたるみやしろの
杉の大木に夕日かたむく
伯耆　錦織よし子

◎ 春の日の光をひさり身にしめて
ふせ屋の軒にゝほふ梅が枝
東京　中村千代子

◎ 茅ぶきの門にあそべる幼子の
むしろに散り來白梅の花
岐阜　傍島敏子

◎ むしろしきて地機へるなる茅が家の
軒端の梅のかをりよろしも
名古屋　星野ふさ子

◎ 水くろまゆろうめぐれる川添の
しづが草家の紅梅かをる
新潟　岩本芳子

◎ 山里のふせやの軒もかをるなり　老木の梅の花さきしより　東京　牧　千春

◎ 風折々梅がゝ送るかた見れば　やれし障子に日影のどけき　岐阜　傍島まさ子

◎ かやぶきの家の遠近鶏なきて　梅の花ちる午さがりかな　岩代　岸野せい子

◎ 人すまであれたる野路の一つ家に　老木の梅のはな一つさく　對馬　古川辰子

◎ 紅梅の匂ふ伏屋のその背戸に　菜洗ふ少女眉美しき　埼玉　横田秋子

◎ 大伮はすがやが軒ばの日あたりに　にほひ出たる梅のはつ花　上野　小野里鶴子

◎ あたらしき年の始に咲きそめぬ　茅屋の軒の梅の初花

甲

○ 尼寺のかやが屋ひくし鳩あそぶ庫裏の日なたに梅の花ちる　美濃　芳翠敏子

○ のどかなる春たらそめて茅屋にも匂ひゆかしき梅の花さく　秋田　三浦しや子

○ 夜は月ももりしやぬるらんしづが家ののきにゆかしき白梅の花　旭川　佐藤央子

○ その昔うた人住みしわがいほのやれまどゆかし白梅の花　名古屋　高橋かき子

○ 一本の紅梅さきぬ翁嫗すめる伏屋ののきばちかくに　茨城　金澤すゑ子

○ 軒ひくゝ窓かたむきし賤が家のかきねの梅はほゝゑみそめぬ　神戸　古在敏子

○ 霜解やせどの干菜に日は高きわらやの門に梅は匂へり　對馬　古川辰子

○ まれにさふ人もなぎさの草のいほのさもさ見るべき梅のひさもさ　陸前　菊地みさを子

○ 香なさめてうらわかき尼の物語りきくもゆかしき白梅の宿　大阪　木村春江

○ 賤が家の垣根にさける白梅はこゝにゆかしく香に匂ひけり　東京　青木たま子

○ 茶花して榾たきて待つ草の屋の梅のまがりを訪ひ來ませ君　伯耆　錦織さち子

○ かたぶきし軒端ながらも春のみは花あり梅の香はたかくして　伯耆　錦織千代子

○ 湯の守が客人たちをいざなひて梅見すさいふ柴垣の宿　岩代　樹口雲子

○ 世の春におくれしやどのにはながらまだきににほふ梅はありけり　東京　芦原浦子

讀者文壇

○　清國　福田つる子
かやぶきの小家ぞここに興ふかき梅の梢に月さゆる夜は

○　兵庫　石子
春風の吹くをもまたで咲きにけり茅屋の庭の梅の初花

○　東京　平塚つゆ子
春風や茶うる茅屋の椽先に梅めでゝゐる白ひげの人

○　神戸　足立あさ子
あれはてし茅の軒端の梅の花月のみ友さ住める佗人

○　美濃　牧かれ子
早梅の花咲きそめし茅が屋の軒より春はもえいづるかな

○　美濃　岩崎牧子
茅が屋の軒端にもゆる紅梅の花よりかすむ遠の山里

○　須磨　有村丈子
うぐひすのはつれもりきて山かげのわらやののきに梅ぞかをれる

○　須磨　有村紫子
小鼓のうつてをやめば梅さけるわらやののきにうぐひすのなく

○　飛驒　南みれ子
培ひし梅の初花さきにけりかをりも高く賤の籬に

○　相州　中島ひさ子
我やどの梅咲きそめぬ霜おきし茅の軒ばの薫りゆたかに

○　美濃　遠山よしの子
茅が屋の南ひなたの牛小屋の牛の背にちる白梅の花

○　美濃　渡邊ひろし子
湖の遠の並山ほのに明けにけり梅が香にほふ茅ぶきの家

○　美濃　平岡かん子
牧場守る少女たゝずむ茅小屋の軒端にゆかしも白梅の花

○　美濃　原もと子
日の丸のみはたなびける茅が家の軒端ゆかしも早さきの梅

○　東京　平塚白百合子
なさの音や鶏うたふ茅が家の梅の梢にひろの月見ゆ

○　愛媛　攝津玉枝子
おもひやれさふ人もなき山里の茅屋の梅やうつろひぬらん

○　岩代　岸野常子
福祿ほす賤が垣根に稚兒の齒のならぶがごごも笑める梅かな

○　相摸　服部八重子
梅咲きぬ小川を縫ふ行く風の薫やに匂ふ朝月夜かな

乙

○　大阪　木村ゑい子
住みわびし草の庵も春來れば梅が香高み人ぞ問ひ來る

○　神奈川　飯田白露子
朝まだき糸くる音の靜かにてちる十さひらの梅かをるなり

○　神奈川　飯田榮子
みかへれば草屋根ひくき家にして人まちかほに匂ふ白梅

○　美濃　鈴木鏡子
春來ぬさやがてつげこむ鶯を待つ人もなしあばらやの梅

○　伯耆　錦織たま子
高き香の梅の大木のかげにして姥いさひくわらぶきの家

○　群馬　小野里佐久良子
奧山の紅梅香る茅屋にもあさひにほひて鶯のなく

○　和歌山　喜代子
尋れ來ん人もたへたる茅屋を一人守るか白梅の花

○　遠江　疋田伸子
のどかなる初春風に茅屋の梅もゆたかにえみそめにけり

梅ばやしさきつゞきたる茅のやにもれてきこゆる小つゝみの音 ○ 須磨 有村紫芳子

幸女ぞさほまれもたかきかれが身はやれし垣根の梅が香よりも ○ 東京 倉重利子

かたぶきし軒の南の梅の花しつ心なく咲きみだれけり ○ 伯耆 錦織さみ子

里日和長閑に聞ゆおさの音籔の前なる梅の宿哉 ○ 神戸 前田せつ子

見はやさん人も稀なる山里の茅屋の軒に匂ふ白梅 ○ 近江 柚木音羽子

谷の月をいづる初音にゆめさめて今日ほころびぬ茅屋の梅 ○ 近江 細野靜子

霞野に駒をさゝめて大丈夫の茅屋をあふぐ軒の白梅 ○ 近江 柚木濱子

荒れはてしわらやの風は寒けれど今年も咲きぬむろの白梅 ○ 新潟 大里むつ子

主なきわらやの梅ぞあはれなる今年も子等の手折るまにまに ○ 新潟 大里のわ子

世をいさふみやまがくれの草のいほにわがふでむかふ梅もありけり ○ 陸前 菊地さみゑ子

暖道荷馬やすらふわらやれのまへの垣れに梅が香かをる ○ 名古屋 星野ふさ子

あれはてし宿とは見てか鶯の間ぬぞつらきうめのさかりを ○ 大阪 大莊くに子

梅ばやしさきてかをれる木がくれにもれてみえける茅ふきの家 ○ 須磨 有村よし子

朝あけやわらぶき屋根に霜見えて軒の紅梅いろうつくしき ○ 東京 神田けい子

けふ降りし雪に匂ひの冬ごもり軒ばの梅の咲きそめにけり ○ 兵庫 島久美子

ふくかやもやつれし軒に吹出てゆかしく匂ふ梅の初花 ○ 佐賀 藤松りか子

深山邊に茅ふく軒の梅の花うぐひすならで訪ふものはなし ○ 神戸 足立ゑい子

ちりふかき都のがれてしづがやの幸女と共に梅の花見る ○ 東京 倉重靜子

春されば人の世遠き茅が家も春を傚りの白梅の咲く ○ 美濃 牧 瀧美惠子

城のあと茅屋の茶みせ並立ちぬ梅の老木は昔乍らに ○ 美濃 傍島みゆき子

こゝのれもれてながるゝくさぶきののきばゆかしく梅ぞかをれる ○ 須磨 有村さみ子

茅屋の窓に影さす梅の木の花により來て鶯のなく ○ 東京 佐々木壽子

睦しく住む茅屋に二本の梅もしつ枝を交へてや咲く ○ 秋田 小田敏子

行人の袂にさゝむうつり香はしづが軒ばににほふ白梅 ○ 兵庫 湖東靜子

梅が香に恥づべきまでの住居よとあるじかたれる茅屋の庭 ○ 兵庫 湖東澄子

ほうくうつ音もきこえて茅ぶきのみ寺ゆかしも白梅の花 ○ 美濃 長濱鋼子

繪に歌に書きつくされぬ賎が家の茅屋の梅の花盛りなり ○ 東京 紀藤榮子

鶏の聲も聞えて長閑なり賎が茅屋の梅咲きこぼる ○ 東京 萬屋雪子



貴族院議員
御歌所參候 子爵入江爲守先生選

天

岩代國伊達郡
小手川村　岸野菊子

浪のねも神代ながらのこゝちして
はつ日のどけき伊勢の海はら

地

長野縣北安曇
郡常磐村　清水あや子

榮えゆく千代田の宮の朝日かげ
先づこそあふげ年のはじめに

人

東京府澁谷村
赤十字病院內　中村千代子

のどかなる年の初日をひな都
同じ心に祝ふ今朝かな

秀逸

◎

物みなのあらたまりつる今朝のみは
心にちりもかゝらざりけり
東京　繁子

◎

何さなく嬉しきものは初春の
初日おろかむ朝にぞありける
越後　松永繁子

◎

波間よりうらうら昇る初日影
我大御代の姿なるらん
臺灣　浮洲德子

◎

君が代さうたふ童のこゑすなり
さしのはごさを今さゝぐらん
陸前　菊地さみゑ子

◎

あきらけく治まる御代の初日かげ
さつくにまでもかゞやきにけり
岩代　岸野常子

◎

かはりなき大みよながら人ごゝろ
さしたつけさはあらたまりぬる
名古屋　星野ふさ子

甲

○いなのめのゆふつけ鳥の八千聲に神代ながらの年は立ちけり　岩代 木内よし子

○思ひきや國をはなれて唐土の空におろがむ初日の出かな　清國 福田つる子

○一い二う三いよはとしたちて追羽根のおとものどかに門にきこゆる　岩代 岸野せい子

○注連はへて清めし庭の苔井筒汲つゝ仰ぐ初日影かな　神戸 足立あさ子

○あたらしき衣もたね子も新らしき羽根うちかはし遊ぶ朝かな　神奈川 飯田榮子

○ものみなはこゝろにかなふばかりにてさしたつけふのゆたかなる哉　横濱 鈴木まつ子

○まなびやのかどうちそろひのぼる子の姿うらゝにてる初日かげ　東京 芦原浦子

○いつまでもかゝれとぞ思ふ新玉の明け行く空の清き心は　東京 倉重靜子

○とりの音も神代にかへる心地して初日おろかむ新玉のそら　東京 平塚いさ子

○あたらしき望抱きて若水を硯にうけて歌よまむ哉　岐阜 中村はな子

○村はづれ紫雲たなびく學びやにほぎ歌清し年かへる朝　對馬 古川辰子

○ゑはがきの文字も匂ひて妹の友の多きをほこる今日哉　大阪 木村春江子

○ひとゝせはまたひとゝせと老ゆるみもわすれてうれし新玉のはる　名古屋 高橋かき子

乙

○永久にかはらぬ御代に年つみてのどけき春をうたはぬはなし　秋田 三浦しや子

○また更に今年の人となる我は昨日にかはる心なりけり　芝區 佐々木壽子

○高砂の松の綠もけさはみなかすみとともに立かへりけり　相州 中島ひさ子

○む月たつ初日のどかに少女等が羽子つく袖に春ぞ見えける　秋田 小田敏子

○春きぬとならす鼓に舞出て君が代うたふ高砂の松　埼玉 横田やな子

○外國の兄もかへりて笑みませる母のみひざに迎ふ初春　東京 水田ふじ子

○なへて世の人の心にかゝりけり大内やまのはるの初風　東京 岩谷淺子

○あらたまの年たつ朝ののどけさに神代おぼゆる朝詣でかな　下總 月沖さゆり子

○注連繩をわたる初風のどかにてさしたつ光みゆる門かな　東京 平塚白百合子

○門ごとにみはたかゝげて祝ふかなみやこもひなも一つごゝろに　岩代 岸野登代子

○若水にあしきあらひて世の耳によきこときかん春は來にけり　埼玉 横田秋子

○何となく心ゆたかになりにけり年の始めの今日のあけぼの　横須賀 高橋つれ子

○　東京　神田けい子
初日かげにほへる窓にかきそめの歌かきて見ぬ日記さぢて見ぬ

○　茨城　金澤すゑ子
うらゝけく初日はいでぬ門毎の松の緑にみ光なげて

○　神戸　前田せつ子
あら玉の年の始めのしるしさて老も若きも神詣でする

○　神戸　古在敏子
立ちかへる年のはじめのたのしさは老もわかきにかはらざりけり

○　近江　柚木濱子
初朝日のどかに照す梅が枝に千代をことほぐ鶯の聲

○　新潟　大里のわ子
あれ果し我家も今朝は初春をむかへて祝ふ君が大御代

○　新潟　大里むつ子
新玉の年立つ今朝は家毎によろこびめぐる屠蘇のさかづき

○　新潟　岩本芳子
あしたつの聲うら〳〵ときこゆなり今日あらたまのとしのはじめに

○　陸前　菊地みさを子
だれよりもはやをきいでゝ若水をくみてぞ祝ふけふのたのしさ

○　上野　小野里鶴子
深みどり色あたらしき松竹を立てゝぞ祝ふ今日の元旦

○　北海道　佐藤央子
かぞふれば一よをこそのへだてにてことしのけふになりにけるかな

○　千葉　土川千夏子
惠みいづる初日のかげをはじめにてものみな淸き今日にもあるかな

○　東京　青木ため子
あたらしき年を壽ぼくけふの日はのどけき袖に春風ぞふく

○　伯耆　錦織よし子
はたとせのあさふりかへりほゝゑみて迎ふ初日のかげのゝどけさ

○　岩代　樹口壽子
あら玉の年立つ今朝は一とせの月日のくるゝ始めにこそあれ

○　和歌山　喜代子
年の關越にし時の思出も今忘れけり初日むかへて

○　兵庫　三宅久美子
あら玉の年の始めのよもの空けさ鶯も祝ふあけぼの

○　兵庫・石　子
立かへる年の初をことほぎて聲もゆたかにたつなき渡る

○　神戸　足立ゑい子
あづさ弓はる立つけふの朝日影高まさ山に霞たなびく

○　遠江　疋田伸子
初日かげのどかに照らす大御世をことほぎまつる年たちにけり

○　佐賀　藤松りか子
のどかなる年のあしたの心にて千代萬代をもすごしてしかな

○　東京　倉重千惠子
長閑にも年は立ちけり大路小路たてし御旗に初日にほひて

○　美濃　武田友子
をさな子もひさごさまれて平和の年の初日を祝ひけるかな

○　美濃　牧　幾美惠子
平和の初日の光りうららかに君の稜威さ仰ぐけふかな

○　須磨　有村よし子
わがせこささもにはつひを仰ぐかなあらたまりたるさしをほぎつゝ

○　飛驒　中西よし子
軒はみな注連飾りして門松に年たつ光りみゆる嬉しさ

○　須磨　有村さみ子
から衣ゆたかにきなしあらたまることほぎ申す元日のあさ

○　近江　柚木音羽子
年立ちて鬼の心もあらたまる豐けき御代の初春の朝

○
鳴く鳥の曉つぐる絶えまよりほがらくさ初日のぼりぬ　飛驒　南　みれ子

○
人ごとに行き交ふ袖も匂ふなり初日ゆたけき元日の朝　東京　牧　千春子

○
海に陸に君が代歌ふ聲のして都大路に年立ちにけり　東京　紀藤榮子

○
大君の春の深山に初日出てさつくにまでも照りわたるらん　山梨　小澤蝶子

○
つはものに召し出されし我子等の姿なゝしき年のはじめや　名古屋　山根しげ子

○
明け初めてかしこ顔せる弟の七つなくりつゝ笑まふかわゆさ　兵庫　湖東澄子

○
業ならぬ恨みかこちも櫟音もふきはひけり年の初風　兵庫　湖東靜子

○
ひさよれてはるに明行くさしゆたか菅の葉までも改まりける　神戸　塚本靜子

○
あら玉の千代の初春立ちそめて烟ぞかすむ民のかまどに　愛媛　攝津玉枝子

○
野も山も魚の棲むてふ海にまで年の始めの光りたちけり　横須賀　小野ゆき子

○
晴れ渡るみ空に高く元日の朝餉の烟立ちのぼるかな　横須賀　柏原美奈子

○
にぎはしきしめかざりして河の瀬のかみしもさなく祝ふけさかな　岩代　岸野つれ子

○
米俵つみたる上にはさりの八こゑめでたく初日仰ぎぬ　須磨　有村紫芳子

○
神前の松に初日の影さして風に遊べる鳩の影見ゆ　横須賀　渡邊比佐子



日本女子大學教授　文學士鹽井雨江先生選

天

冬の夜

東京牛込區左内坂町三七　平塚白百合子

ピユーと吹きいでくる木枯に、森の樹はうそぶくやうなこゑをたてゝ次へ〳〵と傳はつては、廣い田の中に消えてしまふ。冬の風は、すさまじい勢で、くるひまはつてゐるのである。

昨日まで秋草にかこまれてゐた庚申塚の地藏尊も、かれ〴〵の尾花の袖をかついで、寒さうにたつてゐる。

木がらしにふるひ落された雜木林の木といふ木は、その裸体になつたやうみすぼらしくそゝり立つて、

間から、凍つた月が晃々とてりわたつてゐる。一目十里の冬田は、見渡すかぎり刈り入られて、死したやう。わづかに束ねられた稲がらが、あぜに散つてゐるばかり。月にてらされてかわき切つた田は裂目が出來て人の胸に冬であるといふ思ひをゑりつくるやう。さつと吹きくる風に、ふたゝび梢がなると、間もなく。田をめぐつて流れてゆく小川の傍に絶え間もなくきしつてゐる水車小屋の戸が、一枚開いた。サツと小川の水面に燈火の影が砕けて、頬かむりの男の姿が月にてらし出された。吐く息が眞白く見えて、すがれた葦の穂がザブ〳〵と風にゆれてゐる。冷たい風が吹くならふきやれと、太いこゑで唄つたが、語尾が寒さにふるへて、あとがつゞかない。米俵を二ツ三ツかつぎ込んだが、戸はとざれて霜夜をつぐる鐘の音が、耳元近くひゞくばかり。風もたえた木がらしの跡は、ヒツソリとなつて、水車の音が靜寂をやぶつて、コトンコトンと傳るのである。

(附評)寒い情は動いて居る。

地

妹

下總佐原　小澤まゆみ子

秋雨の家は、孤獨のものやみに、ひとやとこそは眼にうつりしか。姿は、病床に横はつてゐる妹を、熟と見つめた。純白い床が、うす暗い灯影に照らされて、ぼつと淡く見える。妹は、鶴のやうに痩せた身を横へたまゝ、靜かに眠つてゐる。限りない不安の念が犇々と胸に迫つてくる。いつか瞑想の人となつた。……なき母を思ふ、やめる妹を思ひ、遂には、我身の前途を思ふと、堪らぬ程哀しくなつてきて、思はずかう叫んだ『あゝ人は悲哀です』熱い涙がとめ度なく流れる。陰濕な秋雨の家は、恐ろしい程、靜かです。戸の外は眞闇の暗黑です。朝からの雨は、庭のわくら葉に、しと〳〵と淋しい香をかすかに立てゝゐます。

醫師は言はれた『此病人は秋迄は保たうが、それから後はどうもあぶないものです』と。あゝ、妹は逝くんでせうか？今は秋も末近い、と思ふと、妹の末期が刻一刻と近い様な氣がして……胸は亂れる。
あはれ、背ては母をうばひし魔の手は、またしてもこの可愛い妹をもうばふのだらうか？……、
もしや〳〵此病が不治としきいたなら、妹はどんなにか泣くんでせう。
あゝ、妹に別れたら、後にのこつた妾は、どんなにか寂しいでせう。母います國へ行く妹は、むしろ妾より幸だかも知れない。さうすると、妾は全く孤獨の人となるのです。……ふと妹の方を覩ると、絶え入るやうな眠息が、いとかすかに〳〵……。
此背妹が此まゝ逝いてしまつたら……と思ふ瞬間身體は急に、何か強いものに脈迫せらるゝかの如く此のまゝ化石にでもなるではあるまいかと、思はずぞつとしました。
死の國からでも來た樣な冷たい夜風が、戸の隙からかすかにすつと吹くと、藥の香が鼻をうつ。

（雨評）さびしい情は多少動いて居る。

人

日記の一節

越後國中頸城郡高城村字尾張　水野やすゑ子

晴れるとなく、降るとなく、定めない天氣である。
山の方の空は碧くて、海の方は鬼も出さうな景色。
虹が立つたと、子供がさわぐ。
久し振にあつた友と、卓をかこんで、陽氣に話し合つた午後三時、
話の中にも、氣にかゝるは、殘した一人の子。
もう四時、もう四時半と、遂こらへきれないで、敎室へと行く。
さしもに廣い雨中体操場、人かげ一人も見えぬ靜けさを、たつた一つ殘つてゐる帽子さへ、物あはれに思はれて、淋しさ添ふる種である。
行つて見れば、ちつとして手を揃へてまつてゐる、目には涙を湛へながら。洵々と說き出せば、さては顏もあげ得ずに、遂にはほろり〳〵と、白き玉を机の上にこぼす。悔悟の色もあらはれて、いたづらな

りし前とは、別の人のやう、「もうけつしていたづらは……………」ときつばりいひかけたものゝ、さすがに終はいひもきらで、ぐつとしやくり上げた一刹那、自分もたへえず、はんけちをぬらしてしまつた、「もうよいからおかへり」。見送る彼の後姿、雲間もる夕日のかげうすく、校園のコスモス、色もあせた、嗚呼、すごすごと家へかへるかと思ふと、道の別れ塲はつらかつた。見えなくなつたら、雨が一度にどつと降てきた。午後五時である。

（雨評）涙が少しく足りないが、描かんさした情は面白い。

秀逸

〇◎胡蝶　越後　松永繁子

いとゝしく窓打つは、雨か霰かはた落葉か。梢を吹きあるゝ風伯勢すさまし。あはれ、花に舞ひたる胡蝶は今いづら。採取せし胡蝶の二つ三つ、手にとりて、思ひをかきつく。

キテフ

潮の香よせくると山丘の松林、潮やくいぶせき小屋のめぐりに、二つ三つとありきたる景、見ゆる心地して。

オツチンテフ

何となくやさしの蝶赤きたすきに鍬持ちて二寸のびたる麥の畑に耕す乙女のすげ笠に。すみれ花咲く野邊に絹まりつく幼な子の袖の風に舞ひさわぐは、この蝶ならん。

クロアゲハ

山の古沼の落葉して水も古めきひるも物すごき木蔭をとびまはるは、この蝶。あはれ、甘き戀を奪はれし怨みをもてる魂の生れ出でたるにはあらざるが。

コミスヂテフ

山の出湯に病になやめるせの君をいたはり、あしたとく起き出でゝ、藥を煮、夕べおそくまでいねずしてみとりするやさしの妻、早く平癒すべく神に佛に祈る人は………。

ヒメウラナミジヤノメ

ジヤノメ打ち開きたるは、實に恐ろし、されど、傘

さして、なよ〳〵しく石山寺へ詣でゆく人の右に左につき添ひたらば、如何に、

ベニシヽミ

田舍の人にいはしむれば、すゝと發音すべき所、シヾミチヽシ、音調同一、小さな心地せられて、春の日のどかにうちかすむ東山の麓、茶畑に歌おもしろく茶摘みする乙女の花笠に…………。

シモフリシヾミ

霞ヶ浦のあしのまろやに生活を苦闘せしお光子の父思はれて、お光子思はれて。

お光子は獵師の娘、…………蘆の枯れ葉に霜が置いて寒い朝、拾ひあげられたる拾ひ子、…………柳眉蜂腰かゝやかの眼、…………この湖水の岸で生ひ立つたとは思はれない程秀麗、殊に歌はかくれない。

涼しい聲で、夕べあした、花の頃霞たつ夕べ、螢まふさつきやみに、紅葉ちる秋の黄昏、上手に歌つていふにいはれぬ趣がある、…………姉さまかぶりして父と共に船をこぐ後かげ、群れる家鴨に餌をやるおもは、鍋洗ふとき、父を迎へて柳の木蔭に立つ眉の美くしさ、實にたとへむ方ない。

花が咲いて花が散り、…………雪が降つて雪が消え、今年お光は十五…………。其の春、都の紳士を見てから心動き水鏡に亂れ髪をはしるやう、且つ拾ひ子といふ淋しき思ひが、胸にわく。

隣村の農家へお光子を貰らうとしたけれ共、さすがに人心ある父、遂に止めた、…………我が身をけがすまいと天を仰いで泣いたといふ。人知らぬ胸の内いかに。

父はやみつかれ、家の煙もほそ〳〵立てゝはゐたが益々立てかねた、その年の夏洪水、父が好きな酒をねだるにつけ、お光子は怒濤をかけて舟を出し、買ひに出た、德利をものせて、

櫓の音次第に小いさく…………遂には絶えた、後はすさまじい水のほゆる音許り。

…………水をさまつたけれ共、お光子はかへらない。但し、德利だけは流れついたといふ。

あしのまろやをめぐる蝶、この霜ふりしゝみにはあらざるか。

（雨評）意匠は一寸面白いが、想と筆との練りが足らぬ。

○◎雛鷄にそへて　下總　大崎ひさめ子

今朝しも讀書の窓に近う、黄と白に斑をそめし雙羽やさしき雛の、おぼつかなげの歩みもて、孤り烏露々と辿れる樣の、何となう、母戀ひわびて泣きつゝも、道さがすにやあらむと、あはれにいぢらしう思はれて、暫し小籠にとめおき申候。妹は、いつか花の蔭にて見たることこそあれ、たしかに美代樣の託の御手飼ひよと申し侍り候。いづれは花吹雪地にしけば、紅葉の足痕うづもれて、かへらむ道も失ひたる、あはれにやさしきものにて、思はずもこちらの庭に迷ひこみたるものとこそ存じ候へ。さぞや心細からむを、まして怜悧しきタマのともすれば戯れもやせむを。さあらぬうちにと、とりいそぎ御送り申しあぐるにて候。さらば

（雨評）優美にさの工夫はよし。今一層輕妙なる事のありたき心地す。

◎朝のひととき　品川　繁子

ふと目醒むれば、櫺子よりはほのかに光りさし入りて、はや六時近き頃なり。板戸引き明け、洗面にと立出づるに、あなめづらかなる今朝の霜の白さよ、咲亂れたる黄菊、白菊、をさたる、畑の大根の青青と生立ちたる柴におきたる、散りつもりたる、木の柴におきたる、うつくしくまた、あはれなり。眞清水の井よりはゆら〳〵と烟の立上りぬるもくみおける水に薄氷りしたるは、冬のしるし見えてをかしけれ。散り殘りたる、庭の紅葉の數多きが、黄に、紅に、さまざま、染め出て、松、杉の青きに、枝を交へたるさまの、いとうつくし。たどりて裏の枝折戸より出れば、實のりよき稻は、はや、畔道にうづ高くつみ上げられ、案山子の處々に淋しげに立ちたるも、おもしろし。向ひの岡の上に、朝霧の中より、雪の白妙重ねきし富士の高根の日に映してそびへたる、常ならず崇高く神さびたり。彼方の道を、農夫の打ち連れて語り合ひゆくも、樂しげなり。此方の堤を、すさまじきひゞきして、今滊車は走り來りぬ此寒き朝、彼の車に乗れる人々は、何地指して行くらんか。親に分れ、子に離れ、妻に別れ、友人にわ

かれ、樂しみてゆくも、哀みて行くも、各々行く方は一つならず。思へば、是れぞ、浮世の因果をめぐる小車のそれなりかし。苦樂共に常なき世と、唯茫然と佇む折しも、近き會社の汽笛の音に驚けば、はや日も高く、人の往來も繁くなりぬる。

（雨評）筆は先づ整ひたり。

◎煖　東京　毛利まつ子

三毛がニアーンと鳴く。「モウ一つ遍」と云ふと、又ニアーンと鳴く。姉樣が「モウおやりなさい」とおつしやるから、し方なしに、ミルクの皿を下に置くと、小猫が傍から飛出して來て、二匹で一所に仲良く飲んで居る。久し振りでお艦から歸つていらしつた兄樣は、不思議さうに「上手だね、誰が教へ込んだの」と云ひながら、見ていらつしやる、自分の胸には、少さな自負心が覺えず湧き上つて來る。母あ樣はランプに向つて、兄さまがお土産の林檎をむいていらつしやる。ストーヴの前のお父樣のお顏は、もえ盛る焔に照つて、半面眞つ赤、額も、鼻も、白いお鬚までが。木枯すさぶ戶外の摸樣では、今にも雪が降り出しさうだのに。まあ、此の室の煖い事。

（雨評）一寸暖い。

◎古城　長野　志水斐子

嗚呼、深志の古城、今は落ぶれ果てゝ、只五層の天主閣のみ、其儘、雨もり風襲ふにまかせて、巍然寂然と雲に聳えて、四百年の面影を止めて居る。其のかみ、水野侯の榮えたりし世に、數百の御殿女中ともが紅の裳ひるがへしひたはむれたりと思しきあたりは、中學校の體操場となりて、勇ましき掛聲のたえ間が無い。封建の形身なる古濠の中には、蓮の枯葉が寒さうに漂つて居る、仰げば、月見櫓の張り出で居る、欄干の上には、古松が折からの風のまに〳〵何事をか物語つて居るのである。聞かまほしきは其の物語り。

（雨評）結句が氣がきいて居る。

〽〽〽〇友の許　越路　田中清子

御玉章うれしく／＼拜見いたしました。ほんとに月日のたつのは早いものね。學校のあの運動場で遊んだことなど、まるで夢の様、もはや七年のむかしと相成ました。若木の柿も實るといふのに、私など何時も／＼なすこともなく空しく月日を過して居ては、あとでをしんで居るんでございますよ。いくらゑらひ人でも何でも、月日をよびかへすことは出來ませぬわね。これからこそはと、とき／＼思はないでもございませぬが、やはり、なまけものゝかすにはもれないと見えまして、ぶら／＼遊んで暮して居りますの。でも、身体はごく／＼丈夫で居りますから、はゞかりながら御安心下さいましよ。まあ春子さん、ほんとに／＼御なつかしいことね、私のやうなこんなつまらぬ者をも、かくまで御思ひ下さいますと、誠にうれしう存じます。あなたが御さびしいことも十分御察し申上ますよ。私もね、こんなところに居りますから、いつも御寫眞を取り出しては、ありしむかしを忍んで居りますよ。あなたなんか東京も御近いし東京には御友達も入らつしやいますから、すこしはよろしいでせうが、私などほんとに心ぼそふございますわ。なつかしい母校の地をはなれました折は、さびしうは思ひましたが、皆様がたの情ぶかひ御言葉などで、やう／＼それもうすらひで居りましたのに、こんどはまた皆さまがたとも御別れして、こんな、友もない片田舍へ參りました、何の因果でせうね、たゞでさへさびしい越路の冬を、こんな地で過しますこと。いづれ、何處かで、共に手に手を取てむかしを語る折もあるでせうと、心まちに待て居りますよ。私ねまだ相變らずでくだらない遊藝なんか習って遊んで居りますの。琴の先生も長岡からですから、大變めんどうですよ、ほんとうにね萬感胸にみちたとでも申すんですか、心ばかりあせつて筆はさもなひませぬよろしく御察し下さいまし。御無沙汰の罪はごふぞ／＼御ゆるし下さいましよ。それからね、また御無心よ、何だか御察しなすつて頂戴な、わからなくて？　あのね、御寫眞よ、もし其後のが御身許にありましたら一葉御めぐみ下さいな何がなんだかめちや／＼に書きつけました亂筆のつみは御ゆるし下さるわね、時節がら御からだ御いとひ遊ばしてね、さよなら。　きよ子

〽〽〽〇暖き心　東京　中村千代子

日頃親しき我友は、馴れし都を後に見て、寒さつよしときく宇都宮へ移轉せられぬ。都すら斯さむきに、いかに彼地は寒からむと、霞き渡す庭のおもの霜を見るにつけ、一しほ友の上を偲びをる折りしも、小包は屆きぬ。差出し主はたれやらんと思ひしに、あんじつゝある友よりの送りものなりき。何ならんとひらき見しに、暖き眞心こめられし眞綿の數々現はれいでぬ。さむさも日々につのるのみ、何卒この眞綿を身につけて、寒氣にまけぬ様しのぎ給へとのみふみ。こなたよりこそ、あたゝかき品物送りあぐべきを、却て送りこされしこそ、はづかしき極みなれ。

いでや、妾も取急ぎ、肩掛にてもあみて送りまゐらせてむ。

ゝゝ〇女鑑の君へ　上野　小野里鶴子

親愛なる女鑑の君よ。君と交り初てより、日月の流れいと早く、はや一年にならんとす。妾不幸にしてかゝる山里深き賤が家に生れ出で、高等小學卒業後は、希望の胸にみちけれど、浮世のまゝならぬ習にて遂に希望の光明を辿るを得ずして、のぞましからぬ家業をせざるのやむなき身とはなりにき。あゝ、この大み代に生れ、寒村へき地にこもり居る身の悲しさよ。せめては女子らしき事の一つも習度とは思へども、學ぶに師なく、はた語るに友なき悲しさに、詮術なく家業を務め居たりき、一日己病の床にふしたるに次第に重りて半月余りをすごしたりし。其が間、慰めくるゝは父母君のみ。一日、父他出し一册の雜誌を求め來て賤が女にあたへられき。うれしくながむれば、すなはち女鑑の君なりしよ。あゝ女の鑑、いかなる事のあるらんと讀みもて行けば、一句々々女子に適切なる事のみ。賤が女は、實に暗夜に燈火を得たる心地して、うれしさよろこばしきたとへんに物なかりき。實に親の恩の今更にかたじけなく、夜すがら涙にむせびし事もありしよ。其の後引つゞき君を求めて師友とせり、終日家業を勵みて夜に至れば直に君は賤がかたへによせられて一日の勞を慰めくるゝなり。君によりて己が心の欠點を悟りし事も少なからじ、げにうれしき良師友よ。あゝ其の効や多大なり。妾は長く君を師友として親しまむ心れがはくば君もますます誠心こめて山家に住める妾を慰め且つは導きてよ。

ゝゝ〇忘れぬ夜半　秋田　三浦しや子

どんなに待つても弟は歸らぬ。夜はすでに十時を告げたので、父母始め手廻一同は、皆床についてしまつた。自分も待ちかれて燈火をしづめ、うつうつとされむらんとする折しも、靴音高く響いて、ガラガラと戸を開くのに、忽ち目がさめた。あゝ、若しや弟にてはなきかと、顔出し見るに、いとしや、まがひもなき弟は、意氣揚々として入り來るのであつた。「おゝ姉さん」と云はれた我は、嬉しさなつかしさに、止めやうもなくて、涙があふれるのみであつた。

彼は旅行歸り只一日休みを以て、故郷に病める此姉を見舞に歸へつたので、思へば實にありがたくも亦たのもしい次第である。

やがて、皆々床をはなれて、たのしく語り合ふ秋の宵、軒端にすだく虫の聲さへ、いと面白く聞こゆるのであつた。

ゝゝ〇十一月三日日記の一節　横須賀　大澤まき子

十一月の三日、此の佳辰は、妾等日の本の國民、こぞつて御祝ひしなければならぬ日であるのです。妾、學の園に、いそしみし頃は、恐れ多くも御眞影を拜し、教育勅語を承りて、遺憾なく御祝の式をば、すますのでありましたが、家庭の人となり學の園に縁なくなりてよりは、此の事なし能はぬより、妾が居間の床高く兩陛下の御寫眞を御飾り申して、此の日の日出度さを祝ひ奉るのが常でありました。

今朝も早くより起き出でゝ、身を清め、居間の掃除、限なくなし終へあやにかしこきすめらぎの御寫眞をば床に飾り奉り、妾は其の前に端坐して、口の中に君が代を唱ふる事三度、教育勅語の卷物を拜讀したのでありました。

折から聞ゆる、れいろうラッパの音!!!

續いて轟々たる車輪や馬蹄の音が響き渡つて來ました。傍の妹不思議さうにけゞんな貌つきせるに、あれは、練兵場に閲兵式が行はれて居

るのでありますと言ひ聞かせけるに、小供心の堪へかねてや、行きて見たき旨しきりに迫りければ、止むなく妹を引きつれて、門を出で小高き岡に、かけ上り練兵場を見下せば徒步や乘馬の兵士ども一糸亂れぬ整然たる隊伍にて動きつゝあるので、旅團長の君は光りまばゆき勳章に胸を飾られつ、猛ましげなる肥馬に跨り嚴然と此を閱しつゝあるのでありました。

○我が里の新年　東京　倉重千惠子

氷解く風も、枝をならさぬ大御代の、年立ち返りぬれば、雲の上もはれ〴〵しう見えて、春の霞も紫に薄く濃くたなびき、日の氣色もうらゝかに光さやけく見ゆ。百千鳥は早軒に君が代の千代を囀り、萬づ皆心あるさまに、枝になかりし梅花も、いつしか蕾を開き、垣根の千草も青み渡り、庭の松が枝も軒の竹の葉も一きは色こく見ゆる心地ぞする淋しさを習ひと住める山里も、花に紅葉に人の訪ひきて賑しき時こそあれ、冬も更け行きて御雪てふものの降り出ては、訪ふ人もなき賤が家は、いよゝ淋しきに、只折々に訪ふものとては、風に散り來る木の葉の亂れ、さては、御山木陰れに塔のみぞ見ゆる山寺に遠くも響く鐘の音のみ。さばかり淋しき我が山里も、御代の惠は都と共に、連れて枝に榮ゆらむ。常には見るかげもなき賤が身も、峯の鶯の行末はるかなる聲にてうたふを聽き、谷の若水掬ぶを得たるこそ、うれしけれ。門には早や廻禮者の聲もきこえつ、老も若きも今日を晴れと着かざり、男の子女の子のまりなげ、うたがるたに餘念もなう日の暮るるも忘れて遊び興ずるも長閑なり。

げに、古へ人の、住めば都とのたまひしも、宜なるかな。

山里の新年。げに樂しくうれしき山里の新年。車の軋る音さては馬のいなゝきをのみきゝなれ給ふ都人は、思ひもより給はぬ事なるべし。我山里の樂しき新年を。あゝ樂しき我里の新年。

新體詩

日本女子大學教授文學士鹽井雨江先生選

天

梓弓　東京日本橋蠣殼町一ノ四大海方　三輪千代子

月は昔にかはらねど、　花はむかしに匂へども、
かはるに早き人の身よ。　月にも花にも思ひ出の、
恨みはつきぬ鐘の音に、　仇し枕をかぞへつゝ、
亡せにし君を忍びかね、　寂覺の床にひとり泣く。
里の小町とうたはれし、　昔を夢の身の行く方、
からき浮世の荒海や、　浮きつ沈みつ渡る間に、
いつしか色も香もあせて、　額に波はよせ來たり、
春の柳の丈長く、　みどりにすきし黑髮も、
かれて霜置く秋の果て、　腰には張るや梓弓、

引き返されぬ昔かな。

（雨評）多恨

地

飛騨の空

木曾福島町 畑中樣方　山下とら子

飛騨より來し子守兒にかはりて

見ては戀しい遠方の、　故郷の山に泣きまする。
知らぬ他國の起き臥しも、　國にひとりの母上を、
冬温からさせう爲め。　心はせちにはやれ共、
甲斐なき我は子守兒の、　いつの日それをされやう。
雪は日に降る木曾の山、　見てぞ泣きには來はせねど、
夕、夕、は古郷の、　一位山さへ忍ばれて、
山の國でも飛騨戀し。
いつの日ひとり若麥の咲く、　長峰峠こすじややら。
母に抱かれて、暖かい、　言葉聞く子の幸見れば、
いつも我身のくらべられ、　泣いて見るのが無理かいな。
歸りたいぞへ、飛騨の空。　今歳も峯に雪が降る。
見れば、戀しい懷しい。　歸りゆきたい、飛騨の空。

（雨評）可憐

人

春雨

下總佐原町篠原大崎鎚一方　大崎ひさめ子

溢蛇の目、うしろ姿に、　山茶花の薫のこして、
しとやかに靜々とゆく、　たをやめの頰をさらりと、
さらさらと、ひときさあめや。　ぬかるみに裾しめしては、
春さむみ畔をとぼとぼ、　美しき京の若い子、
名はお冬、年は十六、　樣のため、祇園に參ゐる。

（雨評）艶麗

秀逸

◎○うしろで

大阪　木村春江子

七曲り、吉野の奥の楢木立、　つま手に輕き裾とりて、
見しらぬ人の先きを行く——」
小さう結びし丸まげの、　根ひくき髮も似あへるを」。
添ひねの胸をおし開けて、　姉を泣かしし、みなし子の、
我は十九より浪花津の、　市人の妻となりぬれど」。
櫻の名なる櫻塚、　花なき山に分け入りて、

寂しく見つけしうしろ影」。
梢まばらに日光は透きて、衣の文さへ見えながら、
かけよりがてや、老木の、根からみつよく
——人は行く——」
「願ふはあはれ見かへりの(只一め)其まなざしの母
に似よ」
御袖にすがりてたにも泣かましを
なつかし母とゆるせしばしば

(雨評) 詞藻は何處となく麗りあり。されど、あまりに意匠を凝らして、意味の不明に陷る嫌ひあり。一考せられよ。

◎小曲一篇　下總　月沖さゆり子

大空や、碧瑠璃色に、はれ渡り、心のどけし。
たわゝなる、黄金の穗、さゆらぎぬ、微風わたれば。
したゝりは、甘露の珠よ、輝きは、希望の色か。
高鳴れる、胸なる血潮、身も躍る、時は初秋。
白雲は、はるけき空を、いとゆるう、流れ〳〵て。
月の影、しづやかに照る、そのあたり、虫の音清し。
心今、夢よりさめて、あくがるゝ、月と虫とに—。
たまゆらよ、勇躍に顫ふ、我心、秋にむかへば——。

(雨評) 想も句も整ひたれど、情足らず。

◎世わたり　伯耆　錦織さち子

落つる涙をそとふきて、心にもなき笑ひ顔、
つらき浮世の波風も、ゑくぼにうけて只管に、
君にさゝげし命ゆゑ、捨てゝも惜しき我ならじ。
手を取りかはし辿りゆく、ゆく手にふちの底ひなく、
退く路はうすらひの、ふまば砕けてもろ共に、
沈みはつべき運命かな、
されども、長き旅路には、愛の泉のかぎりなく、
むすびつきせぬ清水あり、あら、五十年、君と我れ、
かくて半はくれはてぬ。

(雨評) 着想は面白し。されど、未だ大に鍛錬を要するものあり。

◎失題　東京　平塚白百合子

春のさきがけわれこそと、ころほがらかに鶯は、
繪筆榮ある花ぞのゝ、濃染の梅のさゝ枝に、
黄金のつばさやさはりて、春は讚美の歌誦せば、
瑞雲の扉はひらけ來て、よそほひしらせる佐保姫の、

花のみ車きしりいで、世は歡樂のたのしみに、
醉ふてふはるの時は來りぬ。

（雨評）まとまりたれど、ありふれたり。

〉〉〉〇愁思　越路　田中きよし子

今宵はわきて亡き夫の、事のみ思ひ出されて、
寢られぬまゝに只一人、窓おしあけて、眺むれば、
おく霜白き山茶花に、凍るさばかり澄む月の、
清き光に誘はれて、おりたち行けば、ヒーヤリと、
うきよの風ぞ、身にはしむ。眺むるまゝに見るまゝに、
そゞろに落つるはあはれ何、音はじとすれど世はつらく、
泣かじとすれどこぼれくる、心しあらば月かげよ、
汝は知るらん我思ひ、夫がこの世にありし頃、
やさしの君と二人して、ほゝ笑む花の下かげに、
樂し行すゑ語らひつ、自然の御獻を聞きし夜も、
今宵のごとき月夜にて、月はつきじと照らせども、
望み絶えせぬ我夫は、心の花も色そひて、
東風に開かん日を待つゝ、人の世のろふ黒かれの、
サタンのいきや强かりし。アゝ花散りて君逝きて、
浮世の秋の露時や、まがきの菊になく虫も、
思へばもへば過ぎし年、君と聞きにしそならずや。
アゝせよ行きしせの君よ、情し知らば今一度、
影なとめませ此月に、よべどさけべどあなつれな、
戀しき君の御こゑなく、いりに冷たき一雫は、
葉末の露かさては又、君が涙かなづかしと、
たゞ仰ぎ見る空は澄み、連れ行く雁六ツ四ツ五ツ。

〉〉〉〇初聽鶯　東京　倉重千惠子

まだ消えのこる白雪の、去年のまゝなる我宿の、
軒端の梅はほころびて、折り知り顔に匂ひける、
手折りて生けてと思へ共、初音またるゝ鶯の、
鳴かぬ限りはさすがにも、女心のつい弱く……。
折りしもあれや、窓近き、竹のさ枝に移り來て、
まだ里なれぬうぐひすの、二聲三聲訪づれぬ。
深山の中をあとにして、梅が匂を慕ひ來ぬ、
習ひ初めたる法華經の、片音まじりの愛らしさ。

〉〉〉〇夕暮　神戸　錦本靜子

夕はへの空うつくしく、かたぶく日影うすらぎて、
入相つぐる鐘の音も、靜かにひゞきつたへつゝ、
餌をあさりに群ゐたる、すゞめが、風のすさびたる、
鳴子の音におどろきて、たちまちなきて、彼方なる、
草の中にぞかくれける。夕ぐれいそぐ畷道、
背もかるげなる駄馬の、里へといそぐ、いとうれし。
空をあふげば、雁かれの、二つ三つ四つうちつれて、
月かすむれば、うす雲の、綸かさばかりに思はれて、
吹き來る風の肌にしみ、光りさびしき秋の月。

〇新年祝

上野　小野里鶴子

都もひなもおしなべて、
家の門ごと立てつられ、
新年祝ふうれしさよ。
東の空に雲晴れて、
いとあきらけくしづかなり。
君が代祝へ千代八千代、
雲井に高くかけまはる、
最うれしげにさへづるよ。
東にかすむ富士がねも、
雪を頂き悠然と、
香りも床し梅の花、
いとうるはしき日の本の、
岩に激する水の音も、
耳あたらしく聞ゆなり。
明らけく始まるみ代を指折りて、
二年の春となりにけり。
いとも目出度き大み代に、
ますます駒にむちうちて、
堅忍不抜の心根に、
この初春を祝ひつゝ、
ますます起せ我が民よ、
千代に八千代に祝ふべし。
國旗は軒にひらひらと、
みどりも深き松竹を、
豐榮のぼるあさ日影、
四海同胞五千萬、
目出度く祝へ大御代を、
あまたの鳥に至る迄、
けむりたえせぬ淺間山、
北にそびゆる赤城嶺も、
操も高き松ともに、
うごきなき世ぞ示しける。
新玉祝ふ樂譜かと、
かぞへて來れば四十有、
幾萬代もかはりなき、
生れ出たる國民よ、
不撓不屈の精神もて、
大御惠に報ゆべし。
いざ立てふるへ國民よ、
鼓腹ならして君が代を、



東京帝國大學講師　佐々木信綱先生選

天

◎◎山家の春　橫須賀市深田七番地　柏原美奈子

丁々と斫ひゞきぬ杣の人は
年の初斧今かうつらし

(評) 山の奥にも新しき年は立ちて、斧の音ほがらかなるべし。

地

◎◎月夜梅　清國南京　福田つる子

笛ふきて柴の戸たゝく人もかな
梅のこずゑに月おぼろなり

(評) みやびかなるあるじ住むらむ、柴の戸いとなつかし。

人

◎◎望郷　伯耆米子　錦織千代子

母やいかに打仰ぐ空に十六夜の
　月美しきふるさとのかた

（評）景あり、情あり、佳作。

秀逸

◎初日をまつ

山上の古塔の影に初日まてば
　湖上十里はむらさきにして

下総　小澤まゆみ子

◎折にふれて

飾りして庭に伏せたる臼の上に
　鶏なき唄ふ新年の朝

相模　服部八重子

◎題しらず

小春日や菊の虫とる翁ひとり
　百舌がれ高うひろしづかなり

東京　平塚白百合子

◎

秋晴や目路はろかなる遠海の
　白帆かぞへぬ小松の丘に

岩代　岸野つれ子

◎雪

朝寒み窓の戸あけて眺むれば
　遠方山は雪ぞ降りける

木曽　山下さう子

◎

百の船港を出でゝ波靜か
　小春日高し遠の島見ゆ

美濃　呉　みせ子

◎海

風はらむ白帆の船の遠近に
　見えて美くし夕映の海

美濃　遠山よしの子

◎妹

白梅をかざして立てる少女子の
　眉美しき新年の朝

下総　月沖さゆり子

◎新年の海

朝霧の晴るまに／＼海原の
　波新しき音立てゝ來る

東京　紀藤榮子

◎折にふれて

むつまじき島の少女のかたらひを
　吹きや來ぬらん海の朝風

美濃　芳翠敏子

◎海

與謝の海遠かすみして松木立
　春風ふきぬ君とゆくみち

美濃　平岡かん子

◎失題

笛ふけば羊つどひて牧場原
　草の香たかし月ほのめきぬ

美濃　長濱鷗子

◎折にふれて

美濃　目島まさ子

讀者文藝

松かさの落る一つも身にしみき
君と別れし磯の眞砂路　飛驒南　みれ子

◎歳暮

いと長き母の病の癒えし身には
ゆく年さへもうれしかりける　東京牧　千春子

◎冬の夜

埋火をかき起しつゝ思ふかな
我故里の夜半のまとゐを　美濃　傍島みゆき子

◎冬の畝に

江の村や霧の中なる燈火の
ゆれてもひゞくさ夜きぬたかな　須磨　有村かよ子

◎夕日

須磨みうら淡路しまれはゆめのごと
歸る帆の上に夕日かゞやく　岩代　岸野常子

◎木枯

天そゝろかみの岩山いはがねの
木立にさわぐ木枯の風　河内　竹内敬子

◎落葉

日あたりの軒に眠れる犬の子の
せなにちりくる落葉淋しき　美濃　牧　幾美惠子

◎雪の朝

酒男米とぐ軒に村すゞめ
つどひきて鳴く雪の朝かな

美濃　牧　かれ子

◎雪の黄昏

雪だるまみるまにやせて片町の
夕日さびしも鷄の聲　岐阜　傍島敏子

◎落雁

うきみ堂月かたぶきて大津町
家並いれたり落雁の聲　兵庫　石　子

◎庭梅

初日かげさしそふ庭の梅の花
春をもまたで咲きそめにけり　佐賀　藤松りか子

◎山家新年

生ひぬるを其まゝ門の松にして
年を迎ふるやまの庵かな　神戸　足立あさ子

◎春の面かげ

霞たつ波間にうつる鏡山
まだ幼なき春の面かげ　神戸　足立ゑい子

◎試筆

取り初る筆のはやしに此春の
こと葉の花を咲せてしかな　樹口雪子

◎白梅

都なる妹がことほぐ文に笑みぬ
白梅さむき山の湯の宿　神奈川　飯田榮子

◎折にふれて

山姫がけはひの水のこぼれ來て

秋の野べゆく川となりしか

◎木枯　上野　小野里鶴子

名残りなく紅葉もいつか散りはてゝ
肌に寒う木枯の風

◎時雨　東京　白井好子

刈りはてし田づら淋しく暮れそめて
かゝしの袖にしぐれふるなり

甲

○雲のゆきゝ　岩代　岸野せい子

枯野路や鷹の物食ふ枝の上を
雪ふるらしの雲走りゆく

○木枯　茨城　金澤すゑ子

五人のわがはらからも月すごき
今宵の今や父上こふらむ

○寒月　大阪　木村ゑい子

辻うらの鳴子の音もきえにけり
霜月寒き月のよごろは

○雪の松島　東京　芦原浦子

古さとのふみのたよりにきくにだに
うれしかりけり雪の松島

○歳暮　兵庫　島　久美子

昨日と過ぎ今日と暮して今は早や
のこり少なき月日なりけり

○紅梅　美濃　武田友子

雪やみて夕日かゞやく賤が家の
軒端にもゆる紅梅の花

○玉川　美濃　傍島小枝子

若あしの白根ひたせる水せぎに
家鴨あそべり玉川のさと

○　群馬　小野里さくら子

朝飯炊く家毎の煙りたちこちの
山にかゝりて霞とも見ゆ

○夕日　東京　平塚つゆ子

銀杏ちるやもり歌ひくき山寺の
鐘の音さびし夕日うすれて

○雨の夕　須磨　有村保子

ゆふざればもしほのけむりまつのかせ
あめにたそがるいその一家

○　飛騨　中西よし子

人知れぬ恋いだきて山寺の
庭に結べる霜になく我

○雨中落葉　信濃　志水瑩子

櫨もみぢみちもせに散る小倉山

○秋の水

行く山伏に雨細うして　信濃　志水あや子

みだれ散る峯の紅葉ば織りまぜて
小袖にほしき秋の水哉　岐阜　中村はな子

○

東路や望ゆく方をながめては
父母しのぶ夕まぐれかな　埼玉　横田やな子

○雪中松

千とせへん松の木末に雪ふりて
物しづかなる大内の庭　岩代　岸野菊子

○折にふれて

富士がねをなゝめに三保の初日影
白帆にはえて浪しづかなり　美濃　武田豔子

○心

鏡ごともくもらぬ心さはれたる
時にかすかにくもりおぼえぬ　美濃　傍島曉子

○

蔓草は枯木によりて花さくに
若き我身の永遠に病みぬる　兵庫　湖東澄子

○新年

門松を山にきこりて年むかふ
田舎の春はのどかなりけり　岐阜　傍島眞砂子

○風

吾の如母亡ひてなげく人も
ありやさ夜中の風をきくかな　美濃　渡邊ひろし子

○海

君が島へ落花の村へ白鳥の
あまた渡りぬ夕映の海　埼玉　横田秋子

○雪中松

海ちかき濱の宮入の園の松
風ゆたかにも千代もふれゆき　東京　萬屋雪子

○

琵琶の音はいつしか絶えて高殿に
燈細く雪降りしきる　埼玉　横田やな子

○都初春

色ごれるあたごの嶺の薄霞
國の都の下萌なるらむ　埼玉　横田秋子

○霞海山

吉野山木末をすへてくまごれる
霞ぞ國の下萌なりける　神戸　綿本靜子

○

聲さむしもみぢの錦吹きたてゝ
松にぞのころ峯のこがらし　岩代　岸野さよ子

○

旅に病みて一夜宿かる山寺の
芭蕉にさむき夜中の雨きく

○　　　　　　　　　　横須賀　渡邊比佐子

さりないて梅の花咲く蓬の村
　初日靜かに去年のまゝなる

○春曉霽　　　　　　　埼玉　横田稻子

ふじのねや田子の浦波うちかすみ
　春のどかなるうき島が原

○　　　　　　　　　　長野　清水あや子

珠と散る波のしぶきに七彩の
　にぢ浮ぶなり諏訪のみづうみ

乙

○山家新年　　　　　　東京　倉重千惠子

松竹はめづらしからぬ山里も
　さしたつ今朝は門にたてつゝ

○失題　　　　　　　　美濃　牧つれ子

美しき心なりしもいざよひの
　春をかぎりの我なりしかな

○山家の春　　　　　　和歌山　喜代子

萬歳や腰鼓の音の面白し
　たどる山道雪眞白なり

○水仙　　　　　　　　新潟　岩本芳子

雨の夜を舍人めします聲のして
　寮の御庭に水仙の咲く

○秋の夜　　　　　　　近江　柚木音羽子

なき夫のわすれがたみやいさし子の
　寢顔見守る秋の夜長さ

○折にふれて　　　　　旭川　佐藤央子

には鳥の聲のみ遠く聞ゆなり
　霞の奥のはるのむら里

○暮秋の森　　　　　　名古屋　高橋かき子

落葉ふむ音さへ寒みまだらなる
　もりの木立に夕日うすれて

○折にふれて　　　　　東京　白井好子

夕日さすかきねにからむからすうりの
　色の赤きが目たちけるかな

○日記　　　　　　　　東京　中村千代子

新らしき年の始めを定めさし
　日記をかくなり學びやの窓

○夜風　　　　　　　　東京　神田けい子

かるた會くれなゐそめし面わには
　すきもる夜風こゝちよきかな

○ある時　　　　　　　大阪　木村はる江子

大野路や鈍色空に雲掛ける
　逢魔が時よ心そゝろぐ

○世わたり　　　　　　伯耆　錦織さち子

讀者文藝

そこひなき淵にのぞみてうすらひを
　ふみてわたらん秋五十年　横濱　鈴木まつ子

○郵便の配達をみて

嬉しきもかなしきこともこのうちに
　いかにふかくもひそむなるらむ　美作　鈴木鍐子

○曉

曉のけはひほの〴〵城山の
　松にのぼりて星うすれゆく　越後　水野やすゑ子

○雨中落葉

心なき雨さも見まし紅葉を
　昨日は染めて今日はおさして　須磨　有村丈子

○失題

なつかしきそが御君さたゝふたり
　すみてもみまし人なきさゝに　信州　清美津　けん子

○雨夕

云ひしらぬ哀れぞこもろ玉くしげ
　ゆき〻の岡の雨の夕ぐれ　兵庫　湖東靜子

○

何事もみづからをせめて自らに
　なぐさむ我や心のごけき　美濃　原　もさ子

○

君來ますみ船のかじに丸き月
　玉さくだけぬ夕べよき海



内藤鳴雪宗匠選

天

若菜つむ丘に兄弟姉妹かな　横須賀　渡邊比佐子

地

鶯に都の焚火や木挽小屋　岩代國信夫郡鎌田村　木内よし子

人

ほろ〳〵と寒梅散るや琴の音　横須賀　三輪やす子

雨の夜や途切れ途切にチンチロリ　清國　眞壁縫子

荒鷲の何追うて飛ぶ枯野哉　岩代　岸野常子

初空の高さに鶴を仰ぐ哉　横須賀　柏原美奈子

万歳や烏帽子觸れたる雪の松　横須賀　渡邊比佐子

暦繰の醉雲の巻に吹かれけり　相摸　服部八重子
松風の吹くから太さる氷柱哉　神戸　足立あさ子
冬の蝿灰なかぶりて動きけり　神戸　足立ゑい子
凧や擲き出す鮪の片走り　東京　紀藤榮子
雲の上又新しき日の出哉　東京　萬屋雲子
友逝くさ日記の筆も秋のくれ　美濃　原もと子
吹く風に蝶や舞ふかさ落葉する　横須賀　大澤まさ子
萩咲いて妹は都に旅立ちぬ　木曾　千村はや子
元日の床に吹き消す行燈かな　群馬　小野里佐久良子
いさぎよき八こゑや餅な搗き出す　上野　小野里鶴子
鍬入や嶺の板屋に鷄の聲　飛騨　南みれ子
板額も巴も交るかるた哉　岐阜　中村はな子
古足袋をつくらふ窓や菊の花　美濃　傍島小枝子
宵闇やほのかに白し梅か何　岐阜　傍島敏子
元日や白き旭さぶ神の杉　岐阜　中西よし子
男の子擧げて産屋に初日拜みけり　美濃　傍島みゆき子
鷄いささかに見ゆる寒さかな　埼玉　高橋さよ子
白菊は時雨紅葉は夕日哉　大阪　木村春江子
笠されば見知り顔なる時雨哉　大阪　木村ゑい子
七五三張て神々しさよ初日の出　東京　三輪千代子
夕時雨假橋に止みにけり　横須賀　三輪やす子
白き蝶小春の夢を飛で居る
江にうつる影も春なり神の松　新潟　岩本芳子

春風や和歌の浦から舟で來る　和歌山　喜代子
囀りや百鳥の口日に向ふ　岩代　樋口雪子
霜柱ふみくだきたる惡太郎　東京　芦原うら子
灯さもして尙ほ蓬萊の尊さよ　横須賀　小野ゆき子
小冠者か聲はり上げて謡初　横須賀　高橋つれ子

投書籠

本欄〆切後に着したるものにて、例は翌月に廻はすことにしたるが、原稿の年を越させたからずて、校正の際こゝに編入することにしたり。

兼題和歌茅屋梅

○

くだゝけの音も長閑に日は高く梅かほるなり山本の里　越後　水野やすゑ子

○

あばら屋の軒端の梅は咲きにけりこゝも長閑けく春や立つらし　神戸　今西操子

○

靜けさにねぶり催す小椽さき軒の茅ふき梅かをるなり　茨城　增田やい子

○

鶯の音づれさへもたえてなきしづがのきばの梅ぞ咲きける　茨城　山口せん子

○

朝まだき籠の鶯なき初めて春めく窓に梅かをるなり　遠江　須部たまき子

○　和歌山　曾根田素子

きならしゝみの笠かくるかやぶきの傾く軒に梅のはな咲く

○　神戸　今西白露子

新らしき年ほぎ交す茅屋の軒端に匂ふ梅の初花

○　兵庫　梶原玉子

朝風のあくる妻戸に梅かをるあるじゆかしき小田の伏庵

○　神戸　松野みどり子

鶯の初音はいまだ聞えねど
破垣かざる白梅の花

○　遠江　須部たまき子

あら玉の年の初雞音を高み
神代めきたる今朝にもある哉

○　兵庫　梶原玉子

初日かげさすや門べに少女子の
君が代うたふ聲の長閑けさ

○　兵庫　梶原玉子

やゝまたに羽子に手まりさなきな子が
こゝほぎ顔にほゝ笑みにけり

○　和歌山　曾根田素子

人足の絶えて淋しくなりぬれば
わが水汲めりあらたまの空

○　茨城　山口せん子



西窓に去年のなごりの月消えてひがしの空に年たちにけり

○　茨城　増田やい子

初日かげのどかに香ふ賤が家のすゝばむ軒もみしめなりけり

○　神戸　今西操子

霜しろき木の葉は去年のまゝにして今朝新らしく立つ霞かな

○　神戸　佐藤益子

あらたなる年の始めの朝日かげ松のみどりもいろそへにけり

短文

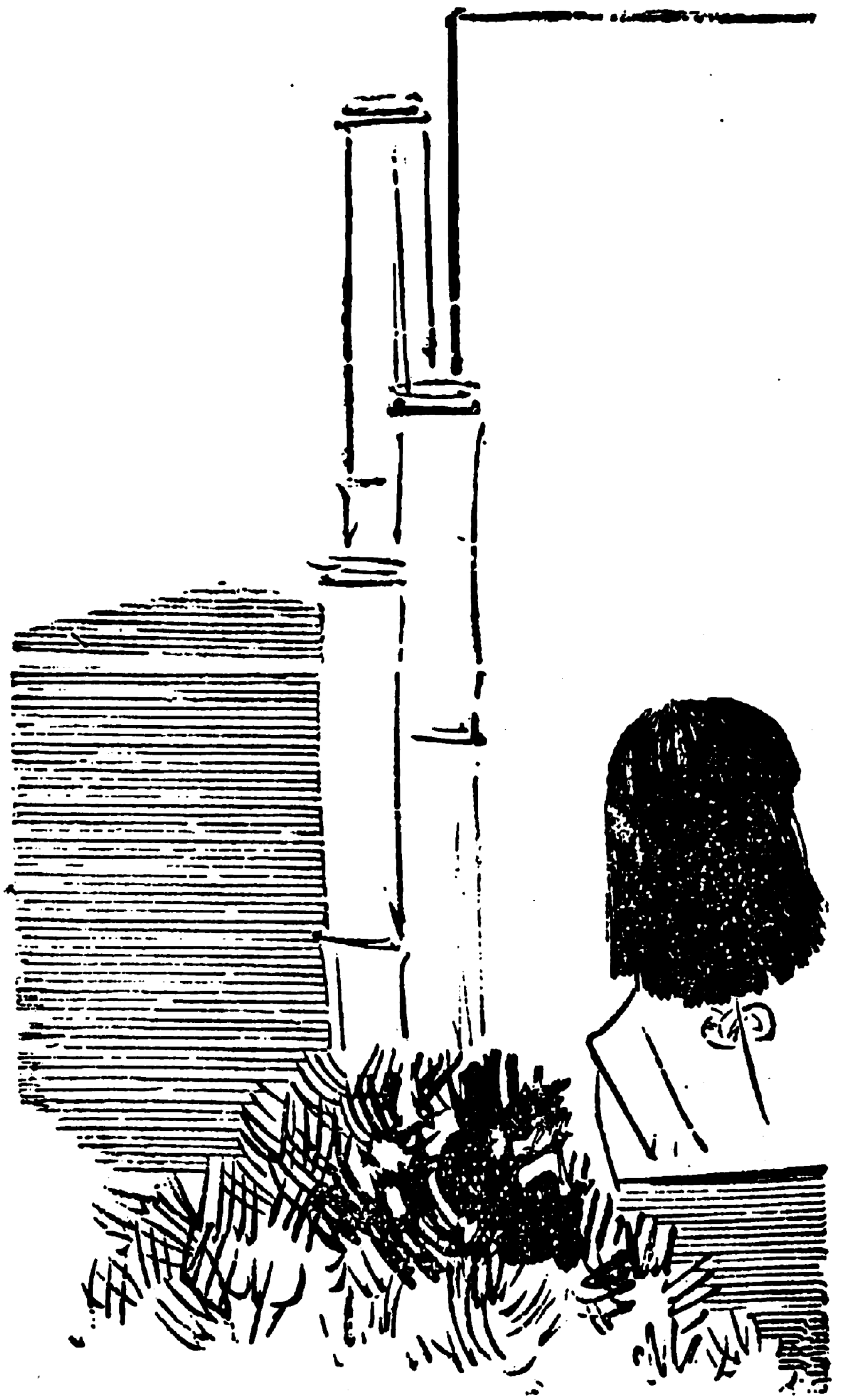
病上り

遠江　鈴木いわ子

たまき樣の送られた黄菊は淡暗い病の床に凋び、折々は下葉が音もなう散る、それも其筈だ、臥てからもー一週間にもなるのだから今日は、何時になく心地がよいので、母の言葉に背て、そつと起き出た。馴れぬのか、足もしどろに心もとない、一つの小石一本の枯草にも、心して、やう〱、庭の隅にある、老銀杏の木に凭れて、力なく、佇めば、どこからとなく、吹いてくる風が、音淋しく、落葉を誘ふて居る。

やがて、顔を上げて見る萬象は、凡て見新らしい、アヽそれも無理はない、この、三月と、云ふものは、全く病魔の捕虜となつて、一歩も屋外に出ることを、許れなかつたので、美くしい秋の色を可惜褥の上のそら想只一度、妹が學校歸りに折つて來たとて、紅葉一枝を、枕邊に、挿してくれたが、二日、過ぎない内に散つて仕舞つた、それで、一層、秋の色が戀はしく思はれたが、致方がない、去年の一昨日は、都の友を誘ふて、裏山に紅葉狩りしたことなど、はしなくも、思の車は、過ぎた年に返つてきて、徒に心は、屋外に遊んで居るのも、情ない。

早く癒つて見たい………とは常に胸の中で繰り返してゐた、今日は幸、心地がよいから、起き出でゝ見れば無情にも、紅葉といふ紅葉は一つもなく散り果てゝ、見るから淋しい冬の寒狀を示して居る、跡



に残念なのは、日頃、どーかと思つて居る、銀杏さへ、一葉も止めずゴツ〳〵とした肌を露はして、形見に殘す落葉にも、黄金とては、更にもなく、霜に、うたれて、朽ちかゝつたのが…………吁これでも一度は黄色になつたかしら…………と思へば、三月は實に長い、病付いた頃は、まだ、眞青く中々散る様子さへ無かつたのに…………人の運命も、また、かくぞと思へば、瘠せた、此身がゾツとする。

夢だ、夢だ、誠に夢だ………湧く様に出る涙は、血に染みて頬を傳ふて、しみ〴〵と胸に、こたへる。

枯竹の破目を吹く響は魂の消る様に凄く思はれる、枯れた柳に、鳴く鶺鴒や、葉なき梢の揺る音、共に行く年を相語るかのよう…………こう思ひつゞけては、見る目、聞く耳、一つとして無情ならざるはなく、今は堪へかねて、袖で顔を、おほふて家に、はいつたが再び褥の主となつた…………吁。

新體詩

春恨

越後　水野やすゑ子

霞める空と地の花と　契るか今宵朧月
流るゝ水の歇ゆるく〳〵　搖づるに似たる風の中
洩るゝは誰の玉小琴
戀の使の白銀の　征矢にあたりしこの胸は
胸の小琴の線たえて　久しきものを怪しくも
高き調に今ひゞく

知るや知らずや「想夫戀」　月の影よりなほ淡き
夢を辿ればわれもまた　響きちりくる花かげに
戀を語りし人あるを
春はやさしき大神の　み腕にすがり暖かき
情に生きてとこしへに　強いて忘れし面影を
夢かうつゝかまぼろしか　嗚呼たえかたの恨かな

歌反古

遠江　鈴木いわ子

母の寫眞

片身の寫眞、妹の　借してたまへと乞ふまゝに
何とは、なしに與へしが　かへさず、なりき、其まゝに
「寫眞」と問へば夫は俯　「かして給へ」と打ち伏しぬ
母の片身の其寫眞　損なはれなば、何とせん
或日、ひそかに、汝が居間　のぞいて見れば、あどけなき
やさしき聲も、したれつゝ　母の寫眞と語り居る

行く年

一夜淋しき窓の下　榮なき運命かこちつゝ
詩筆可惜嚙み裂きて　紅き涙に染めなしつ
思に更ける夜終や　空しく生いて十八の
齢はやがて過ぎ行きて　屑上さるゝ遊や
若き希望の甲斐もなく　僅三年のあこがれも
醒めてあさなき憂氣樞　吁年毎を仇に過ごして

墓詣で

夕わびしき冬の野の　落葉叩く鍬の雨
まだ新らしき墳墓の　石碑かたく、かい抱いて
妹を偲びし涙かも
「美ちやん……なぜに死んだのよ　二人が挿した八重椿、
今年三輪初咲の　色香愛でたき姿さへ
見ずに」……と云ふも力なく　手向けし椿一枝の
蓮の雫の滴りを　何さや受けむ妹の
心も悩れ暮の鐘　餘韻微に消えて行く

短歌

○[illegible]
山里はみ雪ふるらん我が里はさむさ身にしみ寢さめがちなる　和歌山　曾根田素子

○暮秋虫
霜さむみあたり淋しくなく虫のこゑのうちにも秋ぞくれ行く　茨城　山口せん子

○
年毎のみ歌はじめに撰まれて松こそいかにうれしかるらん　神戸　今西操子

○偶成
己が身の蒔きにし種のよしあしに依りてぞ事は生ふるなりけり　兵庫　佐藤益子

俳句

睦じく餅を搗き合ふ二軒かな　遠江　須部たまき子
水仙に佛の像の古びかな
子の寐入り見てそつと出し布團かな
梅咲いて碑を祭るなり畑の中
火をたいて船まつ磯や冬木立
子供等が手叩をする火鉢哉　遠江　鈴木いわ子
冬枯や三軒茶屋の古渡し
筧かへて温泉宿の冬枯るゝ
酒の香や落葉たくなり里の夕　茨城　山口せん子
年きいてしうさゝほさき朝かな　越後　水野やすゑ子
稚子抱いて讀み手となりぬ歌留多會
化粧してわれまた若き松の内

佐々木信綱先生選和歌兼題

◎二月　殘雪◎三月　桃花◎四月　花下蝶◎五月　殘鶯◎七月　雨後蟬◎八月　午睡◎九月　女郎花◎十月　秋田家◎十一月　暮秋虫◎十二月　夜雪。

入江爲守先生選和歌兼題

◎二月　若草◎三月　春曙◎四月　行路花◎五月　雨中新樹◎六月　疎尾の夕顏◎七月　百合◎八月　松下泉◎九月　秋色浮水◎十月　月前菊◎十一月　水上落葉◎十二月　船中千鳥。

恭賀新年

明治四十二年元旦

女子新聞社

女鑑部

編輯員

事務員 一同

女子教育講演會

久しく中絶したりし女子教育講演會は本月より毎月一回開催、諸名家の講演を乞ひて、その筆記は毎號本誌に掲載すべし、而して本誌讀者諸孃はこの講演會に無料傍聽するを得

定價

一冊 前金	貳拾錢
三冊 前金	五拾七錢
六冊 前金	壹圓拾錢
拾二冊 前金	貳圓拾錢

全國遞送無料

廣告料

五號活字一行廿三字詰	四半頁(十六行)	半頁(三十二行)	一頁(六十四行)
特等		二十圓	三十五圓
一等	六圓五十錢	十一圓	二十圓
二等	五圓	九圓	十六圓
並等	四圓	七圓	十二圓

御注文規定

一切前金の事(但郵券代用一割增の事)●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收さ御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替は四谷區霞ヶ岳町卅九番地中川愛氷宛に願ひたし●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十一年十二月廿八日印刷
明治四十二年一月一日發行

東京市四谷區四谷霞ヶ岳町三十九番地
編輯兼發行人 中川良平

東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷人 佐藤保太郎

東京市四谷區四谷霞ヶ岳町三十九番地
發行所 女子新聞社

東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷所 中屋商店活版部

懸賞募集規定

從來の如く、兼題、及雜題和歌、短文、新體詩、俳句を懸賞募集す、その規定左の如し。

すべて天地人の三等に分ち、天は金壹圓、地は金五十錢、人は金三十錢を賞與し、猶選者に乞ひて、特別秀逸の作ある時は規定の天賞一圓以上五圓迄の賞金、又は名家の式紙短冊等を賞呈する事あるべし

投書用紙は半紙に限り、短文新體詩はもとより、兼題も二つとも別々の用紙にしたゝめて、姓名を其傍に記すこと、但し投稿は下段に印刷せる投書箋を切抜いて添ふべし、投書箋は一人一枚に限る、投書箋添付なき者も選に入るを得べけれど賞品を呈せず、

但し一人に付兼題和歌(二)雜題和歌一首づゝ、新體詩短文一篇づゝ、俳句五句迄とす、而して〆切は前月十日までに着するもの。

右規定に違反するものは、入選するも賞品を呈せざるのみならず、其投稿を沒書にすることあるべし

投書家注意

◎投稿は嵩多き時は開封(第四種郵便物として)にて願ひたし、毎回不足税を徴收されて迷惑尠からず。

◎投稿には用紙に天地左右をあけ、少くも綴るに差支なきだけの餘白をあけられたし。

◎投稿用紙は必ず半紙を用ひ、葉書又は並外れの廣き紙また狹き紙、薄きロール紙等は御免蒙る。

◎入選して賞品を得られんとする方は、この頁を隠なく一讀せられたし。

◎投書箋は一枚一人に限る。

◎入選の時、賞品を得んとする投稿者は、此用箋に住所氏名を詳記して、原稿に添付せられたし。

文鑑 第十九年 第二月號 投書箋

投稿者

住所氏名

共立女子職業學校編物組絲主任敎授
豐原繁尾子先生著

組絲敎科書

全一冊

布和綴美本
定價金八拾錢
郵稅金六錢

女子の手藝敎育は年に月に其歩を進め、本年文部省に於て組絲編物、造花刺繡等を、女學校手藝敎科中に編入せられ、其敎員撿定委員を任命し、試驗を開始せられてより、此等實藝に關する世人の注意は更に一層の厚きを加へ、從て之か敎科用及敎授、受驗參考用書籍の需要も亦愈其急に迫れり然るに世間未だ此等諸科の敎科用に適すべき完全の著書なく、就中組絲法の如きは從來職人の間に秘せられ居り、未だ書籍として公にせられたるもの一もあるなし、此を以て敎習共に些の據所なく不便殊に甚し、此書は斯道熟達の豐原先生が、多年の研究熟練により其難易程度を考へ、敎科用に適すべく、又初學者の楷梯となるべく、最初絲の取扱方より、順を追うて羽織紐、帶止等其他種々の組紐、打方を一々圖によりて詳述せられたるものなれば、眞に世間無比の珍書といふべく、敎科用にも、家庭自習用にも、又敎授及受驗參考用にも、必缺く可らざる良書なり

左記書籍も亦各專門諸先生の筆に成り、組絲敎科書と同樣に編纂せられたるものにて、手藝に志す人は必ず一本を備へざる可らず

共立女子職業學校編物組絲主任敎授
豐原繁尾子先生著

編物敎科書

全一冊

定價金五十五錢
郵稅金六錢

前同校刺繡主任敎授
木村仲子先生著

刺繡敎科書

全一冊

定價金五十五錢
郵稅金六錢

發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 （電話新橋八八番、二六九三番）（振替貯金口座壹壹七八番） 株式會社 國光社

大賣捌 ◎東京 東京堂、東海堂、良明堂、至誠堂、須原屋、北隆館、文魁堂、春祥堂、上田屋、榮進館◎大阪 東區北久太郎町積文社◎名古屋 星野書店

久能木式石油暖爐と厨爐

專賣特許第一〇三三二號

二號形厨爐ニテ僅二十分間ニ二勺ノ石油デ一升ノ飯ガ炊ケ魚ヲ煮又ハ餅ヲ焼クモ臭クナシ石油ハ普通ノ者ヲ使用シ無烟無臭ニシテ火力強大ナル事ハ實ニ弊店多年研究ノ結果ナリ且ツ點火ノ際胴ヲ取外サズ點火シ得ル故取扱尤モ便利ナリ

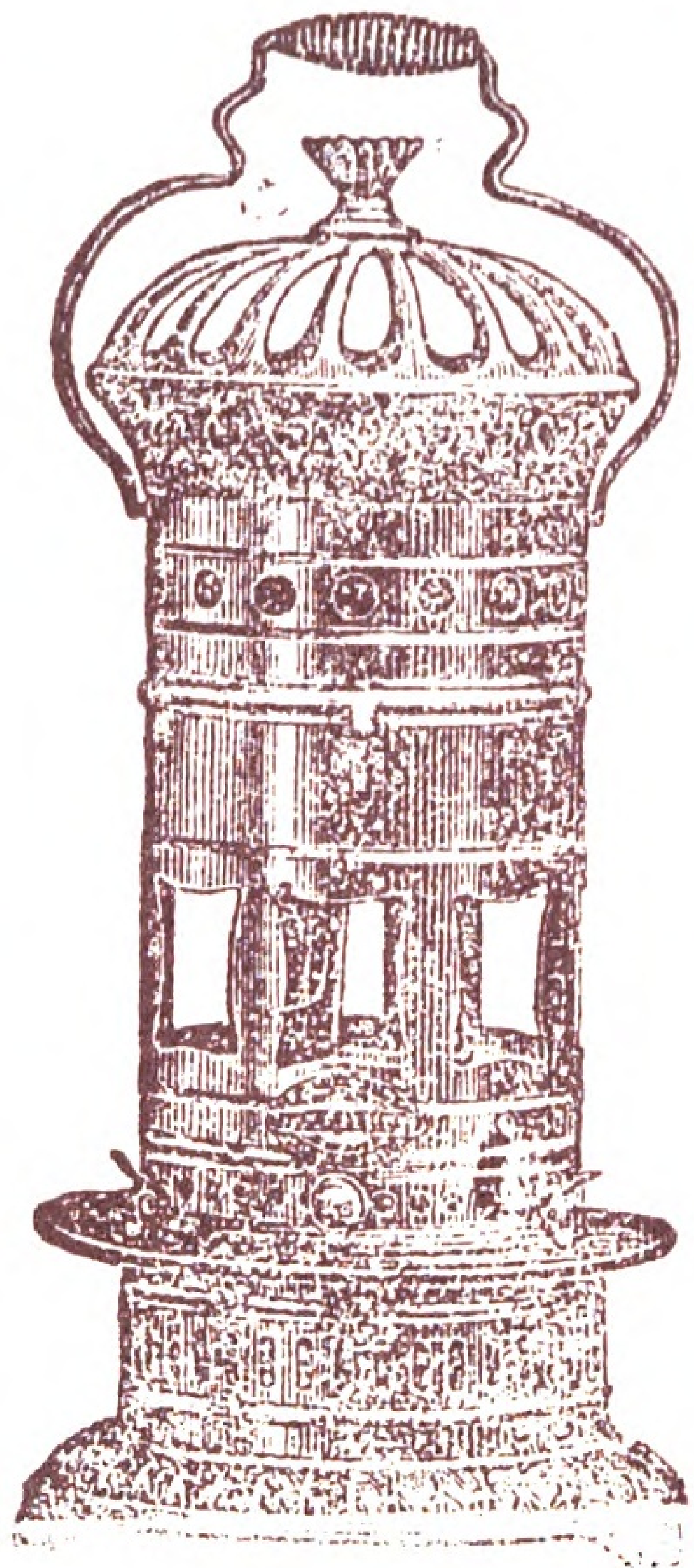
目錄御入用ノ方ヘハ御申越次第送呈

定價

一號形　金二圓[illegible]十錢ヨリ各種

二號形　金三圓[illegible]十錢ヨリ各種

三號形　金三圓八十錢ヨリ各種



暖爐ハ最モ美麗ナル構造ニシテマッチニテ點火スレバ直チニ強熱ヲ發シ[illegible]無烟無臭ニシテ八疊間位ニテ二十分間ニ[illegible]十度トナシ一時間石油ノ消費高僅ニ八[illegible]ニシテ衛生ト經濟ヲ兼備ス

定價並製　金五圓半

定價上製　金拾圓

切取線

本券ノ有効ハ二月末日限リ此ノ券切取リノ方ヘハ定價ノ五分引



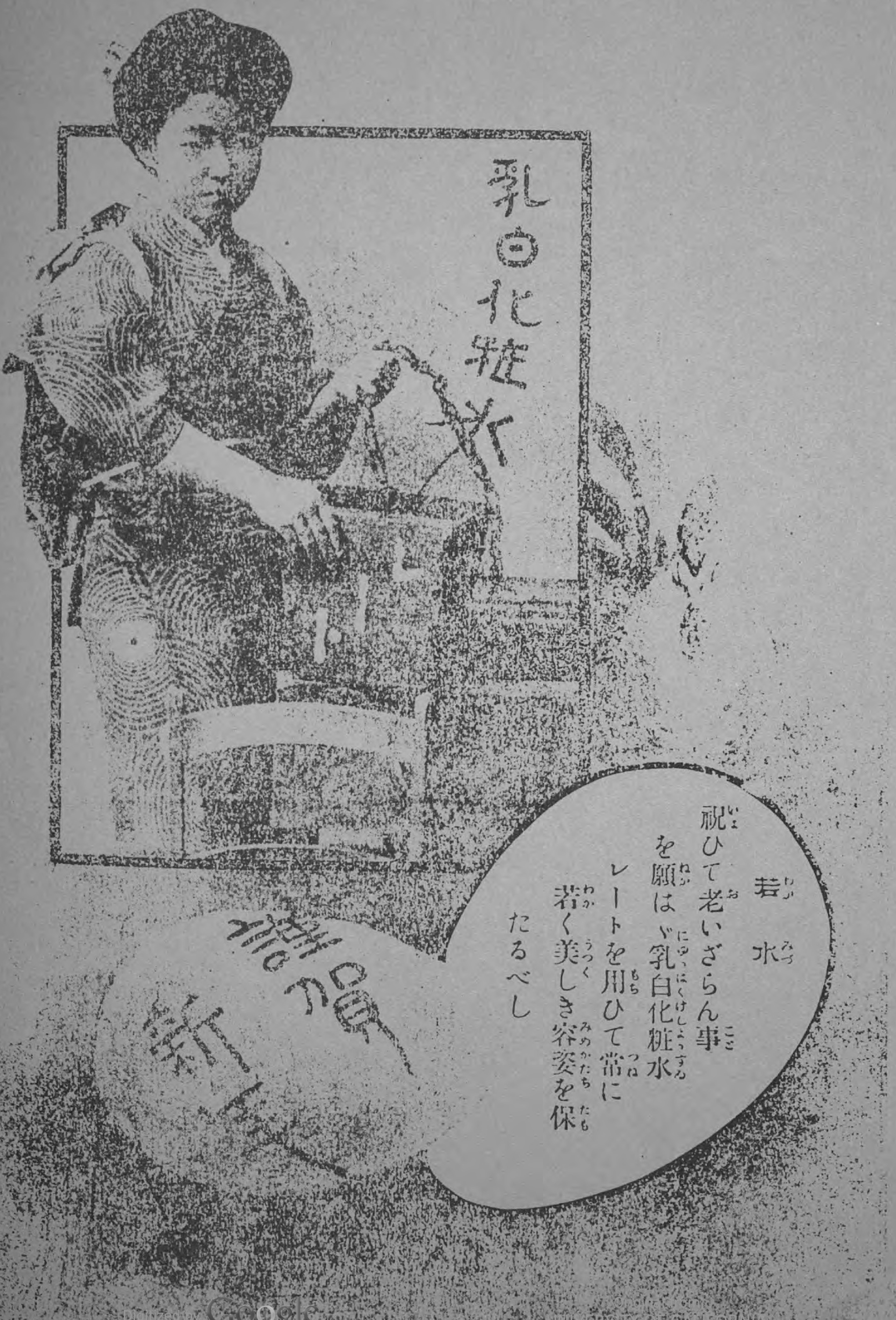
製造發賣元　東京日本橋室町　久能木商店　長電、本二八九番　振替口座一四五七番

關西出張所　大坂北區曾根崎中二丁目　片山商店　長電、東一一五四番

京都代理店　京都四條通高倉角　富本商店　電一七二番

女鑑

明治四十二年一月一日發行　毎月一回一日發行　第拾九年第壹號
明治廿五年三月二十日第三種郵便物認可



東京中屋印行